

---

# 女装男子が送るけいおんライフ！

水夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女装男子が送るけいおんライフ！

### 【Nコード】

N8704P

### 【作者名】

水夏

### 【あらすじ】

性別と名前を偽って女子高に侵入した男の娘が、部員でもないのに軽音部に入り浸って、唯達と一緒にバカ騒ぎするだけの話（まれにシリアスな話も含む）です。以下注意事項↓ 主人公が変態道に堕ちました。セクハラがライフワークみたいなアホの子に。 性格改変注意（主に薄しゃんが）。 □ギャグ補正（主人公補正とも言う）がケアルガ級。 ■メタ表現に注意。

## 第1曲〜自己紹介的な何か〜

「はるちゃん。私たち、軽音やってるんだよ！」

「けいおん？ 何それ可愛いのか？」

「バンドだよバンド！」

「ああ。モンスターを狩ったりするアレね」

「それはバットだよっ！」

「いやハントだろ」

## 第1曲〜自己紹介的な何か〜

時は遡って数分前。

「何やってんの唯？」

トイレから帰って自分の教室に戻ってみると、唯が机に向かって何やら紙に書き込んでいた。ふと気になって、覗き込みながら声を掛けてみる。

「あ、はるちゃん。今ね、ビラを作ってたの」

と、いつものポヤヤンとした、見ていて力が抜けるような笑顔で唯が言った。見た目が美少女なだけに、この先悪い男に騙されないかどうか心配になってくる娘さんだ。

「ふーん。下着を量産してるのか。性が出るね」

「それはブラだよ！ しかも“性”じゃなくて“聖”だよ！」

「なんと！ それは神々しい！」

君はコスモを見たか！ なんて冗談はさておき。正確は“精”だ。“聖”なんて出したらファンタジー世界の住人になってしまうぞ唯

よ。

「ていうか、口に出したら全部同じだよな」

「あ、それもそうだね」

アヘウフフと笑い合う僕と唯。どうしてアレでお互い伝わったのかなんて摩訶不思議は、この際下水にでも流して気にしない事にする僕達なのであった。天然ってすばらしい！。

「いやはや、相変わらず唯のボケは切れ味が鋭いですな」

「はへ？ 私、別にボケてなんかないよ？」

「……………」

無自覚…………？ 唯、末恐ろしい子！

「それにしても、はるちゃん遅かったね。休み時間になってすぐ教室に出て行つたみたいだけど、どこ行つてたの？」

「ちよつとお花を摘みにね。途中で迷つて戻つて来るのに時間が掛かったんだ」

「あー。はるちゃん、まだ転校してきたばかりかだもんね。トイレの場所、迷っちゃったんだ？」

「いや、花壇を探しに行つてただけ」

「ホントにお花を摘みに行つてたの！？」

と、大袈裟に手を広げて驚愕して見せる唯。まあ、嘘なんだけど。正直言つと、未だに女子トイレに慣れていないせいで時間が掛かっただけ。

なんせ、見た目はどこにでもいる普通の女の子（唯と同じくらいの背丈にセミロングの黒髪。しかも顔は女顔な上に声はソプラノのような高音）だけど、こう見えて実は立派な男の子だし。

そのへんの事情は話すと長くなるので割愛。兎にも角にも、男の子が女子高に忍ぶ込むのは大変だという事だ。体操服に着替える時なんて、そりゃもう難行苦行な事なのだ。

って、僕の話はどうでもいいか。

「そんで？ 何のビラ作つてんの？」

「あのねー、新入部員勧誘のビラ作つてたんだ」

「ん？ 唯って部活やってたんだ？」

「そうだよー。それで澪ちゃん<sup>みお</sup>の作ったビラを見本に私もビラを作ってたんだ」

澪というのは、唯の友達でよくこの教室にも遊びに来る美人な同級生の事だ。しかし、動作がとろい唯までビラを作ってるって事は、人手不足なのだろうか？

「部員少ないのか？ ひよつとして」

「んー。どっちかと言うと少ないかな？ 他にムギちゃんにりつちやんもいるけども、その二人は他の準備で忙しいから……」

「つまり合わせて四人だけか……」

確かに少ない。ギリギリ部が存続できる人数じゃないか。

「なるほどね。そりゃ新入部員を得るのに頑張らなきゃな」

「うん。頑張るよー」

ほわゝとした笑みを浮かべて唯は言う。うん。見ているだけでやる気が吸いとられそうな笑顔だ。唯は新種のチュパブラなのかもしれない。今度モンスターボールでも投げつけてみよう。嘘だけど。

「ところで、唯は何の部活に入ってるの？ 新大陸発見部？」

「そんな部あるの？」

「いんや、言ってみただけ。」

「はるちゃん。私たちね、軽音をやってるんだよ！」

「けいおん？ 何それ可愛いなの？」

「バンドだよバンド！」

「ああ。モンスターを狩ったりするアレね」

「それはバットだよっ！」

「いやハントだろ」

バットって何だよ怖えよ。そのバットでオヤジでもハントする気か。しかもせっかくボケたのに、思わず僕の方がツツコンでしまったじゃねえか。唯の事だから、どうせ噛んじやっただけなんだろうけども。まったくかわ唯、もとい可愛い奴め。

あ。今更ながら申し遅れまして。  
わたくし、音無遥<sup>おとなしはるか</sup>と申す者です。唯とクラスメートなんぞをして  
おります。  
ま、偽名なんだけどね。

## 第1曲〜自己紹介的な何か（後書き）

初めてのオリ主もののなにやたら謎を残してしまった。まあいいか。

更新は気まぐれですが、一つ宜しくお願いいたします。

## 第2曲くコスプレでブラ配り（嘘）

朝登校したら、校門でコアラとサルという異色コンビと出くわした。

「……コスプレ部ですね分かります」

「コスプレ部違うっ！」

## 第2曲く着ぐるみでブラ配り（嘘）

「何がコスプレ部だよ！ かけ声とかこのビラを見たら普通分かるだろ！？」

「澪ちゃん落ち着いて！ はるちゃんのいつもの冗談だよ！」

「そうだ！ 冗談だよこのヤロー！」

「何で偉そうなんだよ！？」

そんなワケで。

異色コンビの正体は唯と澪でした。

状況を説明すると、他の新入部員獲得の為に勧誘を行っていた他の部に混じって、軽音部である唯と澪が何をトチ狂ったのか着ぐるみを着てブラ——もといビラを配っていた所を、僕がたまたま通りかかったのだった。最初あのコアラとサルを見た時は一体何の宗教かと身構えたものだ。

「まったく。遥はどうしてそう人の神経を逆撫でするような事ばかり言っんだ？ 唯達に初めて紹介してもらった時もそうだったよな

？」

サルの頭部を脱いだ澁が、綺麗な顔をしかめ面にして僕を睨みながら言った。ちなみにいつもの黒髪はタオルで巻いてまとめている。「そうだったけ？ 覚えが無いなあ」

「はるちゃんは都合の悪い事はすぐに忘れちゃうタイプだもんね」  
「それって人として最悪なんじゃないか？」

同じくコアラの頭部を取った唯に、澁が眉をひそめて言う。よく本人を前にして言えますね、あなた。

「それにしても何で着ぐるみ？」

「顧問の先生の発案なんだよ。普通に制服でビラ配るんじゃインパクトが無いからって……」

「えへへ。目立つでしょ」

嘆息混じりに言う澁とは対照的に、唯はニコニコ笑顔で言った。  
うん。目立つてるよ。悪目立つという意味では。

「……なんだよ、その物言いたそうな目は。どうせ私達の着ぐるみ姿を見て、ダサイとか思ってるんだろ？」

「いやいや、そんな事ないよプスプス。とても似合ってるよプスプス」

「嘔吐け！ 思いつきりプスプス笑ってるじゃないか！」

涙目で激昂する澁。そんなに嫌ならやめればいいのに。まあ、なんだかんだ言いつつ周りに同調しようとする性格は長所だとは思っただけ。

「あれ？ ところで他の二人は？」

「ムギちゃんとりっちゃんなら裏門だよー。その方が効率が良いからって」

「なるほど」

二手に別れてのビラ配りか。確かにその方がより多くの新入生に軽音部の存在を知ってもらえるな。

「それで、そのムギと律は何の着ぐるみなんだ？」

「えっとね、牛と豚だよ」

「牛と豚かー」

食欲をそるようなコンビだ。

「美味しそうだね。ビーフとポーク的な意味で」

「確かにうまそうだな。貞操的な意味で」

「ちよつと待て！ 唯と遥とじゃ意味合いが全然違うぞ！？」

だいたい遥は同じ女だろ！？ とすかさず漑がツツコミが入れる。唯のぼやんとしたツツコミも良いけど、漑の鋭いツツコミも格別ですなー。あと訂正しておく、僕れっきとした男だから。性別上、律とムギの貞操を奪えるから。奪うつもりは一切皆無だが。

「それにしても四人だけじゃ何かと大変じゃない？」

言って、ざつと周囲を見渡す。バスケ部や調理部といった所は、なまじ部員数が多いだけに数に物を言わせて新入部員獲得に躍起になっている。この現状を見ると軽音部の旗色は悪いのは明らかだ。

「まあな。でも実質四人だけしかないんだし、仕方ないだろ」

「そつか。じゃあ、手繋ごうか？」

「いや何でだよっ！」

差し出した僕の手を漑は容赦なくパシンと手払った。割と力強く叩かれたせいで手がヒリヒリと痛い。

「そこは『手伝おうか』だろ！？ 脈絡が無いにもほどがあるぞ！」

「じゃあ改めて手伝おうか？ ただし飼い猫のミイちゃんが」

「お前じゃないのかよ！ そして人ですらないのかよ！？」

そりゃ猫の手も借りたい心境だけでも！ とツツコミを入れる漑さん。前から思っていたけど、ホント漑ってツツコミキャラだよな。きつと破天荒な律の影響からなのだろう。

「はあゝ。何だかドツと疲れた。ある意味律と同じくらい疲れる…」

…」

「漑ちゃん大丈夫？」

と、大仰にうなだれて漑に唯が寄り添って声を掛ける。漑みたいな苦労人には僕や律の相手は気力が削がれるんだろうな。そこでまずイジメたいと思ってしまう僕はなかなかのS野郎だった。

とは言え、さすがにこれ以上はやめた方がいいかな。二人共、今は忙しい身の上だし。

「んじゃ、僕そろそろ教室に行くよ。唯も澪も頑張ってね」

「うん。はるちゃん、また後でねー」

「うー。まだこんな着ぐるみを着なきゃいけないのか……」

唯の元気はつらつな声と澪の泣き事を聞き届けてから、僕は自分の教室へと向かった。

## 第2曲くコスプレでブラ配り（嘘）く（後書き）

アニメでは鶏と馬でしたが、原作通りにやってみました。

原作に豚が出て来たかどうかは定かではありませんが。

### 第3曲 お菓子が目当てですが何か

「うゝん……誰も来ないなあ……」↑律

「ライブうまくいったと思ったのに」↑唯

「やっぱり、軽音部って人気ないのかな……？」↑漣

「そんな事ないと思いますけど……」↑ムギ

「ねえ、このお菓子って他にないの？」↑僕

『——って、いつの間にそこにイイイ！？』↑軽音部の皆さん

### 第3曲 お菓子が目当てですが何か

「は、遙！？ いつの間に部室に！？ ていうか何当たり前のよう  
にお菓子食ってんだよ！？」

前髪をヘアバンドで留めて、これが自分のアイデンティティと言  
わんばかりに額を見せつけるいかにも活発そうな少女——クラスメ  
ートでもある律が、心底驚いた表情でテーブルに付いてお菓子を食  
している僕に言い放った。この反応からしてホントに今の今まで気  
が付かなかったんだな。結構前からいたのに。

「何故ここににいるのかって？ そこにお菓子があるからに決まって  
おろう！」

「「そつか。なら仕方ない」」

「納得するのかよ！」

同意を示してくれた唯と律に、漣がツツコミを入れる。この人は  
ホントにどこでも忙しい人だ。

「だって私もはるちゃんと似たようなものだし。てへへ」

「分かるぞ唯。あまりのお菓子の美味しさに、部活という本来の目

的を忘れてしまっただよな」

「忘れないでくれよ。私を誘ったのは律の方なんだからさ……」

本当だったら文芸部に入っていたハズだったのに、と後悔が先に立たない事を言っただけ息を吐く澪。今まで見ていた分には、軽音部は軽音部で楽しくやっているように思えるけど。素直じゃないな澪は。

「でも、お菓子を用意している身としてはとても嬉しい言葉だわ」

と、軽くウエーブがかかった長い髪に太眉が特徴の少女——ムギが、言葉通り嬉しそうに笑顔で言う。

「実際問題、部室にお菓子を持ち込んだらダメなんだけど……」

「それはまあ、先生公認でもあるから」

「ムギ。それが一番問題なんだと気付くべきだと私は思うぞ……」

まるで悪意を感じさせない純粹な笑みを見せるムギに、頭痛がするの在眉間を指で押さえて澪は言った。先生公認で、それなんて勇者？ 是非とも我が妻に迎えたい。清々しいほどに嘘だけど。

「話は戻すけど、ホントいつからいたんだ遥？ 私達、全然気が付かなかったぞ？」

「ん？」

僕の心を読むかのように瞳を覗き込んで訊いてきた律に、僕はとりあえずゴクンと口内のお菓子を飲み込んだ。ふむ、何て言おう？ 「君を愛していると告白した時からに決まってるだろ。言わせんな恥ずかしい……」

「……悪い。考えればすぐに分かる事だよな、スマン」

「いやツツコめよ！ そして二人共頬を赤く染めるなよっ！」

「澪さん、お勤めご苦労様ですッ」

期待通りツツコミを入れてくれた澪に、“や”の付く自由業の人みたく低頭する僕と律。それでこそ僕たち私たちの澪じゃんだ！

「冗談はさておき箸置き。唯と律と澪がヤンデレよろしく廊下を歩く生徒を凝視していた時からだよ。隙を見て窓から入って来ました」「え！？ はるちゃんって、そんな時からいたの！？」

「全然気が付かなかったよな。それだけ私達が廊下側に一点集中していたからなんだろうけど」

「ちよつと待て!？ うっかり聞き逃しそうになったけど、どうやって窓から入ったんだ!？ ここ三階のハズだぞっ!？」

む。さすがは漑さん。骨の髄までツツコミキヤラなだけあって、なかなか鋭い事を訊く(つて、誰でも気付くか)。

「どうやってつて、上の階からロープを伝ってだな……」

とジェスチャーを混じえて漑に説明する僕。が、当の漑は「ホントか?」と疑いの眼差しを向けるだけで信じようとはしなかった。むう、これは本当の事なのに。

「音無さん、嘘は言ってませんよ? ロープを使って上の階から来た音無さんを窓を開けて招き入れたの、私ですから」

「あれ? でもはるちゃんに気が付いた時、ムギちゃんも一緒に驚いてなかった?」

「あの時は、私も驚いた方がいいのかしらと思って……」

「ムギつて、妙なところでノリの良い時があるよな」

感心とも呆れとも付かない表情を浮かべて律が言う。あの時はつい僕もツツコミそうになったものだ。

「さて、嘘ではないと証明されたところで、そろそろ帰るとしますかね」

言葉通り椅子を引いて立ち上がる。うゝむ。ちよつと食べ過ぎたかな? 腹がいっぱいでちよつと苦しい。

「うわ。ホントにお菓子だけが目当てだったんだなお前」

「始めにそう言ったじゃん律。いやいや、唯から話は聞いていたけど、ホントに美味しいお菓子だったよ」

「……諸悪の根源は唯だったか」

「いやゝえへへ。つい口が滑っちゃったんだよ」

漑の非難じみた視線を受けて、唯が笑って誤魔化す。まあ、あまり吹聴すべき事じゃないし、漑の気持ちも分からなくはない。

「じゃあ今度こそ帰るよ。また来る時はお菓子を頂きに参上いたす

のでそこんとこ4649」

「部員だったともかく、菓子目当てだけで軽音部に来るな！」

「部員だったらいいのか」

問題はそこじゃなかるうに。澪も何だかんだで毒されてるよな、唯達に。

「まあ、お菓子だけを頂きに来るわけじゃないんだけどね」

「？ お菓子以外に何を頂きに来るんだよ？」

「あなたの心です」

「馬鹿言つてないでさっさと帰れ！」

そろそろ怒りのあまり物を投げつけられそうだったので、決め台詞も早々に退出させてもらった。それにしても澪のあの反応、『力リオストロの城』を知らないのだろうか？ 人生の大半を損していると言つても過言ではなかった。いや過言だけど。僕もあの名台詞しか知らないけど。

『でもホントに来ないね。新入部員』

『まあ気長に待つしかないな』

『そうね。りっちゃんの言う通りだと思うわ』

『新入部員も気になるけど、そろそろ練習しないか？ 私達、軽音部なんだからさ』

少し軽音部から離れた所で、唯達の会話が聞こえてきた。新入部員が入らなかつたら来年に期待するしかないワケで、そこで来年もダメだったら廃部確定だもんな。彼女らにしてみれば切実な悩みだ。  
「あのー、すみません」

と考え事をしながらしばらく歩いていたら所で、下級生と思わしき少女と出くわした。いや下級生？ 黒髪のツインテールを際立たせるように背が低く、そして童顔だ。一見は中学生にしか見えないが、高校に中学生がいるワケないし、やはり下級生で合っているのだろう。

「何？」

「軽音楽部の部室を探しているんですけど、どこにあるか知りませんか？」

「ああ。それならその角を曲がったすぐそばだよ」

「あの角を曲がった所ですねっ？　ありがとうございます！」

ツインテールの女の子は頭を下げて礼を言ってから、すぐに走り去ってしまった。忙しない感じの女の子だが、明るく真面目そうな子だし、きっと軽音部メンバーともうまくやっていけるだろう。

「新入部員獲得おめでとう」

誰ともなくそう独り呟いて、僕は廊下を歩いた。

第3曲 お菓子が目当てですが何か（後書き）

軽音部の部屋って二階でしたっけ？ なんとなく的に書きちゃいま  
したが……（汗）。

#### 第4曲く新入部員さんいらっしゃい（前書き）

今更ながらこのタイトルってどうよ？　と思つて、「女装男子が送るけいおんライフ！」に変えてみました。

それでも大差ない作者の残念なネーミングセンス……orz

#### 第4曲く新入部員さんいらっしやうい

「いやー、梓<sup>あすな</sup>に入部してもらってホントに良かったよ。一時はどうなるもんかと、部長の身の上としては肝を冷やしたもんだぜ」

「ああいえ、私はただ純粹に新勸ライブに感動して軽音楽部に入っただけですから。あの、ところでさっきから一心不乱にケーキを食べてる人は誰ですか？ この間は見なかったんですけれど」

「この子のはるちゃんって言っただよー。軽音部の人じゃないけど、私と同じでお菓子が目当てでここに来てるんだ」

「え？ それっていいんですか？ ていうか唯先輩もお菓子目当てで部屋に来てたんですか！？」

「ククク。確かに唯の言う通り部員ではないが、実質軽音部を支配しているのはこの我が輩よ……」

「あの、先輩？ 言っちゃなんですけど、そのキャラ作りは傍目から見てるとすごく痛々しいですよ……？」

「ククク。泣いていい？ 我が輩泣いていい？」

#### 第4曲く新入部員さんいらっしやうい

「さて。名前も上がった所で改めまして。僕は音無遙だ。またの名をステイブ・セガール。Gパン刑事とでも呼んでくれ」

「全部バラバラじゃないですか。最後に至ってはただの渾名ですし」

「ちなみにノーパン刑事でも可」

「それじゃあ単なる変質者です！」

「NOパンツ刑事でも可。ノーパン的な意味で」

「それじゃあノーパン刑事と変わらないじゃないですか！」

おお。何というツツコミスキル。まさか漚以外にもツツコミに秀でている者が現れようとは。これで軽音部も安泰ですな。主にツツコミ要員が入ったという意味で。ボケ首領としての僕としても大変嬉しい限りだ。

「あの、漚先輩。遥先輩って一体……」

「気にしないでくれ梓。遥はちょっと変わった奴なんだ」

「まあ変わっているがどうかと言われれば、週に一回は超合金に変形するが……」

「変形するんですかっ！？ ロボットみたいに！？」

「たまに露出狂にも変形するんだぜ」

「それは変形じゃなくて変態ですよー！！」

「ていうか、私が言った“変”はそういう意味じゃあねえんだけどな」

と、いつものように呆れ顔でツツコミを入れる漚。毎度の事ながらご苦労様です。

それにしても、どうやら梓は僕の事を覚えていないようだ。先日会ったばかりなのに。まあ、ちよつと道を尋ねられた程度なので、仕方がないのかもしれない。

「ところでそばの壁に立てかけてあるギターだけど、片方は唯ののだとして余ってる方は誰の？」

言って、僕はフォークで壁に立てかけてある二つのギターを指す。茶色っぽいギターは唯のだと分かるけど、もう片方の赤っぽいギターが誰のかが分からない。誰かの忘れ物だろうか。

「あ。それは私のです。唯先輩と同じギター担当なので」

「そっか。梓はベース担当なのか」

「さっきギターって言ったばかりじゃないですか！」

バンツとテーブルを叩いて、怒りを露わに梓は大声で言う。

「人の話をちゃんと聞いてください！　そもそもベースは漚先輩ですっ」

「なんだと。ベースはこの僕だ！」

「いや、いつからお前はベースになったんだよ!？」

軽いジョークだったのに、漣に頭をパシンと叩かれた。しかも加減無しで。だんだんと僕に容赦が無くなってきたな、この人。

「まったく遥は……。だいたい、お前ベース弾けるのか？」

「弾けるわけがなからう！」

「胸張って言う事か」

と、漣が溜め息混じりにツッコむ。貴女様の仰る通りでございます。

「そうだ遥。これを機に軽音部に入ってみたらどうだ？ 初心者でも歓迎するぞ」

「けいおん？ 何それ可愛いのか？」

「その言葉からして入る気が全くないのがよく分かったよ……」

軽音部に入ったら楽しいと思うのに、と部長である律が少し残念そうに言う。まあ唯も最初は何も楽器が弾けなかったって前に聞いた事があるし、初心者歓迎というのは嘘じゃないんだろうけども。でも。

「せっかくのお誘いだけど、今のところ僕はこのお菓子にしか興味が無いしね。りっちゃん部長の気持ちだけありがたく受け取っておくよ」

「……そっか。なら仕方ないな。まあ気が向いたらいつでも軽音部に入部してくれよ。いつでも歓迎するからさ」

「そうだね。それまではお菓子を食べに来るといいよ」

「ちょ、ダメですよ唯先輩！ そんな事で部室に入れたら！ そもそも部室でお菓子を食べるだなんて校則違反なんですから！」

「あら？ でも梓ちゃん。そう言いつつ美味しいそうにケーキを食べていたわよね？」

「うっ！ それはせっかくムギ先輩に出してもらったお菓子ですし、無下にもできなかったと言うか………」

「梓。だんだん説得力が無くなってきてるぞ？」

「と、ほっぺにホイップクリームを付けつつ、誰よりもケーキを堪能している溍なのでありましたー」

「う、うるさいよ！　うるさいよ律！」

僕の目の前で、ギャアギャア騒ぎながらも楽しそうに笑い合う軽音部のみんな。律の言う通り、こんな良い雰囲気の一部だったら、きっと楽しい学校生活を送れるんだろうな。

でも。

それでも僕は。

楽しい学校生活を送る資格なんて、どこにも無いから。生まれてくる資格自体が、そもそも無かったくらいに。

「傑作だよ……」

「ん？　はるちゃん、何か言った？」

「いや。何でもない。厨二病患者のつまらない戯言さ」

「ほえ？　ちゅうにびょー？」

と、意味が通じなかったのか、可愛く小首を傾げる唯。あー、マジで可愛い。愛玩動物として飼いたい。嘘だけど。なんてそれこそ嘘だけど！

「あらあら。何だか楽しそうね」と。

唯をペットとして飼うとして、首輪はどんな物にしようと思えば本気で思慮に耽っていた時に。

眼鏡をかけたスーツ姿の女性が、不意に部室のドアを開けて入って来た。

第5曲く君に届け！（ただしイケメンに限る）

「あら。見ない顔が二人もいるわね。ひよつとして新入部員かしら？」

「あ、はい！ 中野梓です。これからよろしくお願いいたします！」  
「ああ。あなたが中野梓さんね。入部届けで名前だけは知っていたわよ。あれ？ でも入部届けは一つしか貰ってないし、そうするともう一人の子は一体……？」

「えつとね、さわちゃん先生。はるちゃんはね」

「唯、自分で言うからいいよ。そんなワケではじめまして先生。侵入部員の音無遥です」

「ええ！？ 侵入するの！？ 新入じゃなくて!？」

「ええ。心の隙間を埋めるように、僕の愛の力であなたを侵入、もとい攻略してごらんにいれましょう」

「きやあああ！ 本当に侵入してきたわああ!!」

第5曲く君に届け！（ただしイケメンに限る）

「ハッ！ あぶないあぶない。もう少しで同性の——それも年下に心を奪われるところだったでゲソ……！」

「何言ったださわちゃん？」

「しかも僕じゃない、別の何かに侵入されてなくね？」

床に膝を付いてワケの分からない事を呟く先生に、ツツコミを入れる律と僕。どっちかというと、侵入より侵略されているという表現の方が相応しいか。主にイ力的な意味で。

「そ、そんな呆れた眼で見ないでよ！　ちよつとした冗談よ冗談！」  
そんな多少テンパった言葉と共に、ズレた眼鏡を掛け直しながら先生はスツと立ち上がって僕達に言った。実際は結構本気だったようにも思えたが、敢えて口には出さないようにしておこう。例え冗談と言えども、ああいう発言をしたという事はきつと彼氏がいないんだろうし。わざわざ逆鱗に触れるほど、僕はMではないのだ。剣呑剣呑。

「ところで先生。彼氏いないんですか？」

「ぐばあッ！！」

「は、はるちゃん！　ダメだよそれを言っちゃあ！」

「ああ、さわちゃんが精神的なダメージ受けて崩れなさった！」  
どうやら僕は、真症のマゾヒストだったようだ。

「あのー。お取り込み中に申し訳ないですけど、先生は軽音部の顧問でいいんですね？」

と、僕達の間に割って入って、梓が小さく手を上げて言う。

「ああ、紹介が遅れたわね。私が軽音部の顧問、山中さわ子よ。よろしくね」

梓の質問に、息を吹き返した先生が柔和に笑顔を浮かべて言う。  
こうして見ると、さっきまでのやり取りが嘘のように、キャリアウーマンみたいな印象を受ける。顔も綺麗な造りだし、生徒ウケもよさそうだ。

「それよりも貞子先生」

「さわ子よ。不吉なものと間違えないでよ音無さん。で、何？」

「これは失礼、黒沼爽子先生。ところで、風早君とはその後どうなってるんですか？」

「だから山中さわ子だって言ってるでしょう！？　風早君なんて知らないし！　というか某少女漫画から離れなさいよ！」

「えー。僕のちよつとしたお茶目心を君に届けたかっただけなのにー」

「いーりーまーせーんー！」

そんな子供みたいに声を間延びさせて憤慨するさわ子先生。どうやら先生も、あのリア充のリア充によるリア充の為にあるような漫画を読んだ事があるようだ。現実逃避ですね分かります。

「もう何なのよこの子は！ 結局、新入部員なのどのなの！？」

「さわちゃん先生。はるちゃんは私達と同じクラスメートの子だよ。部員じゃないけどよくここにも遊びに来るんだ」

さわ子先生の怒り混じりの問いに、唯がいつも通りにのほほんとした調子で答えた。あー本当にかわ唯。じゃなかった、可愛いなあ唯は！

「唯ちゃん達のクラスメート？ しかも遊びにつて、じゃあ体験入部をしに来たつてワケでもないの？」

「いやいや、いつだつて僕は人生という名の部活動に体験入部ですよ」

「いや入部しなさいよ。少なくとも自分の人生くらいは」

「今は帰宅部が優良株ですね。人生から逃げる的な意味で」

「ダメ人間そのものの発言ね……」

と、ジト目で言うさわ子先生。「冗談のつもりで言ったのに、どうやら本気にされてしまったようだ。これも日頃の行いが悪いせいかと納得しかけたが、認めくないので「嘘だけど」と無理やり事実を歪曲する事にした。これで一安心。

「はあ。何だか、話してるだけでドツと疲れる子ね……」

「大丈夫ですか先生？ おい遙。ちょっと遊び過ぎだぞ。少しは抑えろ」

「遷への欲情を？」

「おふざけの方だよ！ ていうか私に欲情すんなッ！」

何て言いつつ、若干頬を赤らめて声高にいう遷ちゃん。案外、照れてるだけなんじゃね？ と思いつた僕は人生の勝ち組だなあと思いました。嘘だけど。

「全くお前つて奴は。ホントに人をからかうのが好きだよな……」

「まあ好きかどうかと言われれば、自分大好き人間ではあるが」

「ナルシスト!? ていうかさっきの話と全然関係ないし!」

「実はもう婚姻届けにもサインしてあるんだぜ」

「婚姻!? 自分と婚姻するのか!?!」

「ハネムーンは隣り町の銭湯が良いなあ」

「意外と庶民的な上に近場だった!」

と、漣で遊んでいる最中にふと視線を感じてそつちに顔を向けた。

「ん? 何ですかマチ子先生。そんなに僕の顔をジッと見て」

「いや何度も言うけどさわ子ね。『まいっちゃんぐ』とか言わないから」

などとツツコミを入れつつ「そんな事より」と、さわ子先生は品定めをするようにクイツと眼鏡を上げて話を進める。

「音無さん。あなた女子高にいるという事は、女の子……のハズなのよね?」

「――」

一瞬、耳を疑った。少ししてすぐに冷静さを促す。

声は、押し殺した。動揺も表情には出さなかった。だから、バレてはいないはず。

少なくとも、今この瞬間だけではあるが。

でもまさか、僕の女装に疑心を抱かれるとは……。

念の為周りを注視してみると、皆一様にして『え?』と意表を突かれたようにキョトンとしていた。が、その後すぐに律が「何言つてんだよさわちゃん」と一笑した。

「遙が男だとしても言いたいのか? そんな事あるワケないだろ」

「りっちゃんの言う通りだよ。はるちゃん、こんなに可愛いのに」

言つて、僕にギュッと抱きつく唯。って唯さん。胸が、意外と膨らんだ胸が当たってますから。これなんてエロ毛、もといエロゲー?

何はともあれ、軽音部のみんなには疑われてはいないようだ。問題は僕をずっと凝視しているこのさわ子先生の方が。

「ん。でも気になるのよね。どうしてかしら?」

「そ、それより先生！ お茶にしませんか？ ケーキもありますよ？」

ジッと未だに僕を疑わしげに見つめるさわ子先生に、今までほとんど空気と化していたムギがフォローを入れてくれた。ナイスだムギ！ さっきまで存在すら忘れてたけど！

「ケーキ！？ キヤ／＼食べる食べる／＼」

さっきまでの態度は何だったのかと言いたくなるくらい、あっさりケーキに食らい付いたさわ子先生に、僕は内心ホッと胸をなで下ろした。危つく本当に女装がバレるところだった。

何気なく、ふとお茶の準備をしているムギに視線を向ける。するとムギと不意に目が合ってしまった。

ムギはただ何も言わず、とても複雑そうな苦笑を浮かべて僕を見ていた。

まるで僕を問い詰めているような。

そんな、意味を含んだ苦笑に見えた。

ともすれば、寂しげ表情を浮かべているようにも捉えられるムギに。

僕はただ、視線を逸らす事だけしか出来なかった。

助けてもらったというのに。

僕の女装を知る、唯一の人間なのに。

「戯言、だよ……」

第5曲く君に届け！（ただしイケメンに限る）く（後書き）

人数が多いと動かすのも大変ですね……。

## 第6曲くあずにゃん爆誕く

「さあ梓ちゃん。ワガママ言っでないで、このネコミミを今すぐ付けるのよーッ！」

「いやアアア！！　ていうか先生、そんな物どこから持って来たんですかあゝ！！」

放課後、いつものようにお菓子目的で軽音部の部室に赴いてみたら、何だか梓とさわ子先生がハシヤいでいた。見ると、ネコミミを手を持ったさわ子先生が梓の手を掴んで何やらハッスルしている。何と云うか、うん。昨日聞いた事ではあるけれど、今年で二十歳<sup>ビ</sup>の癖に元気な人だ。

ひとまず、いまいち状況が把握できないので「あの二人、何やってんの？」と、そばにいた漣に訊いてみた。

「ああ、遙か。いや、梓にネコミミを付けるとかどうとかで騒いでるんだよ」

「なにに！！？　そいつあ大変だ！　漣のスリーサイズを今すぐ教えてくれ！！」

「えーと。上から89・63・88……　っていきなり何脈絡の無い事言わせてんだアアア！？」

## 第6曲くあずにゃん爆誕く

「さて話を戻して、漣が今日穿いているパンティーの色についてだが……」

「全然戻ってねえよ！　むしろ横道に逸れて思いつきり爆走してる

ぞっ！」

「な、なんだってーっ!？」

「わざとらしく驚くなアアア！」

「漚、落ち着けて。熱くなり過ぎ」

顔を真っ赤に全力でツツコミを入れる漚に、隣りにいた律が苦笑を浮かべてなだめすかせる。どんなボケでも全身全霊でツツコンでくれる、そんな漚しゃんが大好きだ!!

「はあ、はあ。まったくお前って奴は……」

もはやツツコミ疲れか肩で息をする漚が、僕を睨め上げながら不満をぶつける。

「少しは真面目に会話できないのか？ 正直、遙と話してるだけでもドツと疲れてくるんだぞ？」

「ねえ、りったん。昨日の『笑点』観たあ？」

「へ？ 確か昨日は木曜日のはずじゃ……？」

「——って無視すんなアアア!!」

だいたい、笑点は日曜日しかやってないハズだぞ！ と、ここでもツツコミを忘れない漚なのであった。さすがです漚しゃん！

なんて遊んでいる内に、いつの間にか唯がネコミミを装着していた（あらヤダかわ唯）。大方、嫌がる梓に代わって唯が付けたのだろうけど、ああも事もなげに付けられると、いつそ清々しいものがあるなあ。とりあえず眼福眼福。

「ちょ！ 唯先輩、恥ずかしくないんですか!？」

「へ？ どうして？ こんなに可愛いのに」

「うん。素敵よ唯ちゃん」

「ありがとうムギちゃん」

「え？ 私がおかしいの？ 私がおかしいだけなの……？」

ネコミミを付けた唯とムギがキャッキヤ騒ぐ様を見て、梓が独り納得いかなさそうに呟く。まあ気持ちは分からないでもない。

と、そこで何やら物欲しそうな眼で唯達を見ている律に気が付いた。

あ、分かった。律の事だ。きつと唯達の楽しそうにしているのを見て、自分も混ざりたくなつたのだろう。

だとしたら、律が次に口を開く言葉は――

「何だか楽しそうだな。おーい！ 私も混っけてっ！」

「うおい！？ 止めるよ律！」

予想通りというか何というか、漑の止める言葉も虚しく、嬉々として律は梓達の輪に入って行つた。まるで玩具に魅せられて無我夢中に飛び付く子供みたいだ。

「もう律のやつ。部長がしっかりここで場を仕切らないでどうすんだよ。まったく先が思いやられる……」

「ん？ そういう漑は一緒には行かないの？」

「行くわけないだろう。興味無いし。それに、もしかしたら私までネコミミを付ける羽目になるかもしれないし……」

と、恥ずかしそうに顔を赤らめる漑。相変わらざるの恥ずかしがり屋さんだねー、漑は。さすがは目立つギターじゃなくて、比較的地味なベースを選んだだけの事はある。どっちにしろステージに立つ事に変わりないと思うけど。

あ。そうこうしている内に梓がついに根負けしてネコミミを付け始めた。もう顔がどうにでもしてくれと言わんばかりに、諦めの境地に入っている。今なら勢いでスカートも捲れそうなほど隙だらけだった。

「きつと柄はきやわいいクマさんに違いない……」

「？ 急に何言つてんだ遥？」

「いや？ 何も言つてないよ？ 梓が今日穿いているパンティーは何色かなーとか。漑が今日穿いているのは、学園祭で見た縞柄のパンティーなのかなーとか、そんな邪な事は全然考えてませんよ？」

「思いつきり邪な事考えてんじゃねえか！ いやいやいやそれ以前に！ どうして学園祭の時の事を知ってるんだ！？ お前、まだ転校していなかったハズだよな！？」

「原作第1巻で余裕でした（キリッ）」

「何の話だよ!？」

はて。ホント何の話してんだろう。なんか、神の見えざる手によってメタ的な事を言わされた気がしてならないのだが。

「んゝ。梓ちゃんかわいいゝ」

「唯先輩、あんまり引つ付かないでくださいよゝ」

ふと視線を梓達に向けると、唯がネコミミを付けた梓に頬をすりすりさせていた。裏山、もとい羨ましい。

「なあ梓。試しにニヤーツて言ってみて？」

「え？ にゃゝ……ハッ！ つい律先輩の言われるがままに!」

「あだ名は『あずにゃん』で決定だね!」

あずにゃん、か。なるほど。唯にしては良いニツクネームを付けたものだ。だがかし――

「待て唯。ここは『あずにゃん』というあだ名にしたらどうだろう?」

「はるちゃん天才過ぎ!」

「いや同じだろ!？ 唯が言ったのと同じだろ!？ 遙も遙で、どや顔で人のアイデアをパクんなよっ!」

と、そばにいる僕と離れた所にいる唯にそれぞれご丁寧に指を差してまでツツコミを入れる。もう完全にツツコミキャラが板についてるな、この人。

「はあゝ。今日は何だかツツコンでばかりだ……」

「えっちい意味で?」

「普通の意味だよ! つか、えっちい意味って何だよ!」

「え? そりゃあ自家発電中の澁を――むぐっ!」

「わーわーわーっ! 何恥ずかしい事言い出してんだお前はーっ!」

「さあ梓ちゃん。今度はメイド服よー!」

「ちよつとそれどこから取り出したんですか先生! ああもつ、誰でもいいから私を助けてゝっ!」

梓の悲痛な叫び声が、部室に響き渡る。

澁に無理やり口を塞がれて呼吸もままならない状態になりつつも、僕は呑気にもこう思った。

軽音部は、今日も平和だなー。

第6曲くあずにゃん爆誕く（後書き）

ちなみに洩のスリーサイズは、とある情報ソースから得たデータだ  
ったりします。

うん。自分で言ってる嘘くせー。

第7曲くもしも軽音部のマネージャーがドラッカーを喚んだら

「そもそも文化部扱いの軽音部にマネージャーがいるわけないだろうがアア——！！」

「澪が冒頭からサブタイトルにツッコんだーッ！」

第7曲くもしも軽音部のマネージャーがドラッカーを喚んだら

「つか、何だよこのサブタイ！ ドラッカーを喚ぶの？ 召喚するの？ 『マネジメント』を読むんじゃないの！？」

「まあ、ほとんどネタ扱いのサブタイだし、しかも今回の話とは何ら関係なかったりするんだよね」

「じゃあ意味なくこんなサブタイにすんなよ……」

「澪に遥。さつきから何の話をしてるんだ？」

「いや、特に他意は無いから。気にしないで」

訝しげに眉根を寄せる律に、僕と澪は手を横に振って誤魔化した。あぶない。もう少しで世界の思惑に気付かるところだった……！

なんて我ながら厨二病くさい嘘を吐きつつ、とうとう澪も僕と同じく電波の住人へとなり果ててしまったかと、この先の人生を他人事ながらに憂いだ。微妙に嘘でないところがなおさら性質が悪い。<sup>たち</sup>

閑話休題。世間様は休日という名の怠惰の時間を貪っている事であろうとある日曜日の昼下がり。僕と律は今、澪の家で勉強会を開いていた。何故勉強をしているのかって？ そこに中間テストがあるからだ！

「よろしい！ ならば戦争だ！」

「おいおい！ テストが嫌で戦争を起こすバカがどこにいるんだよ！」

「「ここにいてっ！」」

「おいコラ！ 堂々と言う……律！？ お前までもか律！？」

手を空高く掲げて唱和する僕と律に、漑がノリツツコミを入れてきた。ていうか、よく僕の考えてる事が分かったな。エスパー魔美もといエスパー漑なのかもしれない。古いか。微妙に例えが古いか。「まったく。突然押し掛けて来て私に勉強を教えてくれって言ったのはお前達なんだからな。少しは真面目にやれよ」

「もちろんだよ漑。じゃなきゃ私らがこうして漑の家に来るわけないじゃん」

「だったらその手に持っている漫画は一体なんだ？」

漑の言う通り、テールに広げられた教科書とノートを放置して、律はベッドに腰掛けながら漫画を読み耽っていた。ちなみに読んでいるのは別冊マーガレットだった。『君に届け』ですね分かります。「ほら漫画返せ！ さっさと勉強に集中しろ！」

「漑のイジワル。ちよつと休憩してただけじゃん」

「甘いなりったん。僕なんてシャーペンを折ってまで勉強を放棄しているんだぜ！（ボキボキッ）」

「いや折るなよ！ ボキボキ折るなよ！ むしろよく折れたなシャーペンっ！」

うん。鉛筆より手強かったよ。手が痛いつたらない。

「まったく。一本余ってるのを貸してやるから、それ使え」

「わーい。ありがとう漑」

礼を言っ、漑から真っピンクのフアンシーなシャーペンを受け取った。よく見るとキティちゃんのイラストがプリントされている。いかにも漑らしい私物だ。

「今度は折るんじゃないぞ。私のお気に入りなんだからな。大事に使えよ」

「がつてんでい！ 次はユリ・ゲラーみたくグニャグニャに曲げて

「ごらんにいきますよ（キリッ）！」

「大事に使えて言ってるんだろがア——！」

ツツコミと共に漣の鋭いチョップが僕の脳天に炸裂した。地味に痛い。

「クスン。ほんのマイケルだったのに」

「それを言うならジョーダン、もとい冗談な。あとバレバレな嘔泣きやめろ」

「おい遙。そろそろ真面目にやった方がいいぞ？ 私ら成績悪いんだからさ」

と、さつきから静かだと思っていたら、いつの間にやら黙々と勉強に勤しんでいた律に注意を受けてしまった。まさかりったんに注意をされるだなんて、一生の不覚！

「さつきまでサボっていたお前が言うな。それはそうと、律と遙ってどんだけヤバい状態なんだ？」

言いながら、漣も律にならうように教科書を手に取りつつ、僕達にそう尋ねてきた。

「私は今度平均点以下だったら小遣い減らすって言われちゃったエヘ」

「まあうん。律はだいたい予想通りの返答だったよ。あと涙拭け」

「僕なんて焼き芋が作れる答案用紙になりそうな勢いだぜ！」

「燃やさなきゃいけないほど切羽詰まってるって事だけはよく分かった」

二人共、そんだけヤバいと分かっているなら何で日頃から勉強しないんだ、と漣が溜め息混じりに呟く。心底呆れてる様子だった。そんな簡単にやる気が出たら誰も苦労はしない。

「まあまあ漣。そう言えば、昔もこうして小学校の宿題で出たドリルを一緒にやったりしたよなー」

「今も、だろ？ 昔からずっとテストがヤバそうだったらよく私の所に泣きついて来たじゃないか。それはそうと、遙もやっぱり小学校の頃は算数や国語のドリルとか宿題が出たりしたのか？」

「俺のドリルはアア！ 天をもつらぬくドリルだアア！！」

「あ、律。その問題間違えてるぞ」

無視された。渾身のボケだったのに。

べ、別に泣いてなんかないんだからね！

後日談。中間テストの答案返しの日。

「やったあー！ 全教科ギリギリ平均以上だった〜ッ！」

「やったー！ 僕の答案、全教科満点だった〜！」

「うおい！？ 律はともかく何で遥は勉強を教えてあげた私より良い点数取ってるんだよ！？ おかしいだろオ〜！！」

返却された答案用紙を振り回して、大声をあげる平均80点台の零であった。

つか、そんだけ高得点だったんだから泣いてまで悔しがる事でもないだろうに……。

第7曲くもしも軽音部のマネージャーがドラッカーを喚んだら（後書き）

漣しゃん、電波の世界へようこそ！

……なんて、少々おふざけが過ぎたか（笑）。

## 第8曲くスタンド・バイ・ミーく（前書き）

今回、シリアス成分濃いです。あと、少し長め。

## 第8曲くスタンド・バイ・ミーく

「お？ あれって……」

特に帰りたい気分でもなかったので、宛もなく街中をぶらりと歩いていた学校帰り。ふと人並みの中に見慣れたツインテール少女を目撃した。ていうかあの後ろ姿とギターケースは、十中八九あずにやんこと梓に間違いない。

「何やってんだ？ こんな所で」

時間帯としては、もう部活を終えているはずなので、ここにも別段不思議な事ではないのだが、しかしながら足取りがフラフラとしていて、どこか危なっかしい。何か物思いに耽っているようなそんな風にも見えなくはない。

「ふむ」

気になったので梓の後を少し離れた距離から追いつつ、様子を窺う。

観察するに、どうも梓はあちこちふらついているだけで、これと行って行き先がないようだった。僕と同じく、単に街中を闊歩しているだけだろうか。

時は夕刻。そろそろ変質者のエンカウント率が上昇する頃合い。集団でならともかく、梓のように単独で行動していたら恰好の獲物だ。

「ふむふむ」

腐っているとはいえ、一応僕は梓の先輩だ。としたらやはり、こは注意を含めて声を掛けるべきだろう。無論、先輩として。そういうワケなので。

背中から思いつきり抱き付いてみた。

「キヤーッ!？」

頬を舐めてみた。

「キヤーッ!? イヤーッ!」

ついでにスカートも捲ってみた。

「どう見ても水玉模様です。本当にありがとございました」

「キヤーッ!? イヤーッ! いきなり何をするんですか——ッ!  
!」

## 第8曲くスタンド・バイ・ミーく

「もう! 声を掛けるだけなら舐める必要も、あまつさえスカートを捲る必要も全然ないじゃないですか! 周りの人にジロジロ見られてすごく恥ずかしかったんですからね!」

「いやゝ。あずにゃんがあまりにも可愛い過ぎてつい。大事な事なので二回言いました」

「いやまだ一度だけしか言ってますんよ!」

いい加減な事を言わないでください、と手に持つソフトクリームを舐めながら、梓はツツコミを入れる。

場所は変わってとある噴水広場。もう夕方だが、子供連れの親子や仲睦まじそうなカップルが、声を弾ませて戯れている。他にもジョギング中のスポーツマンや買い物帰りの主婦が時折目の前を通り過ぎる。どうやら近道や散歩コースとしても使用されるみたいだ。

そんな賑わう広場——その中にあるベンチで、僕と梓はソフトクリームを舐めながら座って談笑していた。まあ笑っているのは僕だけなのだが。

「そんなにぶりぶり怒らなくてもいいのに」

「あんなセクハラされたら誰だって怒りますよ!」

「その代わりソフトクリームを奢ってあげたじゃないか」

「まあ、それは素直に有り難く思ってはいますけど……」

さすがにソフトクリームを奢ってもらった手前、強い口調で言い返せないのか、若干語気を弱めて言う梓。

「でもだからと言って、遥先輩の事を許したワケじゃありませんからね？」

「なぬい！？ ソフトクリームだけじゃ足りない！ 体で支払えて！？ この鬼畜！ 悪魔！ よし、今すぐラブホに行こうッ！」

「そんな事一言も言ってますん！ ていうか体売りたいのか売りたいのかどっちなんですかッ！」

どっちかと言うと、売ってほしい立場です。戯言抜きで。

「そうカツカしなさんな。コロシウムが足りぬと見えるね」

「それを言うならカルシウムですよ。コロシウム不足って、どんだけ血に飢えている状態なんですか」

「まあまあ。ほら、僕のチョコ味のソフトクリームを一口あげるから」

「むむ。まあ頂けるなら素直にもらいますけど……」

と、食欲にはやはり弱い方なのか、梓はつられるように差し出された僕のソフトクリームに口を近づけた。

ばくッ！

「うむ。梓のバナナ、美味美味」

「ってあああああ！？ どうして遥先輩が私のソフトクリームを食べるんですか！ 私にくれるんじゃないかなかったですか！？」

「愚か者め！ 欲しければ力ずくで奪え！」

「理不尽なッ！」

くれるって言ったのにくれるって言ったのに！ と怒りを露わに梓は僕をボカボカと叩き始めた。でもあくまでボカボカ程度の力加減なので、さほど痛くなかった。これがボカボカだったら、身も心

も温まっていた所だ。なんのこっちゃい。

「もう。遥先輩と話していると、色々悩んでる自分が馬鹿みたいに思えてきました」

「ん？ 悩みて？」

ふと漏らされた梓の言葉に、僕はそのまま聞き返した。おそらく梓自身も意図せず言ってしまった言葉だったのだろう、梓は「……あ」とバツが悪そうに口元を手で隠した。そしてそのまま、梓は押し黙ってしまった。

互いに沈黙が下りる。さっきの仕草からしてあまり詮索してもらいたくないのかもしれない。そう思って、僕はソフトクリームを食べるのに徹した。

チョコの濃厚な甘さが口内に広がる。甘いのは好きだけど、これは少し甘過ぎるな。バニラとチョコのミックスの方がちょうど良かったかもしれない。

「私……」

と、残りのコーンを口に運び終えた所で、梓が唐突に口を開き始めた。

「私、少し迷っているんです。このまま軽音部にいてもいいのかなって……」

「軽音部に？」

はい、と梓は小さく頷く。

「何で？ 軽音が好きで入部したんだろ？」

「それはそうなんですけど……。あ、別に軽音楽が嫌いになったわけじゃありませんよ？ ただ、何とかいうか……」

と、再び言葉を選ぶように、梓は黙ってソフトクリームを見つめる。

んー。どうにも煮え切らないな。考えが読み取れない。

でも、ひよっとして――。

「ひよっとして、軽音部自体に何か不満があるのか？」

「……………」

梓は何も言わなかった。何も言わなかったが、視線だけは泳いでいた。

図星……か。

「そっか。まあ梓は梓で苦勞してるんだな」

「いえ、別にそういうワケじゃあ……。ただ、今の雰囲気にも慣れないと言っか……」

「落ち着かない、とか？」

「あ、はい。そんな感じかもです」

うーん。個人的には、あの軽音部特有のゆるい雰囲気はとても落ち着くのだが。梓にとってはそうでもなかったのか？

「梓は、唯達のいる今の軽音部は嫌いか？」

「そ、そんな事はないです！ で、でも真剣さが足りないと言っか、私は真面目にやりたいのに、皆さんはそうでもなくて、それで私だけ何だか空回りしているみたいで……」

「……………」

しゅんとうなだれる梓を、僕はただ黙って聞き役に回る。

「実を言くと私、ここ最近部活を休んでるんです。それでライブ会場に行ったりして他のバンドの演奏を聴きに行ったりもしたんです。でも、何かが違うんです。何かが物足りないんです！」

いつからだろう、梓の瞳から涙がしたり落ちていた。

涙を拭おうともせず、溢れ出る雫がポタポタと膝元に落ちてはじける。梓のスカートに、ジワリと涙の跡が広がった。

梓はそのまま、喉から溢れ返る言葉をそのまま吐き出すように――  
――嗚咽混じりに紡いでいく。

「唯先輩達の演奏よりもずっと上手いの――プロにも負けないくらい気迫があって会場だつてとても盛り上がったのに、でも新歓ライブの時に聞いた演奏の方が、ずっと胸に響いたんです。あの時の光景が、今でも胸にこびりついて離れないんです……！」

そこで梓が、頬を濡らしたままスツと顔を上げて僕を見つめた。  
答えを求めるかのように、僕を見つめていた。

「分らないんです。分からなくなっちゃったんですよ、遙先輩。どうしてあそこまで新歓ライブに惹かれたのか。それに何より……」  
自分がこの先どうしたいのか――。

梓はそれだけ言って、また黙ってしまった。  
顔を伏せて、小刻みに体を震わしている。  
まるで子犬のようだ。

親とはぐれ、行き先もわからずただ助けを求める迷子の子犬のよう。

「……」

それなら。

それなら、僕が。

道を示せばいい。

梓の手を引いて、僕が出口へと連れ出せばいい。

「僕さ、一度だけ密かに唯達の演奏を聞いた事があるんだよ」

「――え？」

不意に語り始めた僕に、梓は濡れた瞳で僕を見上げた。

「音楽の事はよく分からないし、唯達の演奏が上手いかどうか分からないんだけどさ」

瞼を閉じて、あの時の光景を思い出す。

ある日、たまたま部室の前を通りがかった、あの時の事を。

「何だか、すごくホッとしたのは覚えてるよ。緊張感で言うのかな？　そういうのが一切感じなかったんだよねー」

そのまま部室に入らず、立ち止まったまま唯達の演奏に聞き入ってしまったほどに。

「緊張感……」

「うん。ほら、心底バンドに傾倒している人達の演奏ってさ、どこか張り詰めたような空気が漂う気がしないか？　まあそれは僕だけかもしれないけど、唯達の場合はさ、それがなかったんだ。あの時、いつの間にか自然と聞き入っている自分にふと気付いたんだよ」  
「……………」

「きっとそれは、唯達が無理せず、明確な夢があるワケでもないけど、自分達のペースで誰よりも楽しんでるからだ、僕はそう思うんだ」

って、別に唯達がバンド活動を軽んじてるとか言いたいワケじゃないんだけどね。

そう苦笑を浮かべて、僕は続ける。

「これはあくまで僕の感想だし、梓がどう受け取ろうが自由だよ。でもな、今は焦らず——答えが見つかるまでは軽音部にいてもいいんじゃないか？」

そこまで言って、僕は梓の眼に溜まった涙を指で拭った。その際、「んう」と梓が少動物のように唸る。

「今はただ、そばにいただけでも見えてくるものがあるんじゃないかって、僕はそう思う。“スタンド・バイ・ミー”ってワケじゃないけどさ」

「……ベン・E・キングですか？」

「お。さすがはバンドっ子。よく知ってたな」

「よく出来ました」と涙をすくったその手で、ワシワシと梓の頭を力任せに撫で回す。僕自身、たまたま知ってた曲に過ぎないが。

「そう焦るな。小難しく考えなくていいんだよ。お前はお前のペースでやっていけばいいんだ」

「は、るか先輩……」

梓が僕を見る。

僕も梓を見る。

梓の瞳をジッと見据えて。

自分の事すらろくに面倒を見れない——人生に失敗し、惰性でしか生きられない自分を棚上げにしてまで、僕は言う。

「ゆったりと答えを探していけ。唯達のいる、あの部室でさ」

言い終わって、僕は梓の頭から手を離す。梓はそれすらも気付いていないような表情で、ぼんやりと僕を見ていた。

なんとなく、笑みが零れる。

まったく、何やってんだか。

ほんと、僕らしくない。

「ひとまず、さしあたっては——」  
と。

僕は唐突に梓の手に持たれたままのソフトクリームを。

勢いよくパクついた。

「うむ。美味美味」

「ああああ！？ 私のソフトクリームが一口で消えたあ！」

「ん？ まだ食べるつもりだったの？」

「そうですね！ ていうか、遥先輩の唾液で手がベタベタ！」

「なにおう！ 人の聖水をさも汚水みたいに扱いやがって！」

「どの口がそれを言いますかッ！」

んもう、と文句を垂れながら、梓はハンカチで手を拭う。

そして。

「ふふ」

と、不意に梓の顔から笑顔が咲いた。

「あはははっ。もう何だかめちゃくちゃな気分！ 私、さっきまで何を悩んでたんだか」

梓は笑い続けた。

さっきまでの暗い表情は嘘だったと言わんばかりに、梓は笑い続けた。

そしてひとしきり笑い終えた後、「ありがとうございます」と小さく頭を下げる。

「悩みが全て解消したわけじゃありませんけど、でも何だかスッキリしました。遥先輩は落ち込んでる私を元気づけようとして、最後にわざと私のソフトクリームを食べたんですよね？」

「はて。何の事やら」

「ふふ。誤魔化すのが下手ですね」

そう笑みを浮かべた梓は、確かに何かを憑き物が取れたような、晴れやかな顔をしていた。

ひとまずは、これで大丈夫だろう。

後は、梓次第だ。

軽音部に残るか。それとも、このまま去るか。

それは、僕が決める事じゃない。

さて。

もう役目も終えたようなので、「よっこいショッピング」と僕はベンチから腰を上げた。

「あ、帰られるんですか？」

「うん。もうすぐ『天才テレビくん』も始まる頃だしね」

観てるんだ、と梓がか細く呟いた。しかも少々嘲りを含ませて。

いや、あの、嘘よ？

「んじゃ。あずにゃんも帰り道には気を付けろよ」

「あ。あ、あの遥先輩！」

背中を向けた僕に、梓がいきなり立ち上がって声を上げた。

「私、今まで遥先輩の事誤解してました。いつも不真面目で飄々としてて、いい加減な人だと思ってましたけど……」

踏み出そうとした足を止めて、首だけ梓の方を向けて次の言葉を待つ。

「でも、ほんととはとても優しい人だったんですね」

「――」

日向葵のように明るい笑顔で言った梓に、僕は無表情のまま黙った。

優しい――だって？

僕が？

この僕がか？

笑える。

笑わせてくれる。

笑わせるなよ。

僕が、僕が優しいだなんて、そんなの――

「……戯言だ」

「え？ 何か言いました？」

聞き返してきた梓に、僕は「何でもないよ」と言葉を返した。

「じゃあ、今度こそサヨナラだ。あずにゃんも暗くなる前にさっさと帰れよ」

「はいっ。今日は本当にありがとうございました！」

律儀に頭を腰の位置まで下げて礼を述べる梓に、僕は苦笑を浮かべつつ手を軽く振って歩を進めた。

空を見上げると、徐々に朱い夕焼け空から暗い夜空へと変わりつつある。見渡すと、既に三日月が顔をのぞかせていた。

「“スタンド・バイ・ミー”……か」

空を見上げたままふと足を止め、少し前に梓に言った言葉を思い出す。

スタンド・バイ・ミー。

意味は、ただそばにいてくれるだけで。

それは大嫌いだっただ“あの人”が、よく口ずさんでいた曲。僕が殺した“あの人”の、好きだった曲。

「何にせよ、どうしようもないくらい戯言だよな——」

暗くなっていく空を見上げて、僕はそう独り言を呟いた。

第9曲 これは唯ですか？　いいえ、世界の終わりです

あ、ありのままに今起こった話を話すぜ！

例によって例のごとく、放課後に軽音部に行ってみたらギターの音が聞こえてきたので部室のドアを開けてみたら、唯が一人で演奏していたのだ……！

何を言っているのか分からないとは思われるだろうが、しかし事実こうして唯が演奏しているのだ。一瞬我が眼を疑った。

それにしてもあの唯が——基本的に怠け者で将来的にニート説が有力だろうと皆から期待（笑）を寄せ集めていたあの唯が、まさか誰よりも早く部室にきて練習するだなんて。つまりあれか？　推測するに、この状況が一体何を示唆しているのかというと——

「なるほど。これが世界の終わりか……」

「（ビクッ）は、はるちゃん！？　急にどうしたの！？」

第9曲 これは唯ですか？　いいえ、世界の終わりです

「あれ？　遥先輩？」

「よう遥。今日はいつもより早いんだな」

しばらく哑然茫然と唯を眺めていた後、漑と梓が揃って部室にやって来た。二年である漑と一年である梓が一緒に来たという事は、多分道端で偶々会ってそのまま談笑しながら部室に来たのだろう。なんて、そんな些末な事はさておき。

「漑にあずにゃん。この世界はもう終わってしまった……」

「え？　ど、どういう意味ですか遥先輩っ！？」

「どうせまた遥の悪い冗談だろ。梓、本気にしちゃダメだぞ」

「やれやれ、とわざとらしく首を振って嘆息する漑。こやつめ、まるで信用してないな。今回は本気で本当にマジなのに！」

「いいだろう。なら聞かせるしかあるまい。目の前で起こったこの驚天動地な真実を！」

「いいか？ 二人とも、心して聞けよ？」

「は、はい！ 分かりました！」

「前置きはいいから、さっさと話——」

「唯が自主練してたんだ」

「……………」

「……………」

「「……………世界の終わりだッ！」」

「えゝ！？ どうしてみんな、私が演奏してただけでそんなに驚くのー！？」

声を揃えて驚愕して見せる漑と梓。そんな僕達の反応がよつぽど癪に触ったのか、珍しく頬を膨らませて唯は立腹した。だってアナタ、これが驚かずにいられますかい。それなんて都市伝説？ てなもんだ。信じるか信じないかは僕次第とでも言わせたいのだろうか。「だって唯先輩が一人で練習してるだなんて絶対変ですよ！ ここ最近暑くなったせいで頭がおかしくなったんじゃ……………」

そこで漑が「さすがにそれは言い過ぎ」と苦笑を浮かべてやんわりと諫める。漑も梓と一緒にあって「世界の終わりだ！」とか唯を揶揄してたくせに。ま、始めに言い出した僕が言えた台詞じゃないけども。

「でも梓の言う事も一理あるな。唯、ひょっとして何か気になる事でもあるのか？」

「うん。そうなんだよ漑ちゃん。ここ最近、なんだか音の調子が悪くて……………」

言って、いたわるように手に持つギターをさすりながら、唯は不安げに表情を影らす。

なるほど。それで確認がてら一人で演奏してたのか。得心いった。これで本当に練習していたって言われたら、いよいよ世界終末説が濃厚になるところだった。そうなれば、僕が救世主として名乗りを上げなければなくなるしな。嘘だけどな。僕なんてせいぜい「勇者様、どうか世界を救ってくださいええええ！」と懇願する他力本願な村人Aが良いところだろうし。

なんて、どうでもいい戯言はさておいて。

「え？ 音の調子が？ ちょっと見せてもらえませんか？」

うんいいよー、唯は快諾して、梓にギターを渡す。

渡されたギターを手に取って、しげしげと梓はギターを観察していく。

しばらくした後、

「うわ。弦がさびてるじゃないですか！ これ、いつ交換したんですか？」

「え？ 弦って交換するもんなの？」

「なにーっ!？」

唯のキョトンとした言葉を聞いて、梓が柳眉を立てて声を荒げた。同じくギターの事はさっぱり分からない僕も、唯みたくポカンと梓を見届ける。

「ネックも反ってるしオクターチューニングもめちゃくちゃじゃないですか！」

「へ？ え？ 言ってる意味が全然ワカラナイ……」

「大丈夫か唯！ 心なしか頭から湯気みたいなものが出てるぞ!？」

今にも思考のオーバーヒートで後ろに倒れそうになった唯を、とつさに漣が支える。漣しゃんGJ！

「梓もちよつと落ち着け。同じギター弾きとして許せない事だというのは何となく分かるけどもさ」

「遥先輩……」

僕の言葉を聞いて、梓がハッと我に返って、すぐ叱られた犬みたくしゅんと目を伏せた。いや、こっちとしては別に怒ったつもりで

はなかったのだが……。

「あー。まあ、あれだな。あずにゃんもギターに詳しくて凄いな。唯にとつても心強い事だろうし。うん。賞賛の意を込めて僕が撫で撫でしてやろう」

「いや、そんな大した事じゃあ……。えへへ」

と、今度は頭を撫でだけで嬉しそうに梓は目を細めた。そりやもう、大好きな飼い主に撫でられて喜ぶ子猫みたく。

あれ？ てつきり梓の事だから「子供扱いしないでください！」と逆に憤慨するものかと思ってたんだけど。まあ喜んでもらえたんだから別にいいか。

と、独りで納得していたら、

「……？ 遥、ちよつといいか？」

と訝しくこちらを見ていた遥が声を掛けてきた。

「なんだい？ ひよつとして僕に哀<sup>あい</sup>の告白かい？」

「字が違う！ ていうかお前に告白なんてするわけないだろ！」

「なん、だと……？（ゴゴゴゴゴゴ）」

「いやゴゴゴって。そんなジョジョ風に驚くほどの事かよ！」

「いや、どちらかと言うと恐怖新聞風味でやったんだけど？」

「梅図かずおか！ って、そんな事はどうでもいいからさっさと付いて来い！」

と、無理やり遥に手を引かれて、僕は部屋の隅に連れて行かれてしまった。な、なんて強引な人！ などと頬を紅く染めてみた。特に意味は無い。意味は無いんかい。

「なあ遥。なんか梓、妙にお前に懐いてないか？」

急に置いて行かれてポカンとしている唯と梓を放って、遥は僕の耳元で声を潜めながら言う。

「んー？ そう？」

「そうだよ。どう見ても明らかだろう。梓、お前と話してる時、妙に嬉しそうにしてるし。遥、お前梓に何かしたのか？」

「いや？ 特に覚えはないけど」

ふるふると首を横に振って、僕は否定する。戯言抜きで梓が僕に懐くようになった覚えなど一切なかった。

でも言われても見れば以前よりも積極的に僕と関わろうとする気概はあるよな。はて。僕、梓に何かしたっけかな？ ホントに心当たりが無いのだが。

「ホントか？ ホントに何もしてないんだな？」

「疑り深いねー。それとも今すぐ何かしてほしいのかい？」

「んなわけあるか！ 私はてっきりお前に弱味でも握られてるんじゃないかって梓を心配してるんだよ！」

「……………」

漑ちゃんは、僕を何だと思ってるんだろう。嘘つきではあるが、そこまで外道に落ちたつもりはないぞ。良い所で奈落だ。どん底じやねえか。思わず内心で独りツツコミをしてしまった。

「漑ちゃんにはるちゃ〜ん。二人して何をコソコソしてるの〜？」

「いや、コソコソというか、むしろ漑と二人でシコシコしあべふッ！？」

「何言い出すだお前は！ あ、いや何でもない！ 別に何でもないぞ！？ 今すぐ戻るから待っててくれ！」

言葉途中で漑の垂直チョップを喉に受けて悶絶しつつ、僕達は唯達の所へ戻った（僕の場合は漑に手を引っ張られて無理やりのだが）。

ていうか喉が！ 喉がああああ！ 声出ないんだけどおおお！

これ声帯潰れてなくなえ！？ 大丈夫なのかこれ！

「それで、結局どうしたら良いの？」

「んー。自分で直せなくはないですけど、やっぱり楽器店でメンテナンスしてもらった方が無難だと思います」

「だな。私のベースも普段自分でメンテしたりするけど、さすがに唯の度合いだと専門の人にやってもらった方がいいだろうな」

へー。ギターやらベースやらって、普段からメンテするものなのか。そりゃ唯みたいな物臭な奴には不向きだろうな。などと痛む喉

をさすりながら僕は独り納得した。ていうか痛過ぎる。零の奴、加減抜きでチョップしやがってからに！

「ま、とりあえずは先生達が来てからにしようか。ひよっとしたら先生でも直せるかもしれないし」

「そうですね。私も他の人達が来てからでも遅くはないと思います」  
「うゝ。さわちゃん達、早く来ないかな」

こうして僕達は、ひとまずさわ子先生達を待つ事にしたのであった。

「ところで遥。さっきから静かだけど、どうかしたのか？」

「……………っっ！」 ↑てめえが僕の喉を潰したんじゃないかという目

第9曲　これは唯ですか？　いいえ、世界の終わりです（後書き）

なんか時系列がバラバラになってますが、なまら暖かい、もとい生暖かい目でスルーしてあげてください……（汗）。

## 第10曲　そうだ、楽器店へ逝こう

前回までの簡単なあらすじ。

かわ唯↓かわ唯↓唯は可愛いなあ！

「うむ。何一つとして間違えちゃいないな」

「どう見ても間違えだらけだろッ！」

## 第10曲　そうだ、楽器店へ逝こう

「さて、唯のギターを修理する為に楽器店へと進行する我々軽音部一同（何故か部員ではないハズの僕も含む）。この誰も立ち入った事の無いと言われる奥地で待ち受けているのは、果たして伝説の人喰いアナコンダか。はたまた我々の想像すらをも超える別の新たな危険生物なのだろうか……！」

「水曜スペシャルか！」

「おい。澪に遥。そんな所でいつまでも漫才してると置いてっちまうぞ」

などと先を行く律に促されて、僕と澪はボケとツツコミの苛烈で熾烈なやり取り（誇張表現？ 何それ美味しいの？）をしつつも、律達に遅れないよう後を追う。下校してからかれこれ数十分ほど街中を歩いているのだが、目的地である楽器店にはまだ少しばかり距離があるようだ。

ちなみに、僕と澪がどんなやり取りをしていたかは以下の記述す

る通りである――。

「ところで漚しゃん。僕達、これからどこに行くのかね？」

「お前今まで何しに付いて来たんだよ！？ 唯のギターの調子が悪いからさわ子先生に直してもらおうとしたら『やっぱり専門の人に頼んだ方が良いわよ』って言われたから、後で合流した律達と一緒に楽器店へ向かってる最中なんだろうがッ！」

「地の文要らずの説明口調ありがとうございます！」

「地の文とか言っつな！ ホント、お前ってその場のノリだけで生きてるよな……」

「その場の憲武<sup>のりたけ</sup>で生きている？ 失礼な！ 僕の名前は遥だ！ 断じて“とんねるず”の相方みたいな名前じゃねえ！！」

「『その場のノリだけで』って私は言っただ！ どんだけ壮大な聞き間違いしてんだよ！？」

「それはそうと漚しゃん」

「何だよ急に」

「僕達、これから何しに行くのかね？」

「……………」

「……………」

「分からない。何故遥がこの世界にいるのが微塵も分からない……」

「……………」

「存在そのものを否定された！？」

――以上、全僕がむせび泣くような、微笑ましくも胸が打ち震えるような会話でした。嘘だけど。

毎度のごとく胸中で嘘を吐きつつ、先行する唯達に本格的に置いていかれないよう少し速めに歩くよう意識ながらケータイを取り出して時刻を確認してみる。すると、もう午後5時過ぎだった。学校を出たのが4時半前だから、かれこれ30分以上過ぎている事になる。

楽器店までにはまだ時間が掛かるのか、まだ誰もすぐ近くとは口を開かない。となると、もう少し歩かなければならないのかもしれない。まあ漚という遊び相手（笑）がいるから、退屈はしないが。

「ねえ、どうしても楽器店に行かないとダメなの？」

「当たり前だろ。こんな所まで来て何言っただよ」  
ふと唯が不満げに眉をひそめながら、隣りを歩く律に言う。面倒くさがり屋な唯の事だから、楽器店にまで赴く事に抵抗があるのだろう。同じ怠け者として気持ちは分らないでもない。

「私もちやんとした所でメンテナンスしてもらった方が良いと思うわ。自分で出来るのなら、それならそれで良いとは思っけど……」  
「えゝ。そんなムギちゃんまでゝっ」

ちようど律の後ろを歩いているムギに、唯がお菓子を買ってもらえなくて駄々をこねる子供みたいに体をくねらせて言う。

「メンテなんて私出来ないもゝん。普段からやるもんだと思っただったしゝ。りっちゃんもメンテナンスなんかしてないよね？」

「ちゃんととりわい。私はしてなくて当たり前みたいな聞き方すんな」

「な、なんだってー！？」

「何だよその失礼な反応は！　っか何で遙も唯と一緒にって驚いてんだよ！」

だって、りったんは絶対こちら側（怠け者連盟）だと思っただけですもの。

「あのゝ。ところで今から行く楽器店って、以前にも来た事がある所なんですか？」

「そっだよゝ。ギー太もそこで買ったんだゝ」

いつの間にやら僕の真横にいた梓の何気ない問いに、唯がギターケースを自分の子供でも扱うようにぎゅっと抱いて言う。ちなみに、ギー太というのは唯が付けた名前だ。唯曰わく、毎晩抱いて寝るほど大事にしてるんだとか。それを聞いた梓が「大事するベクトルが全然違う気が……」と、この間呆れ顔で言っていたのは、さして今

とは関係ない余談である。

しかしよくよく考えてみると、唯はギー太なる男といつも一緒に寝てる事になるんだよねー。それも抱きながら。

.....。

.....。

.....。

「許さん！ 許さんよ！？ まだ年端もいかぬ娘が男と寝るだなんて、お母さん許しませんからね！？」

「ふえ！？ はるちゃん、何で急に怒るのっ！？」

ハッ。妄想がいき過ぎてついすっかり取り乱してしまった。

「いや、すまん。ちょっと混乱してたみたいだ。それはそうと唯。

結婚式はいつ頃になる予定かね？」

「へ？ 結婚式？ 誰の？」

「誰って、んなもんギー太と決まってるじゃないか」

「え？」

「え？」

「????」

「????」

「.....お前ら、何不毛な会話をしてんだよ」

お互い、クエスチョンマークを頭上に浮かべる僕と唯に、漣が呆れ顔でツツコンできた。はて。漣の言う通り僕達は一体何を話していたのだろうか？

「お。みんな、そろそろ楽器店が見えてきたぞ」

と、そこで先導していた律が、前方を指差して言った。

## 第11曲 秋山濤の暴走 (前書き)

何でだか描いてる本人にも分からないけど、やたら濤の出演が多くなる。どうしてこうなった! (いや、好きなキャラだから別にいいんだけど)

## 第11曲 秋山澪の暴走

「いやはや、やっと到着しましたな。ベストテンに」

「いや楽器店だろ。お前は黒柳徹子か」

「昭和の人間にしか分からないような渋いツツコミありがとうございます。それはそれとして、何で澪は店内に入らないの？ 唯達も入っちゃったよ？」

「私は外で待つてるよ。私、左利きだから右利き用ばかりの楽器見ても悲しくなるだけだし」

「ふん。でも、何か向こうの方で左利きフェアってヤツやってるみたいけど？」

「なんだってーっ!？」

## 第11曲 秋山澪の暴走

「お、おおおお……っ!」

『左利きフェア実施』なる看板の下——様々な左利き用<sup>らしい</sup>楽器が並べられているのを前にして、言葉にならないと言った風に感嘆の溜め息を吐く澪。特にベースが並んでいる箇所では如実に瞳を輝かせて喜んでいる。まるでお菓子の家を目の前にした子供みたいな感じだ。僕が見る限りは、どう左利き用なのかがさっぱり分からないのだが。

「ねえねえ。あそこにある楽器って、全部左利き用なの？」

と、気になったので隣りにいた律に訊いてみた。一応補足しておくと、唯達も澪の異様な様子にポカンとしながらも近くで待機して

いる状態である。

「おう、そうだぞ。ていうか一目瞭然だろ？」

「いや、分からんがな」

素人の僕にどう見分けると言うのだ。そりゃ、律は現役のパンドっ娘だし、見たらすぐ分かるんだろっけどさ。

「こ、ここは天国ですか？」

おお。あの溼しやんが体をふるふる震わせてまで感動に浸っていらっしやるよ。もう離れる気すら毛頭無いのか、その場で屈んでしまってるし。それほどまでにこの『左利きフェア』の虜になっとらているという事なのか。

「あちゃー。完全にはまっちゃったな。ああなったらなかなか動かなくなるんだよな、溼って」

と、律が溼を見ながら溜め息混じりに言う。この言いぐさからして、過去にも似たような状況があっただろうな。今の溼を見るかに、その時の苦勞が何となくではあるが窺い知れる。とは言え、何かあっても僕は一切手を貸すつもりは無いが。苦勞は売却してでもするなとママンにキツク言われているからだ。嘘だけど！

閑話休題。にしても、普段はどちらかと言うとクールな方である溼が我を忘れるくらいに魅了されるとは。ギターやベースに興味の無い僕のような人間にとっては、どうにも不思議に思えてならない光景である。

「ねえ、りったん。左利き用の楽器ってそんなに珍しいもんなの？」

「ん？ まあ基本的には右利き用ばかりしかどこの店にも置いてないからな」。だから溼みたいな左利きの人間にとっては、こういったフェアは恰好の餌食だろうな」

なるほどねえ。道理で溼があんなに喰いついてるわけだ。さしずめ、人肉に群がるピラニアって所か。もう少しマシな例え方は無かったのかと言うツツコミは、各自セルフでお願いいたします。

お。そうこうしている内に、いつの間にやら溼が動きだしたぞ。見ると、そばを通りかかった店員の所までフラフラと吸い寄せられ

るように歩いている。店員さんに何か用でもあるのかえ？

「すいません。ここにあるベース、全部ください！」

漣ちゃん、ついに崩壊！  
クラッシュ

「うおおい！？ 落ち着け漣——ッ！」

ベースに熱中するあまり、トチ狂い始めた漣を律が慌てて止めに入った。いつもだつたら律の暴走を漣が止めるのに、今回は真逆の立場だった。何かシュールな光景だ。店員さんも若干引いてるくらいだしな。具体的な数字で言うところメートルくらい。

「離せ律っ。ここにあるの全部買っただろ！」

「むちゃくちゃ言うなよ！ 全部なんて買えるわけが無いだろ！？  
おい、遥からも何か言ってやってくれ！」

「そつだぞ漣ちゃん！ ビアンカにするかフローラにするか、どっちかに決めなさい！」

「そういう問題じゃねえッ！ つーかビアンカとフローラって何だよ！？」

ドラクエの事ですが何か。ちなみに僕は当然のようにビアンカを選びました。ビアンカ良いよビアンカ。

「はあ。仕方ない。漣は私が見ておくから、お前達は先に唯のギターをメンテしてもらえ」

「え？ りっちゃんは来ないの？」

「今の漣を放って置いては行けないだろ」

と唯の質問に、漣の襟元を掴みながら指差す律。その間にも漣は「ベース。私のベースう」としきりに呟きながら、商品であるベースに少しでも近付こうと手足をもがいている。何か暴れる子猫の首を甘噛みして押さえつけている親猫っぽいな。

まあ、それはそれとして。

「待ってりつたん。ここは漣を置いていこうよ」

「何バカ言ってるんだよ遥。そんな事できるハズが無いだろ？ 今の漣は何をしでかすか分かったもんじゃないんだぞ？」

「まあまあ。僕に良い考えがあるんだって」

良い考え？ と訊き返してきた律に「とりあえず」と前置きしつつ、僕はいつになく真顔になって疑問に答える。

「さっき言った通り、漑をここに一人置いて、僕達は唯のギターをメンテしてもらいに店頭まで向かう」

「ふむふむ」

「そして一人になった漑は、皆がない事を良い事に、店長も真つ青な取り返しのつかない事をやらかすと仮定する」

「ふむふむ」

「すると……」

「すると？」

「きつとオモロなるでえ！」

「面白くしてどうすんだチョップっ！」

「あだッ！」

妙ちくりんな技名と共に、本当にチョップを受けた。漑にツッコミ比べたら威力は劣るが、結構痛い。

「りったん、痛いッス」

「それが無責任にボケをかました者の末路だ。よく覚えておけ」

と、ブツダくらい悟りきった表情で言う律なのだった。伊達に日頃から漑にツッコミを受けているだけの事はある。勉強になります。「ま、どっちみち私が行った所で特にする事も無いだろうし。梓がいれば十分だろ」

「それもそうですね。それじゃあ私達だけでも行つて来ますね。ほら、行きますよ唯先輩！」

「わ！ 押さないでよあずにゃんっ」

「りっちゃん。お先にね」

梓と唯、続いてムギも挨拶も早々に店頭へと向かって行く。律の言う通り、ギターに詳しい梓がいれば何も問題ないだろう。

はてさて。僕はどうしようか。唯達に付いて行くより、ぶっちゃけ漑達と一緒にいた方が面白そうだな……。

「ほら、遙も早く行け。お前がいると余計ややこしい事になりそう

だからな」

「えゝ？　むしろややこしくしたいのにゝつ」

「すんな！　大変な事になったらどうすんだ！？」

「なに。返って免疫力がつく（キリッ）」

「よし分かった。お前がそのつもりなら、こっちにも考えがあるぞ」

「ほう？　それは面白い。だが何をされようと、我が輩はここを去るつもりなんぞ——」

「この間、隠れて饅頭の分のケーキを食べた事をバラされたくなくけりやさつさで行け」

「サーイエツサー！　行つて参るであります！」

りったん隊長の命令の元、僕は脱兎のごとく唯達の所へと向かった。自分の命には代えられないのでね！

## 第12曲 ムギさんのSEED覚醒 (前書き)

今回は、今まであまり出番のなかったムギさんのターンだぜ！

## 第12曲 ムギさんのSEED覚醒

律からの脅迫を受けて、しぶしぶながら唯達の元へと向かう僕。  
今後似たような事が無いよう、次から律の弱味をしっかりと握っておこうと心から誓う僕なのであった。自分が有利に立てるのなら、弱味だろうが七味だろうが味の素だろうが何でも握ってやる。

我ながら惚れ惚れせざるをえない邪な思慮よこしまに耽りつつ、僕は店頭へと歩いて行くのであった……。

「なんて思いつきり嘘だけど！ てなワケで呼ばれてもないのにジヤジャジャン！ 俺参上 さありったん、一瞬に漚しやんで遊ぼうぜー！」

「うわー、いつそ清々しいくらい何食わぬ顔で戻って来やがった！ おい遙！ お前、漚のケーキを黙って食べた事バラされていいのかよっ！？」

「いや、それについてなんだけどさ、よくよく考えてみれば律も一緒になって僕と食べてたじゃん？ 要は僕達共犯なんじゃね？」

「くっ！ 真相に気付いてしまったか……！」

「むしろ気付かないの方がおかしいって。そもそも、あんな子供騙しの嘘で僕をやり過ごそうだなんて、百万年辛いわ！」

「辛くしちゃった！ 甘くはないんだ！？」

「あ、間違えた。唐辛子ヨーグルトくらい甘いわ！」

「辛いのか甘いのかかなり微妙なチョイス！ もう少しマシな例えはなかったんかい！」

「『俺、一生ニートでいいや』って言ってるDQNくらい甘い！」「確かに甘いけども！」

「『将来結婚したら、子供は野球チームくらいほしいね』って言い合ってるバカカップルくらい甘い！」

「甘い！ 甘過ぎる！」

「だが彼女は何も知らなかった。付き合っている男が、実はDQNのニートだったという事に……！」

「ここでまさかの伏線回収！？」

「そして男がニートだと知っていたのにも関わらず、親友であるはずの僕が敢えて紹介したのだと言う事も、彼女は一切知る由もなかったのであった」

「お前の中の悪魔が怖い！」

「ところでりつたん。僕達、何でこんなくだらない事話してんの？」

「今更ながらお前が言うなアアア！」

## 第12曲 ムギさんのSEED覚醒

「——とまあ、そんな経緯で、律が何やらブチ切れ始めたので、避難の意味も含めて唯達の所へやって来ました」

「つまり、その頭のたんこぶは律先輩の仕業だと？」

正に然り、と呆れ顔で訊いてきた梓にそう頷く僕。本気で殴られたせいで、某野原さん家の息子さんみたく腫れ上がっていた。嘘だけど。いくら何でもあんな漫画みたいになってるワケがない。でも痛い事には変わりはないので、終始殴られた箇所をさすっていた。

「遥先輩、そんなに痛むんですか？ さっきからずっと痛そうにしてますけど……」

「律のヤツ、全力でアンパンチもといグーパンチで殴ってきたからねえ。まあモンキー・パンチよりはマシだと思えば軽いものさ」

「い、意味が分かりません……」

うん。自分でも言ってる意味が分からなかった。

などと梓との会話に興じている間に、唯が番台にいる店員にギターを渡していた。てか、まだ渡してなかったんかい。僕が来るまで何をしてたのやら。

「はい。ではお預かり……えっと、これってビンテージギターですか？」

「いえ、まだ買って一年ですー」

「……………」

唯の返答に絶句する店員さん。よほど信じられない言葉だったらしい。

「すみません。ただ汚いだけです……」

「あ、あはは……」

梓の訂正に、今度は笑って誤魔化した。そりゃ、店員さんの口から『ありえねー！』なんて言えるワケがない。

「それじゃあ注文通りメンテしますので、しばらく店内でお待ち下さい」

『よろしく願います』

頭を下げる唯と梓にムギ。僕も右に倣って頭を下げた。僕は一切関与していないんだけど、まあ一応念の為。

そうこうしている内にも、店員は手慣れた手付きで唯のギターをバラしていく。へえ、ギターってあんな感じになってるんだ。ああいうのって、何となく見入っちゃうんだよな。僕もよく昔はラジオやらテレビのリモコンやらを興味本位でバラしたものだ。その後戻した方は分らず、結局同じ物を買う羽目になったという情けないオチ付きではあるが。

「唯先輩どうしたんですか？」

と、そこでさっきからじーっとギターを凝視している唯に、梓が何気なく尋ねる。

「はふう、私のギターが裸にされていく……」

「何言ってるんですか」

何やら悦に浸っている唯に、半眼でツッコむ梓。想像力の逞しい

娘さんだ。

「あ、どうもいらっしやいませ細お嬢様<sup>（じむぎ）</sup>」

「あらどうも」

ふと近くを通り掛かった店長らしき人物が、ムギの顔を見て妙に腰を低くして会釈を始めた。そんな店長にムギも笑顔で応対する。その後に「今日はどのようなご用件で？」「友達の付き添いです」

「それはそれは！」と雑談を始めた。

「なあ唯。ここの店って、琴吹グループ<sup>（ことぶき）</sup>の系列なのか？」

「あ。私もそれ気になります」

何となく気になったので、店員さんには聞こえないよう囁くような声量かつ耳元で唯に尋ねてみた。それに同調して、梓も小さく拳手して話に入る。

「え？ うんそうだよー。前にムギちゃんが言ってたし」  
「なるほど」

道理で店員さんの腰が低いワケだ。さっきからずっとヘコヘコしてばっかだし。そりやお世話になっている会社の御令嬢に、粗相な態度が取れるワケないよな。

「でもリアルでお嬢様なんて呼ばれる所、私初めて見ました」

「私はいつもやめるように言ってるのよ？」

「そうなんですか——ってムギ先輩いつの間にそこに！？」

と、さっきまで向こうにいたハズのムギが、何の手品か僕達の目の前にいた。ホントいつの間にかいたのだこのお嬢様は。

「ついさっきよ？ 店長さん、挨拶だけ済ませて少し前にどっか行っちゃったから」

「そ、そうなんですか。一瞬何事かとビックリしました……」

「私もビックリしたー！ ムギちゃんが私たちの所にテンプテーションしたのかと思った」

「唯ちゃん、それは本田美奈子よ？ 正解はテレポーション」  
「いやそのツツコミは古過ぎる」

誰が分かるというのだそんなネタ。思わず僕がツツコんでしまっ

たじゃねえか。ムギさん、色んな意味で侮り難し。

「お待たせしましたー」

「え？ もう終わったのっ!？」

なんてボケツツコミしている間に、もう店員からメンテナンス完了の声が掛かった。その言葉に驚愕してすぐさま振り向く唯。さっきまでガチャガチャ作業をしていたと思っていたのに、随分と仕事の早い事だ。ていうかギターのメンテって、そんな数分で終わるよ  
うなものなのか？

「あ、あれ？ いくら何でもこんなに早く終わるワケないはずなんですけど……」

「そうなのか？ まあ文字数の関係だろうなあ」

「……何言ってるんですか遥先輩？」

いや何でもない、と首を振る僕。これ以上言々とメタ発言になっ  
てしまふしな。今まで何度もメタ発言してきてるじゃねえか、なん  
てツツコミは受け付けておりませんのであしからず。

「それでは、お代の方五千円になります」

「ふえ？ ……お金、かかるの？」

「当たり前じゃないですか。まさかお金がかからないとでも思った  
んですか？」

梓の言葉に、放心したような表情を浮かべてこくこく頷く唯。本  
当にお金がかからないとか思っていたらしい。まあいくら何でも無  
料でメンテなんてするワケがないわな。

「もう。こまめに手入れしないからですよ？」

「どうしよ！ 私お金なんて持ってきてないよー！」

「あら？ 唯ちゃん、お金忘れてきちゃったの？」

「そうなのムギちゃん。どうしよーっ」

とうとう涙目になって泣きついて来た唯に、

「大丈夫よ。私に任せて」

と笑顔で答えるムギ。

「え？ 大丈夫って、どうするつもりなんですかムギ先輩？」

「うふふ。見ていれば分かるわ」

言って、ムギはゆつたりとした歩調で店員に近寄る。何か秘策でもあるんだろうか？

「すみません。今回はサービスというワケで大目に見てもらえないでしょうか？」

「細お嬢様！？ いやですがしかし……」

「ここはどうか私の顔に免じて……」

「さすがに細お嬢様のお願いでも、こちらも商売なものですから……」

……

「……ダメ……なんですか？」

「ちよつと無理があるかと……」

「……ダメ……なんですか？」

「ええ。心苦しくはありますが……」

「……ダメ……なんですか？」

「……まあ、はい……」

「うわー。ムギお嬢様によるリピート攻撃が始まりましたよ！ それもお嬢様という最強の切り札ジョーカーを使って。えげつない事この上ない

あーあ。見ると店員さん、どうしたもんかと冷や汗垂らしながら狼狽してるよ。それでもまだ笑顔（凍ってはいるけど）を維持しながらも断り続けているのだから大したもんだけど。

って、あ、あれ？ 幻覚か？ 何か次第にムギの瞳から光が消えていつてるようない。

「うわわ！ ムギ先輩の目のハイライトが消えちゃってますよ！？」

怖い！ 何かすごく怖いです！」

「おお！ これが噂に聞く種割れってヤツか！」

「今にも運命とか自由とか言う名前のガンダムを使いそうだね！」

ムギの豹変に三者三様で驚きを示す僕達。今僕達は、リアルにSEED覚醒した貴重な瞬間を目撃している！

「……どうしても……ダメ……なんですか……？」

「わ、わかりました。今回はサービスということ……」

あ。ついに店員が泣きながら陥落してしまった。何とも哀れ過ぎる姿だ。まああのムギの姿を見たら誰でも恐れを為すわな。ご愁傷様である。

「唯ちゃん、やったわよ♪」

「ムギちゃ〜ん！　ありがと〜！　助かったよ〜っ」

Vサインをかざして笑みを浮かべるムギに、唯が感激のあまりガバツと抱きついた。ムギもまんざらでもなさそうな表情を浮かべて応対する。アメリカンな感情表現だ。じゃあイタリアンな感情表現って何だと言われても返答に窮してしまうが。

ま、何はともあれ。

「うむ。これにて一件落着ですな！」

「でもこれ、脅迫行為になるんじゃない……」

「梓。それを言ったら負けだぞ？」

ポツリと呟いた梓に、僕は人生の先輩として助言しておいた。

第13曲『ピアノソナタ第12番変イ長調』（前書き）

まだまだ続くよムギのターン！

そして、久しぶりのシリアス回。

### 第13曲、ピアノソナタ第12番変イ長調

琴吹紬――。

通称ムギ。バンド内ではキーボード担当。少しウェーブが掛かったクリーム色の髪と太眉が特徴。百合好き。少し天然の入ったお嬢様育ち。その為、世間知らずな面が有り。でもちよつと腹黒。見た目より結構グラマー。部活で常備されている食器やお菓子等は、殆どムギの私物。

そして、僕の女装を知っている数少ない人物の一人で。

かつて同じピアノ教室に通っていた、僕の幼なじみ……。

### 第13曲、ピアノソナタ第12番変イ長調

あれから。

あれから、唯のギターも見違えるように綺麗になって持ち主の元へと戻り、用が済んだ僕達はそれぞれの帰路へと散会と相成った。その時に漣がいつまでも店内に残り続けようとしたせいで、僕が得意の舌先三寸口八丁で漣を誘導し、律が持ち前の強引さで何とか連れ出せたという苦労話は、いずれまたの機会に。

それで、だ。

漣と律は楽器店から割と近くだった為、既に帰宅済み。唯と梓はさっきまで帰り道を共にしていたのだが、途中の道で別れてしまった。僕と唯、それと梓とは目指す帰路が違うのだから、当然と言

えば当然の結果ではあるのだが。

そうになると、残るは二人だけ。

消去法で言うところ、僕とムギが残る事となる。

とどのつまり。

ムギと一緒に帰らなければならないという構図が出来上がるワケ  
でして。

「……………」

あちゃー。

あちゃちゃー。

あちゃちゃほわちゃー。

なんてケンシロウみたいな事言ってる場合じゃない。心境的には  
「ひでぶ！」と断末魔の叫びをあげまくっているワケではあるのだ  
が。

まあとりあえず、あれだ。

ムギさんと二人つきりという、この何とも言い難い気まずい状況！  
そういえば、ムギの家って僕が住んでるアパートと帰るルートが  
大体同じなんだったけ。そうだ。そうだったよ。失念していた。こ  
れまでは登下校をする際はなるべくムギと遭遇しないよう、注意を  
払っていたというのに。それがこのザマだ。馬鹿馬鹿！ 僕の間  
抜け！ このクソツタレが！ 誰がクソツタレだこの野郎！ 未だ  
かつてクソなんてもらした事ねえよ！ いやそういう問題じゃねえ  
よ。つか、自分にキレてどないすんねん。

「……………」

「……………」

えー。そんな一人ボケツツコミをしている間も、お互い沈黙を保  
ったままだったり。要は無言なんです。唯達と別れたのを最後に、  
一言も会話を交わしておらんです。沈黙が場を支配しておるので  
す。

いや、別にいつものノリで話し掛けてもいいのだが、それは大抵  
唯達がいる時限りなんだよな。二人つきり時なんて、何を話してい

いのやら分からなかったし。

否。

それは言い訳だ。

本当は、今更ながら僕がムギに話し掛けるだなんて、都合が良すぎると思っただから。

全てを無かった事にするみたいに。

あの時、一方的に別れを告げたくせに。

それなのに、ムギとまた仲良くなるうだなんて。

あまりにも、虫が良過ぎる――。

「久しぶりね。こうして二人で並んで歩くの……」

自己嫌悪にも似たよしなし事に耽っていた最中、ムギが不意に呟いた。その言葉に脳内の処理が追いつかず、「え？ あーまあうん」と生返事で答える。まさか向こうから声を掛けてくるとは思わなかった。なので、反応が遅れてしまった。

「昔は――ピアノ教室に通っていた頃は、よくこうして二人で一緒に帰ったわよね」

「あーまあ、そーね」

「そうそう。ピアノが上手く弾けない時があつて、それで何度も相談した事もあつたわよね」

「あーまあ、そーね」

「でも、いつも貴方は素っ気ない態度ばかりで、まるでお地蔵様に話し掛けているみたいだったわ。あの頃は私も幼かったから、特に気にしてなかったけれど。ふふ、何だか懐かしい」

「あーまあ、そーね」

「……私の話、さっきからちゃんと聞いている？」

「あーまあ、そーね」

「私の事、愛してる？」

「あーまあ、そー……………何を言い出すのかねチミは」

危つく頷くところだったじゃねえか。

クスクスと可笑しそうに笑うムギに、どうにもやり辛さを覚えて

頭をボリボリ搔く。

まったくこのお嬢様は。油断も隙もあつたもんじゃない。

「ピアノはまだ続けてるの？」

「やめたよ。あれ以来触つてすらいない」

「そう。才能あつたのに……」

「才能なんて無いよ」

そう。

才能なんて無い。

あつたとしても、僕には分不相応だ。

「少なくとも、私はあつたと思うわ。貴方が弾いたどの曲もとても素晴らしかった。特に最後に弾いた曲、『ピアノソナタ第12番変イ長調』は今でも耳から離れないくらい忘れられないわ」

「……………」

僕が最後のピアノ教室で弾いた曲。

ピアノソナタ第12番変イ長調。

別名『葬送』とも呼ばれ、かの偉人ベートーベンが作曲したものだ。後にシヨパンが感銘を受け、同じく三楽章に有名な葬送行進曲を持つピアノソナタ第2番で、明確にベートーベンを意識して作曲したとの逸話があるほどの曲だ。

当時、どうして僕がこの曲を選んだかは分からない。先生に課題として弾かされただけなのだが、選曲自体は自由だった。それなのに、この自他共に認める怠け者が、簡単な曲じゃなくわざわざ『葬送』を選んだのだ。

今にして思えば、それは未来を暗示するものだったのかもしれない。

それとも、ひねくれた神様による皮肉の効いた予兆か。

なんにせよ、それで僕は本当に“あの人”を葬送する事になったのだから――。

「あの……大丈夫？ とても辛そうな顔してるけど……」

ムギの言葉にハツとして、「いや、何でもないよ」と無理やり表情を消して言葉を返す。

いかな。どうもムギの前だと素が出てしまう……。

「ねえ、それなら軽音部に入ってみない？ 私と被るかもしれないけど、ピアノも弾けると思うし……」

「けいおん？ 何それ可愛いのか？」

「可愛いと思うわよ。去年の文化祭の話だけど、さわ子先生自作のステージ衣装とか、とても可愛いかったもの」

う。全く邪気の無い眩しい笑顔で言いおった。まさかそう返してくると思わなかったぜ。ムギさん、改めて侮れん小娘よ。

「あー、せっかくだけどやめたく。ピアノは弾けても、音楽に詳しくなけりゃ、さほど興味があるワケでもないし」

「そう。それは残念ね……」

言って、悲しそうに目を伏せるムギ。

うぐぐ。そんな捨てられた子犬みたい目をするでない。言い知れない罪悪感で押しつぶされるだろうが。狙ってやってんだろうかと勘ぐりたくすらなる。このお嬢様の場合、その辺狙ってやっている可能性はあるからな！。末恐ろしい娘だ。

「……………」

「……………」

それからまた、どちらと共なく無言になって閑散とした住宅街を歩いていく。元々僕は話す気が起こらなかったし、ムギが喋らない以上、会話は始まらない。それでいいのかという気もしたが、それでも積年の気まずさからか、何も話題が思い浮かばない。会話の糸口が掴めない。故に、黙って歩くしか他なかった。

しばらく黙々と歩いた後、別れ道となる十字路が見えてきた。僕はこの先を右に、ムギはまっすぐ直進する事になるので、少しすればお別れだ。

「……一つだけ、訊かせてほしい事があるの」

と、ちょうど十字路に差し掛かった所で、ムギが不意に立ち止まって数分振りに口を開いた。少しでも先行していた僕は、黙ってムギの方を振り向き、次の言葉を待った。

「どうして突然、うちの学校に入ったりしたの？」

「……………」

どうやって、男であるハズの僕が女子高に入れたのか、ではなく、どうして、ムギ達のいる学校に入ったのか。

それは、僕の内情をよく知るムギだからこそその言葉。

一番聞きたくなった、忌避の言葉。

「やっぱり“あの事”を気にして——それで、なの？　だとしたら、貴方が気に病む事はないわ。だってあれは——」

「じゃあ僕はこっちの道だから。バイバイ」

間髪入れず、それこそムギの言葉を遮る形で強引に自分の帰路へと向かう。

これ以上、ムギと会話したくなかったから。

これ以上、“あの時”の事を思い出さくなかったから。

虫が良すぎるのは分かっている。

僕の女装を知っているにも関わらず、頼みすらしていないのにずっと黙ってくれているムギに甘えているのも分かっている。

自分がどれだけ愚かしい所行をしているのかも分かっている。

けれど——

どうかお願いだから、僕を放っておいてくれ。

僕を、これ以上苦しめないでくれ——。

「待って！」

ややあって、祈り虚しくムギに右手を掴まれて強制的に止められた。そんな状況下でも僕はムギの方を振り返えず、次の言葉を待ってみた。

「もう昔みたいには戻れないの……？」

「……………」

「あの頃みたいに二人で帰ったり、楽しくお喋りしたり、一緒にピ

アノを弾いたりしたあの時のようには、もう戻れないの……？」

ぎゅっと手を力強く握られたのが感触で分かった。ひよっとすると、今ムギは泣いているのかもしれない。今まさに瞳から涙を零しているのかもしれない。

それでも、僕は――

「昔になんて戻れないよ」  
そう。

昔になんて戻れない。

時間は進む事しか知らないのだから。

無為に。

無理に。

無力に。

無情に。

無策に。

無我に。

無差別に。

無作為に。

無意識に。

無意味に。

無価値に。

無関心に。

時間は僕達を嘲笑うかのように、残酷にも時計の針を刻々と動かしていく。

仮に。

仮に、だ。

仮に“あの頃”に戻れたとして。

“あの人”を救い出せたとしても。

僕の罪までは無くない。

あの時の事を、無かった事には出来ない。  
だから――

「昔にはもう戻れないんだよ。ムギ……」

優しい言葉は、掛けられない。

「――もう“紬”とは呼んでくれないのね……」

それだけ言つて、ムギはそつと手を離れた。

掴まれていた側の腕が自由になり、僕は視線を前方に向けたまま、  
一歩ずつ足を踏み出す。

泣いているかもしれないムギを構うどころか慰めの言葉すら掛け  
ず、僕は歩いていく。

「バイバイ。ひい君……」

濡れた声で――今生の別れにも似た悲哀のこもった切なさを誘う  
声で、昔懐かしいあだ名で呼ばれたような気がした。

けれど僕は、一度もムギの方を振り返ろうとはしなかった。

#### 第14曲、突撃！平沢家の晩御飯（前書き）

前々から憂ちゃんを出したいな、と思っていたので、予定より早く登場させてみました。憂ちゃん可愛いよ憂ちゃん。かわ唯に負けず劣らずかわ憂です。さすがは姉妹。バンザイDNA

そんな憂ちゃん回の始まりです。

## 第14曲 突撃！平沢家の晩御飯

この物語は軽音部一同とその他一名の殺伐な日常をたんと描くものです。過度な機体《MS》——特に白いヤツには乗らないでください。俺がガンダムなんだ！

そんな戯言と共にどうもこんにちは。本作の主人公（と言うと語弊があるか？）である音無遥でございます。しかしてその実体は、3分間で活動時間を終えてしまうウルトラにエース級な人だったのだ！

なんて挨拶代わりの嘘もここらで締めて閑話休題。

今現在、僕はとあるお宅へとお邪魔していたりする。そこが一体どこなのかと言うと――

「はいお姉ちゃん。珈琲<sup>コーヒー</sup>持って来たよ」

「ありがとう憂<sup>うれ</sup>。お砂糖とミルクあるー？」

「勿論あるよ。あ、遥さんも珈琲にお砂糖かミルク入れます？」

「じゃあキンキンに冷えた麦茶をコップに入れてもらおう（キリッ）」

「珈琲……………」

こんな感じで、厚かましくも平沢家に入り浸っております。

## 第14曲 突撃！平沢家の晩御飯

そんなワケで。

場の空気をまるで無視した僕の麦茶発言を聞いて、珈琲の入ったカップを手に持ったままフリーズしてしまった憂ちゃんであったが、すぐに「分かりました」とにこやかに快諾して台所に引き下がった後、本当に麦茶を持って来てくれた。いや、ほんの冗談のつもりだったのに。何て言うか、その、あの……………ゴ、ゴメンね？

そうなると僕の分の珈琲が余るワケなのだが、まだ憂ちゃん自身のは入れてなかったみたいなので、そっちの方に回わしてくれた。珈琲が無駄にならずに済んだ事と僕のふざけた言動に対し、「気にしてませんから」と笑って許してくれた憂ちゃんにハートキャッチされたのは言うまでもない。こればかりは嘘じゃないぜ！

心根の素直で綺麗な子をからかうべきじゃないかと改めて肝に命じつつ、テーブルの上に置かれたコップを手にとって麦茶を飲む。うむ。程良く冷えた麦茶が、この夏の暑さで火照った体を緩和してくれる。茶葉もなかなか上等な物を使っているのか、これがなかなかに美味い。うーむ、良い仕事してるな憂ちゃん。

と、何気なく唯の方を見ると、珈琲に砂糖をドバドバ。おまけにミルクをドボドボ過剰なまでに入れていた。もはや珈琲牛乳と言った方が相応しい色合いになってしまっている。

……。

こんなの、絶対おかしいよ！

「……唯、それはさすがに入れ過ぎじゃないカ？」

「ふえ？ そーかな。ちょうどいいくらいだと思っけど」

「お姉ちゃんは大の甘党なんですよ」

「甘党なんてレベルを越えてるぞ……」

例えるなら、『よーし。魔王討伐目指して勇者パーティーいざ出陣だ！ ただし全員既にレベルMAX』みたいなの！

もう何も怖くないんですね、分かります。

「えへー。この甘さが格別なんだよね」

言って、心底嬉しそうにスプーンを回して珈琲をかき混ぜる唯。

この言い方からして、普段からこんな風に珈琲を嗜んでいるみたいだ。

パネエ。

マジパネエっす、唯さん（味覚が）。

逆に憂ちゃんの方と言うと、ブラツクのまま口に運んでいた。若い子にしては渋めな好みだ。見た目はそっくりな姉妹——唯をそのままポニテにさせたような瓜二つな憂ちゃんではあるが、味覚までは姉の影響を受けなかったらしい。なんだかちょっと安堵してしまった。

「それはそうと、今日のはるちゃんすごく可愛いよね」 いつもそんな私服着てるんだ」

「あ、それ私も思いました。とても似合ってると思います」

「ん？ そうかえ？」

と小首を傾げつつ、内心唯と憂ちゃんの言葉にホツとする僕。自分では似合ってるかどうかイマイチ分からなかったしな。

ここで一応説明しておく、今の僕の服装は花柄のキャミソールに白のカットソーを羽織り、下はデニムのミニスカートという格好をしている。どれも女子高生向けに売られているファッション誌に『今年の夏はこれでキマリ』と銘打って記載されていた衣服を、この間ネット通販で購入した物ばかりである。

で、何故男であるハズの僕がこんなキャピキャピした服装をしているのかというと、まあこれも一種の用心ってヤツだ。休日の人混み賑わう街中で男の格好で出歩いて同級生に見つかりでもしたらさすがにヤバいし。最悪、僕の性別がバレるかもしれない。

つまりは、その危険を防ぐ為にわざわざ休日にも関わらず女装しているのだ。

なので、ちょっと可愛いらしく髪型をおさげ風に両端を結わつてみたり、いかにも女子ウケな装飾をしたサンダルを履いてきたりしたのも、決して趣味などではなく一身上の都合ってヤツなのだ。大事な事なので二回言うが、誓って趣味ではないのだ！

ホ、ホント二ホントダヨ？

「でも、最初遙さんを見た時は少し驚きました。お姉ちゃんから聞いてた話だともう少し男の子ばい人なのかなって思ってたので」

「そうそう！ スーパーではるちゃんを見かけた時は一瞬誰かなって思っちゃったよ。いつもと雰囲気違ってからさ」

「ほほう。つまりいつもの僕は全然女の子らしくない？」

「そ、そうじゃなくて、いつもより女の子ばくって可愛いって言いたかったんだよ」

変に誤解しないで、と慌ててペンギンみたく両腕をパタパタ振り上げて弁解する唯。

……何これ可愛い。唯の方が断然可愛いよ。超抱きしめたい！

と、それはさておき。

唯が先ほど言った通り、元々僕達はスーパーで偶然出会っただけで、事前に約束を交わしたワケではない。その後、何となく流れで平沢家へと赴く形になっただけなのだ。

で、どうして僕が平沢家に来る事になってしまったのかと言うと……。

以下、回想――

『あ、はるちゃんだっ！ 綺羅星』

『綺羅星 って、誰かと思えば唯じゃないか。何やってんのこんな所で？』

『憂と一緒に買い物に来たんだよ。そんでお菓子ゾーンをさっきまで見回ってたんだ』

『憂って、隣りにいる唯そっくりの子の事？』

『あ、はじめまして。平沢唯の妹の憂です。いつも姉がお世話になってます』

『なるほど。これは唯に似てかわ憂、もとい可愛い――ってそうじゃない。えっと、こちらこそはじめまして。唯と同じクラスメート

の音無遙です』

『ねえねえ。それよりはるちゃんこそスーパーで何してたの?』

『ん? 見ての通り買い物途中。ちよつくら晩御飯の材料を調達しにね』

『ああ、そつか。はるちゃん独り暮らしだもんね。大変だね』

『まあね。そつちも大方、僕と同じ理由だった?』

『はい。昨日福引きでお姉ちゃんが神戸牛を当てまして、それで今日はすき焼きにしようかと——』

『ななな、なんてこつとウるイイああああアアアア!』

『わっ! 突然どうしたのはるちゃん!? 若本規夫さんみたいな声出して!』

『財布を——財布を家に忘れてきてしまったあああ!』

『そ、そうなんですか? じゃあ面倒ですけど、戻って取りに行かなきゃいけませんね……』

『くっ! でもここから家へは死ぬほど遠いんだ。これじゃあ行つて戻って来る間に、新鮮な肉や野菜が皆に取られて無くなってしまふ!』

『え? そうなの!?』

『そう、なんですか?』

『遭難DEATH。もとい、そうなんです。このままでは、めがっさ空腹で死んでしまうよろん!』

『憂。はるちゃんが可哀想だよ。ウチで食べてってもらおうよ』

『えーと。お姉ちゃんもこう言ってるワケですし、ウチで食べていきます?』

『ぜひゴチになりました!』

——以上、回想。

とまあ、こんな紆余曲折の末あって、こうして平沢家にお邪魔し

ているのである。ぶつちゃけ、財布を忘れたとか、スーパーから家まで死ぬほど遠いとか、全部ひっくるめて大嘘なのだが。

自分が美味しい思いをする為ならば平気で嘘を吐く、ばかあそんな屑野郎でござーやす。

「ところで、本当にに来て良かったの？　なんか無理やり押しかけたみたいで申し訳ないんだけど……」

無理やりも何も、すき焼き目的に嘘を吐いた僕が言う台詞じゃないが。

「いえ、気にしないでください。どっちみちお姉ちゃんと私とだけじゃ食べ切れない量だったの。むしろ遥さんが来てくれて助かるくらいですから。ホント言うと、もう一人いてくれたら材料を使い切れてちょうど良かったんですけど……」

「そうなの？　じゃあご馳走してくれるお礼と言っちゃ変な話だけど、僕がこの手に打ってつけの強力な助っ人を呼んでしんぜよう」

「ほえ？　強力なスタンド??？」

「それはジョジョ」

などと唯にツツコミを入れつつ、強力な“助っ人”（↑ここ強調）を呼ぶべく、僕は携帯電話を取り出した。

## 第15曲〜ゲームは1日36時間〜（前書き）

本編とは全然関係ない話で恐縮ではありますが、この間アニメ「けいおん！」の27話を観ました。

んで、観ていて思ったのですが……。

これって、思いきり映画フラグじゃね？（普通に面白ったけど）

第15曲〜ゲームは1日36時間〜

『もしもし？ 秋山ですが——』

「もしもし、私メリーさん。今あなたのいる地表の裏側にいるの」

『ひい！？ 怖っ……………くは無いな！ よくよく考えてみ

れば、ブラジルにいるメリーさんなんて怖くもなんともし無いな！』

「もしもし、私メリーさん。今私の後ろにいるの」

『何が！？ メリーさんの後ろに一体何がっ！？』

「もしもし、私いとしのメリーさん。今桑田佳祐の後ろにいるの」

『じゃあ桑田佳祐に電話しろよ！ 何がしたいんだよメリーさん！

あと、それを言うなら「いとしのエリー」な！！』

「痒い所にまで手が届く、素晴らしいツツコミの数々ありがとうござ

います！」

『あ、いえいえ。こちらこそどうも——じゃない！ その声と口調

からして遙だな！？ わざわざ電話番号まで秘匿して私のケータイ

にかけやがって！ 性質<sup>タチ</sup>が悪いにもほどがあるぞッ！！』

「岩崎良美？」

『それは「タッチ」だ！ 古いボケかましてんじゃねえよ！ つか、さっさと要件を言え！ 何しに電話かけたんだよお前はッ！！』

「おっと、そっぴやそうだった。助けて漣えも〜ん。ジャイ子にいじめられたんだよう。何か道具出しておくれよう〜」

『……………切るぞ？（お前との縁ごと）』

「言葉の裏に隠された真実！ ちよいと待ち！ 次からちゃんと真面目にやるから〜！」

『じゃあ早くしてくれよ。私だって暇じゃないんだからな？』

「じゃあ聞いてくれ。昭和58年6月に雛見沢村で起きた『オヤシロさま事件』に関する僕の見解を。推理は可能か不可能なのかを―

「……」

『（ガチャ。ツー、ツー、ツー）』

切られた。

第15曲〈ゲームは1日36時間〉

「……それで、私が代わりに呼ばれたワケですか？」

「その通りなのだよあずにゃん！ まったく澪の短気にも困ったもんだよね。話の途中に通話を切るなんて……。ホントにもうプンスカプンスカ！」

「澪先輩が通話を切るのも無理ないと思いますけど。というかそれ、全然怒っているようには見えないんですが……」

僕の話聞いて、梓がそんな呆れ混じりのコメントを呟いた。

そういつたワケで、あずにゃんこと梓にお越し頂きました。別に某徹子さんの部屋みたく人生観などを語り合ったりはしないので、そういった期待はしないように。一体何の話やっちゅーねん。

「わ〜い♪ あずにゃんだあずにゃん♪」

「ちょ！ 引つ付かないでくださいよ！ ただでさえ暑いのに……」  
一切の躊躇無く抱きついて来た唯に、梓がいかにもうザそうに顔をしかめる。個人的にはめちやくちや羨ま死い、もとい羨ましいのたが。許されるならば、僕が唯にルパンダイブしたいくらいだ。戯言抜きでな！

「しかし、ごめんな梓。急に呼び出したりして」

「あ、いえ。どうせ暇でしたし。それに神戸牛なんてめったに食べれる物じゃありませんし、逆に呼んでいただけて嬉しいくらいですから」

「そっか。そりや重畳」

向こうの都合も考えずいきなり呼び出してしまったもんだから、大丈夫だろうかと気を揉んでいたが、どうやら喜んでもらえたようで何よりだ。ぶっちゃけ、澪の次は律に電話をかけていたのだが、通話中だったからな。律もつくづく惜しい事をしたものだ。

「本音を言つと、遥先輩が食事に誘ってくれるって言うものだから、二人つきりとばかり期待していたんだけど……」

「はえ？ あずにゃん、何か言つた？」

「い、いえ！ べ、別に何も言つてませんからっ！」

と、唯の問いに何やら慌てて否定する梓。僕も梓が何かぼそぼそと呟いていたような気がしたのだが。単なる気のせいかな？

「それよりも、いい加減離れてくださいよ唯先輩！ ただでさえエアコンが付いてなくて暑いんですからッ」

「ふえゝん。あずにゃん。そんなイジワル言わないで」

尚も嫌がる唯を、梓は強引にひっぺはがす。見ていて妙に和む光景だった。

「ごめんね梓ちゃん。お姉ちゃん、エアコンの風が苦手だから……」

「ううん！ 気にしないで憂！ むしろ私は食事に誘われた立場だし、逆にお礼を言いたいくらいなんだからっ」

「そう？ でも。ホントにごめんね梓ちゃん。それと気を使ってあげよう」

「だから、お礼を言うのは私の方なんだつてば」

「あ、そっか。ふふっ」

「もう憂ったら。あははっ」

と、仲睦まじく微笑む梓と憂。そういや、梓がここに来る前に聞いた事ではあるけど、この二人ってクラスメートなんだっけ？ 割りりと息も合つみたいだし、良い関係を築いているみたいだ。まるで僕と澪しゃんみたいだな！ あ、ツツコミは各自セルフでよろしく。「ねえねえ！ あずにゃんも来てくれた事だし、せっかくだからゲームでもして遊ぼうよっ！」

「遊ぼうって、またそんな子供みたいな事を……」

「えゝ？ ダメなのあずにゃん？」

「いやダメってワケじゃないですけど、なんて言うか唯先輩って、基本どこにいても同じようなノリですよ……」

「へ？ そーかな？」

梓の言葉に可愛いらしく小首を傾げて見せる唯。その意見には僕も同意せざるを得ない。ホント唯って、こんな感じでいつもゆるい娘なんだよなあ。まあ、見ていて癒やされるから全然良いんだけど。

『肉体・精神疲労時に平沢唯！』みたいな。

「それでお姉ちゃん。ゲームをするのは良いけど、何をするの？」

ウチ、家庭用ゲーム機とか無いから、すぐ出来るような簡単なゲームじゃないといけなくなるけど」

「あ、そつか。じゃあ、えゝつとねゝ」

と、何やら唸りながら、これ見よがしに腕を組んで考えに耽り始めた唯。この真剣さを勉強やギターの練習に回せば、さぞや上達する事だろうにと、唯を見ていて惜しく思ってしまった。僕もあまり人の事を言えたもんじゃないが。

なんやかんやでしばらくした後、「そうだ！」と唯が手をポンと叩いて笑みを輝かせた。

「唯先輩、何か思い付いたんですか？」

「うん！ みんなでポッキーゲームやろうよ！ 二手に分かれて、一番短くポッキーを食べた方が勝ちね」

「合コンかよ」

しかも調子にのったバカ野郎が言いそうな、いかにも頭の悪い発言だった。

やれやれ、まったく唯は。こんな女子だらけの現状でポッキーゲームだなんて、一体誰得なのだと……。

俺！ 俺だよ俺俺！ 完全に俺得なシチュエーションじゃねえかこれ！！

さあ！ さあ早く！ 今すぐ唯の提案に乗るのだ。さすれば、美少女達と合法的にキツチュできる、夢のような体験を――

「ダメだよお姉ちゃん。ご飯の前にお菓子なんて食べたりしたら」

「というか、ゲームを口実にお菓子を食べたいだけなんじゃないですか？」

「えへー。バレちゃったか」

「……………っ！」

い、言えませんでしたあ——ッ！！

「あれ？ はるちゃん泣いてるの？」

「ううん。ナンデモナイヨ」

この苦しみと悲しみ、必ずやどこかで雪辱をはらすと誓い括弧アールワイ。

「とりあえずポッキーゲームは無しにして、別の事しようよお姉ちゃん」

「そだね。じゃあえつとねー、間違い探しなんてどう？」

と、嬉々と言う唯。また幼稚じみた遊びを……。いかにも唯の精神年齢が窺える。そこらにいる園児と良い勝負をしているかもしれない。

「間違い探し、ですか？」

唯の提案に、梓がそのまま尋ね返す。

「という事は、何か絵付きの本でも持って来るんですか？」

「ううん？ そんな本ウチには無いよー」

「え？ 本も無いのに、何の間違いを探すんですか？」

「んとね、人生とか」

「「人生とか!?!」」

何それ怖い！ 人生の間違い探しって、心の傷を広げ合って何が楽しいの！？ 戦慄するあまり、梓とハモっちゃったよ！

やべー。

マジやべー。

このまま唯といったら精神がやられる。むしろ殺<sup>や</sup>られてしまう！

「あ、いつけない。もうこんな時間」

とそこで、壁掛け時計の時間を見て、不意に憂ちゃんが立ち上がった。

「そろそろ晩ご飯の準備しないと。後はみんなでゆっくりしてて」  
なんと。これは願ってもいない千載一遇のチャンス！ これを逃す手は無い！

「なら僕も手伝うよ。こう見えて料理は一通り嗜んでるから」

「ホントですか？ 正直、一人で作るには大変な量なので、手伝ってもらえるのなら助かります」

「うむうむ。イージス艦、もとい大船に乗ったつもりで任せんしゃい」

というより、ぶつちゃけ逃げる口実が欲しかったただけなのだが（でも敢えて言わない）。

「え！？ ちょ、遥先輩まで行っちゃうんですか！？ 私一人置いて行かないくださいよっ！」

先導する憂ちゃんを付いていく途中、梓が捨てられた子犬みたいな助けを求める目で僕を見てきた。

「ごめんよあずにゃん。僕も我が身が可愛いんだ……！」

「じゃああずにゃん。晩ご飯が出来るまで、私とトランプでババ抜きでもしようよー」

「あ、良かった。今度は思っていたよりまとも……」

「ちなみに勝ったら賞金1億で、負けたら負債額1億ね」

「ライアーゲーム！？」

去り際、また唯が物騒な事を梓に口走っていたような気がしたが、後が怖かったので何も聞かなかった事にしておいた。

## 第16曲　女子ト——ク——

「わ。遙さん、包丁の使い方がお上手ですね」

「うんにゃ。憂ちゃんには負けるよ」

時刻は午後の5時前。唯と梓を残して台所へとやって来た僕と憂ちゃんは、すき焼きを作る為の肉と野菜を、それぞれ食べやすいサイズに切る作業をしていた。あ。ちなみにエプロンは憂ちゃんから借りました。しかも裸エプロンなんだぜ！ 当然のように嘘だけど、それはそうと、この隅々まで整理整頓され、細かい所まで掃除が行きとどいている平沢家の台所——これだけでも圧倒されるものがあるのに、それ以上に驚愕したのは憂ちゃんの包丁捌きだ。僕もある程度料理を嗜んでいる身とはいえ、こうも素晴らしく正確に切るなんて、到底真似できる事ではない。

この憂ちゃんの包丁捌きを見ているだけで、和洋折衷ありとあらゆる料理を調理出来るのではないだろうかという気すらしてくるのだから不思議なものだ。案外、ホントに何でも作れるかもしれない。そう思わせてならないほどに、憂ちゃんの家事スキルはハイレベルだった。

「やっぱり幼少の頃から料理をしているだけの事はあるねー。プロ並みと言っても過言じゃないよ」

「ふふ、ありがとうございます。でも、それを言うなら遙さんだって十分凄いですよ？　ここ最近料理を始めた人とは思えないくらい器用ですから」

「いやいや。僕なんてまだまだだよ」

などと談笑を交わしながら、お互い効率良く作業を進める。やはり同じ趣味を持っている同士との会話はそこはかとなく楽しいものである。周りを探せばいくらでもいるんだろうけど（律とか）生憎

となかなかそういった会話に巡り会わないのが近頃の悩みでもある。  
一方その頃、居間で待機している唯と梓はと言つと――

「はいッ。ハートの5・6・7・8で革命です！」

「じゃあ私は、ジョーカーとジョーカーとジョーカーとジョーカーとジョーカー  
オカアアア！ で革命返しねー」

「なにそのジョーカー無双！？」

大富豪で盛り上がっているらしかった。

## 第16曲　女子トーク！

「いやその理屈はおかしいですよ！　どうして大富豪で2枚しか存在しないハズのジョーカーが4枚もあるんですかッ！」

「4枚だけじゃないよー。まだ私の手札に4枚残ってるよー」

「どんだけえー！？」

僕達のいる台所にまで響き渡る梓の盛大なツツコミ。叫ぶ気持ち  
は分からないでもないが、そのツツコミはさすがにもう古いと思う  
のだが。

「憂ちゃん。唯のあれってどういう事？」

「お姉ちゃん、昔から手札にジョーカーを忍び込ませるのが得意だ  
つたんですよー。うふふ、私もよくお姉ちゃんにああやって負かさ  
れてたな〜」

「いや、うふふ笑つとる場合じゃないですがな」

止めるよ妹。仕事しろよ違和感。将来、姉が暗黒面に堕ちるかも  
しれない危険性を孕んでいるのに、何故誰も止めないんだ。可愛い  
はジャスティスだからって、何事も許されると思つたら大間違いだ  
ぞ。

まあ、唯も憂ちゃんもテラ可愛いから、どんな悪事でも全然許せちゃうけどねっ！

「大富豪といえば、誰しも一度はジョーカー無双を喰らう事ありますよね」

「あるあ……ねえよ」

むしろ、どうやればジョーカー無双だなんて神技に出くわせるんだよ。一体唯はそんな詐欺師めいた手品をどこで会得したというのだ。

平沢唯、ここに来てまさかの技と疑惑のデパート説浮上。

「はあ。やっと抜け出せた……」

とそこで、唯とトランプをしていたハズの梓が、そんな溜め息と共に僕達のいる台所へとやって来た。心なしか、この数十分の間にひどくやつれているようにも見える。

「あれ？梓ちゃんもこっちに来たの？」

「うん。途中で適当な理由を言っでここに逃げて来ちゃった」

「でも、ご飯にはもう少し時間が掛かるよ？」

「いいの。唯先輩とトランプしたくなかっただけだから。唯先輩とトランプしてても、ルール無用と言わんばかりにあの手この手で私を負かしてくるんだもん。逃げたくもなるわよ」

「あはは……」

梓の憤慨する姿を見てそう苦笑する憂ちゃん。過去に憂ちゃんも同じような目にあっただけから、過去の自分を梓と重ねて見ているのかもしれない。それでも一切怒ろうとはしないのだから、ここと姉に甘い妹ちゃんである。

「それで、その唯は今何してんだ？」

包丁を手にしながら、僕は首だけ梓の方に向けて訊いてみた。

「唯先輩なら『ポケットピカチュウ』とかいう小型ゲーム機で遊んでいますよ」

「……懐かしいなオイ」

突然だがここで説明しよう！

『ポケットピカチュウ』とは、十数年前に発売された、万歩計とゲームが複合化した小型ゲーム機の事である。詳細はみんな大好きグーグル先生に訊いてみよう！　つか、まだそんな年代物を持っていた奴がいたなんて。今時『たまごっち』の方がまだ通じるものがあるぞ。平沢家の謎が、また一つここに深まった瞬間でもあった。スリルとサスペンスの宝庫、平沢家の一族。

「そうなんだ。じゃあせっかく台所まで来てもらったんだし、棚から食器を出して準備してもらっていいかな？」

「オッケー。任せて」

憂ちゃんの指令を受けて、言われて通りに棚へと向かい食器を人数分取り出す梓。ふむ。手際が良い事から察するに、以前に何度か手伝った事があるのかもしれない。

「あ、梓ちゃん。後で冷蔵庫から生卵出してもらっていいかな？　お姉ちゃん、それが無いとすき焼き食べられないから」

「了解、生卵ね」

と笑顔で承諾する梓。その間にもテキパキと食器を取り出しては、近くのテーブルに並べている。何だかお母さんのお手伝いを喜んでる娘みたいな図だ。さしずめ、僕は孫といったところか。見当違いも甚だしい例えだった。

「にしても、さすが憂ちゃん。唯の好みをちゃんと知ってるんだな」「大好きなお姉ちゃんの事ですから」

そう頬を赤らめてはにかむ憂ちゃんは、まるで恋人の話をする女の子みたいなの顔をしていた。

やばい。超可愛い。

それはともかく、かなり筋金入りのシスコンだな、こりゃ。こんな良くできた妹さんに愛されて、唯は実に果報者である。

「それにもう何年も一緒に生活してますから。好きな音楽や服のセンスだって当然のように知ってますし」

「へえー」

「今日付けている下着から生理周期まで、お姉ちゃんの事は全て完

壁に把握済みです」

「へ、へえー」

いくら姉妹とは言え、そこまでいくとストーカーの流域じゃなかろうかと疑念を抱いたが、唐突に言い知れない恐怖に襲われて口には出せなかった。

何故だろう。今の憂ちゃんの笑顔を見ていると、天使の皮を被った悪魔にしか見えない……！

「ついでに言うと、お姉ちゃんが使っている生理用品はナプキンではなくタンポンです」

「いや何もそこまで暴露せんでも！」

唯にプライバシーという名の人権は存在しないのか！？ と憂ちゃんの恐るべきリサーチ能力に戦慄を覚えつつ、とっさに心の中でメモを取る僕がそこにいた。

こんな女装<sup>ナリ</sup>をしていても、僕もれっきとした男の子なんだなあ。しみじみ。

「で、今日の唯の下着は何色なのかね？」

「上下共に純白。ちなみに生理が近いので、既にタンポンを使用中です」

「ちょ！？　なんて事訊いてるんですか遙先輩！　憂もそこまで詳細に話さなくていいからッ！」

それまで黙って成り行きを見届けていた梓が、こらえ切れなくなったのか怒涛のツツコミを入れてきた。さすがは漑に次ぐツツコミキャラだけの事はある。実に将来有望だ。

「どうせなら梓も僕ら女子トークに混じろうぜ。手始めに、まず梓の好きな体位についてだが……」

「思いつきり中学生男子みたいなノリになってますが！？」

なんてふざけている間にも、作業は順調に進むのであった。ホンマかいな。



## 第16曲「女子トーク」(後書き)

憂ちゃんがヤンデレ化しますた。ま、原作でも似たようなもんですけどが。

ポケットピカチュウ。この単語を見て、10代読者様のどれだけの数が理解を示してくれた事だろう……orz

## 第17曲　すき焼き焼いても家焼くな

「お肉捕ったどお！」

「ちよつと唯先輩！　さつきからお肉ばかり取り過ぎですよ！　少しは自重してください！」

「梓ちゃん落ち着いて。お肉ならまだあるから」

「そうは言っても憂。さつきからずっと唯先輩や遥先輩にお肉ばかり取られて、私全然食べられてな——ってああ！　言ってるそばからそんな大量にお肉を取らないでくださいよ遥先輩ッ！」

「梓。人生の先輩として助言しておくが、欲しい物は全力で勝ち取りに行かないと手に入れないもんだよ。諦めたらそこで試合終了なんだぜ？」

「わ。安西先生だ懐かしい」

「お姉ちゃん、安西先生って誰の事なの？」

「いや、この際安西先生とかどうでもいいんですよ！　そもそも、唯先輩か遥先輩が私にお肉を譲ってくれたら済む話じゃないですかッ！」

「それは無理」

「明確な拒絶！」

## 第17曲　すき焼き焼いても家焼くな

「ふあ。もうお腹いっぱい」

すき焼きの残り香が漂う居間。もう殆ど煮汁しか残っていない鍋を前にして、唯は満足そうに腹を撫でて恍惚な表情を浮かべた。か

く言う僕も、唯に負けじとすき焼きを平らげたので、正直お腹が満腹で苦しかった。

僕も多少は手伝ったとは言え、憂ちゃんの味付けが絶妙だったからな。ついつい食べ過ぎてしまった。この分だと、明日の朝ご飯は入らないかもしれない。

「憂ちゃん、ご馳走さま。とても美味しかったよ」

「はい。お粗末様です」

「う。私はあまり食べられなかった……（お肉が）」

みんなすき焼きの余韻に浸る中で、一人不満げに愚痴を零す梓。未だ箸を舐めながら物欲しそうにすき焼きを見つめている様子からして、いくら物足りなかったようだ。

まあ僕と唯に早食い勝負を挑もうなどと、土台無茶な話だったのだ。アルファ・ステイグマ複写眼で肉の現在位置と量を解析し、直死の魔眼で邪魔な野菜を切り開き肉をもぎ取った僕達に、一切の死角は無かった。毎度お馴染み嘘だけど！

「え？ あんなに美味しかったお肉少ししか食べなかったの？」

「やったあ。信じらないわよね」

「唯先輩と遥先輩が、殆どのお肉を食べちゃったせいじゃないですかッ！」

バンツとテーブルを叩きつけて、柳眉を立てながら梓は憤怒する。「ちよつとぐらい私に食べさせてくれても良かったじゃないですか！ 何で片っ端からお肉を取っていくんですかッ！」

「あずにゃん。いついかなる時も、常に強者だけが勝利と栄光を勝ち取れるんだよ？」

「悲しいけれど、これって戦争なのよね」

「食卓内での生き残り競争！？」

そんなのあんまりですよ、と涙目で訴える梓。

「ごめんよあずにゃん。いつだってこの世は弱肉強食。弱者には非情なのだ。」

「はあ。これじゃあ夏の合宿も先が思いやられる……」

「ん？ 梓、合宿って何が？」

「夏休みに軽音部のみんなで海に行くんだよ。去年もムギちゃんの別荘を借りて合宿したんだ」

僕のふと漏らした疑問に、唯がニコニコ顔で代弁する。見るからに合宿が楽しみで仕方ないといった感じだ。

それにしても、合宿か。いかにも十代の青春って感じじゃないか。まあ合宿とか言ってるけど、本命は海で遊ぶ事なんだろうな、きつと。

「そうだ！ どうせなら遥先輩も一緒に行きませんか？ 遥先輩みたいな家事上手な人がいてくれたら、炊事係としてすごく心強いですし！」

「へ？ いや僕は別に構わないけど、でも部員でもない奴が勝手に行ってもいいもんなのか？ それに炊事係として行くなら、憂ちゃんの方が適任だと思うんだけど」

「あ、それ私も誘われたんですけど断ったんですよ。合宿のある日は、残念ながら委員会の仕事と重なってるので」

本当は私も行きたかったんですけど、と苦笑を浮かべる憂ちゃん。

「ふむ。じゃあそういう事なら、お言葉に甘えて行かせてもらうかな。どうせ暇だし」

「やったあ！」

承諾したと同時に、梓が心底嬉しそうに破顔して両手を上げた。まさか僕と一緒に付いて行くぐらいでこんなにも喜んでくれるなんて。よほど軽音部メンバーの料理スキルじゃ頼りないのだろうか（律のような料理上手な奴もいるのに）。

というか、さっきから憂ちゃんが僕と梓を見て微笑ましいものでも見るかのように視線を向けてくるのだが、一体何なんだろう？

何か知らないけど慈愛に満ち足りた目をしてるし。何と言うか、田舎の中学生カップルを見守るお母さんみたいだ。

ま、あれだ。別に気にするほどのものでもないか。

「やりましたね唯先輩！　これで合宿がより楽しくなり——って、寝てるう！？」

嬉々として唯に話しかけようとした梓だったが、生憎と当の本人は気持ち良さそうに寝息を立てながらその場で寝っ転がっていた。うーむ。さっきまで起きていたハズなのに、まるで気が付かなかった。一体いつの間に寝ていたんだろう。

「あゝ、ダメだよお姉ちゃん。こんな所で寝たら風邪引いちゃうよ」

「うみゅゝ、はるちゃゝん。そこはローラ姫を生け贄に捧げないと、エッチな下着を装備した竜王は仲間になってくれないんだよ。むにやむにや」

「え、なにその鬼畜ドラクエ」

世界の半分をくれてやると言われても、死んでも拝みたくないラスボスだった。一体どんな夢を見とんねん。

「お姉ちゃんってば起きてゝ。もう仕方ないなあ……」

しばらく唯を揺り起こそうとしていた憂ちゃんだったが、とうとう根負けして、そばにあったタオルケットを手にとって寝ている唯にそつと被せた。つくづく甲斐甲斐しい妹さんである。

「憂ってホント世話好きだよな。唯先輩みたいな手の掛かるお姉さん、一緒にいて大変じゃない？」

唯が寝ているのを良い事に、普段言えないような事を口にした梓に対して、

「そんな事ないよ。むしろ一緒にいて楽しいくらいだから」

と、これまた迷いの無い笑顔でそう答える憂ちゃん。

「それにお姉ちゃん、こう見えてしっかりしてる所もあつたんだよ？」

「“あつた”って、過去形になつてるじゃない……」

「あ、いや、それはそうなんだけど、でも昔はとても頼りがいがあつたんだよ？」

「頼りがい？　唯先輩が？」

と胡散臭さそうに唯を横目で見る梓に、「本当なんだよー」と憂ちゃんは苦笑混じりに言う。

「私が小さかった頃にね、神社に初詣に行った時の話なんだけど、その時にお父さん達とはぐれて迷子になっちゃった事があったの」  
過去の大切な思い出を反芻するように瞳を閉じて、憂ちゃんはポツリポツリと話を紡いでいく。

「お父さんもお母さんもお姉ちゃんもいなくて、周りは知らない人達で溢れてて、どうしようもなく心細くて——そんな時にね、お姉ちゃんが人混みをかき分けながら、独りで泣いていた私を見つけてくれたの。『憂、私の手を離しちゃダメだよ。また迷子になっちゃうからね』って、私の手をしっかりと握ってくれて」

言って、憂ちゃんは表情を綻ばせた。きつとその時唯に握られた側の手だったのだろう——雛鳥を扱うかのような繊細な手付きで、自身の右手をぎゅっと左手で包み込んで。

そんな憂ちゃんから一切視線を逸らさず、僕も梓も口を挟みもせず、ただ黙って憂ちゃんの話に耳を傾け続ける。

「お姉ちゃんの手は、大きくて力強く——とても温かった。まるで不安と心配で氷のように固まっていた私の心をゆっくり溶かしてくれたみたいに。その時にね、私決めたの。もし今後お姉ちゃんが困るような事があったら、今度は私が絶対助けてあげるんだって。どんな時もお姉ちゃんを支えられるように、ずっとそばにいるんだって」

そこで閉じていた瞼をゆっくり開き、思わず見とれるくらいの華やいだ笑顔で憂ちゃんは言った。

「だから、私はお姉ちゃんと一緒にいられるだけで満足。お姉ちゃんの為なら、どんな事でも頑張れるの」

「憂ちゃんは、本当に唯の事が好きなんだね」

「——はい！」

そう快活に返事をした憂ちゃんの顔は、嘘偽りの無い——幸せに満ち足りた魅力的な笑顔を浮かべていた。

見ているだけで、僕も幸せになれるかのように。

そんな錯覚を感じてしまうくらいに――。

「でも、今じゃあ迷子になるお姉ちゃんを、私が向かいに行く立場になってしまったんですけれどね」

「いや、そこでオチを付けないで」

何故そこで落語みたく話を閉めたのだ。

せつかく良い話だったのに、勿体ない。

まあ、でも。

憂ちゃんがどれだけ唯の事を慕っているかはよく分かったけれど。

ああ、そういえば。

僕が転校したばかりの頃。

唯と初めて言葉を交わしたあの時も。

憂ちゃんと似たような気持ちになった事があったつけ。

確かあの時も、屈託のない人懐っこい笑みを浮かべながら。

何の打算も下心も感じさせない、今と何も変わらないどこか世間ずれしてそんな天真爛漫な雰囲気纏って。

教室の隅で独りぼちでいた僕に、唯がゆっくりと手を差し伸べてくれて――。

「ふーん。そんな事があったんだ」

と、それまで静かに口を閉じていた梓が、見直したように横で未だ寝ている唯を見つめながら、ポツリと呟く。

「何か良いよね、そういうの。私一人っ子だから、ちょっと羨ましいかも」

「うん。すごく楽しいよー。そういえば遙さんもお姉さんとか弟妹はいないんですか？」

「え―――？」

憂ちゃんに不意に話しかけられ、そこで思考が中断する。

姉。お姉ちゃん。姉さん。

大嫌いだったあの人。

誰よりも横暴で、自己中心的で、自由奔放で、他人の迷惑なんてまるで考えない、ケンカ好きでトラブル好きの困った人で。

そして僕よりも嘔吐きで。

どんな時も僕を虐め、事ある事に嬉々として弄り続けて。

そして死ぬその最期の時まで僕を構い続けた、とんだ物好きのお人好し。

そんな姉さんを、僕は。僕は。僕は。

僕は……。――。

「あ、あの、遥さん？」

と、急に黙り込んだのを見て訝しく思ったのだろう――憂ちゃんが僕の顔を窺うように覗き込んできた。

「何だか血色が悪いというか、とても辛そうな顔をしていますけど、その、大丈夫ですか？」

「……………」

うん。

辛い。

辛いよ。

あの時の事を思い出すだけで、胸が張り裂けそうなほどすごく辛い。

心が締め付けられるように苦しい。

いっそ、自分の胸にナイフを突き立てて楽になってしまいたい。

でも、ダメなんだ。

僕は、一生苦痛を味わい続けなければならないのだから。

この程度の苦しみで、姉さんが僕を許すワケが無いのだけど。

許してくれるハズなんて無いのだけど。

「……………ッ」

どれだけ詫びようとも。

どれだけ償おうとも。

僕の罪は滅ばせない。

それが姉さんが僕に与えた、永遠の罰。

本当に、とんだ傑作。

徹頭徹尾、戯言だ――。

「遥、さん？」

「遥先輩……？」

憂ちゃんと梓が、とても心配した様子で僕に声を掛ける。

死にたくなるくらい、優しい瞳で僕を見つめて――。

「大丈夫。何でもないよ」

いらぬ心労を与えないよう、努めて笑みを作って、僕はいつもように嘘を吐いた。

上手く笑えたかどうかは、自信は無かった。

## 第17曲〰️すき焼き焼いても家焼くな〰️（後書き）

憂ちゃんが初詣で迷子になったという件ですが、これはアニメ「けいおん！」の特典映像にあったエピソードを使わせていただきました。

その特典には唯と憂ちゃんによるクリスマスの話やタイトルの話などがあったのですが、個人的には唯の優しさが伝わってくる初詣のエピソードの方が印象的だったりします。

第18曲、瞬間センチメンタル（前書き）

シリアス注意報発令。

遥がいつになく真面目です。

## 第18曲　瞬間センチメンタル

唯と初めて会ったのは、僕が新学期早々に桜が丘高校へと転校して間もない頃の事だった。

あの時の僕は、今ほど飄々した奴でも破天荒な奴でもなく、至って普通（とは言え、既にその頃から女装はしていたワケだから普通と言っにも変な表現だけど）に高校生活を過ごしていた。

そう、普通に。

他のクラスメート達のように集団で馴れ合うような事はせず。まして今時の女子高生みたく、誰かと恋やファッションの話で色めき立つ事もせず。

周りから、表情が乏しく口数の少ない地味な転校生という認知が広がる中で。

一人孤独に――何かしらの罰でも受けているかのように。それでも取り留めて思うところも無く――淡々と無為に日々を過ごしていた。

『はじめまして！ 私、平沢唯っていうんだ！』

そんな時だった。

何処も彼処もセピア色にしか瞳に写らない、色褪せた教室の中で虹を塗りたくるように。

それまでの虚ろで閉じられていた世界をぶっ壊すかのように。

平沢唯が、眩しいくらいはじけた笑顔で僕に話し掛けてきたのは――。

第18曲 瞬間センチメンタル

「憂、今日は本当にご馳走」

「僕もご馳走。長々と居座っちゃってごめんね」

陽もいつの間にか沈み、周囲もすっかり闇に染まった真夜中。僕と梓は食器などの洗い物を手伝った後、平沢家の玄関前で、憂ちゃんに今日のお礼も重ねて別れの挨拶を交わしていた。

補足しておく、梓はこのまま僕が家の近くまで送る事となっていたりする。最初は遠慮を入れられて断られたが、そこはゴリ押しで領かせた。僕も腐ってはいるとは言え（色んな意味で）一応は男の子の身だ。暗い夜道を女の子独りで帰らせるほど、人間をやめてはいない。

「いえ、こちらこそ後片付けまで手伝ってもらっちゃって……」

と、申し訳なさそうに頭を垂れる憂ちゃんに、「こっちが好きで手伝った事なんだから、気にする必要はないよ」と僕は明るく言葉を返す。

「それにあんな美味しいすき焼きを食べさせてもらったんだ。何か手伝わないと罰が当たるってもんだよ」

「そうだよ憂！ 唯先輩なんて食べてすぐ寝ちゃったぐらいなんだから！」

「お姉ちゃんはお姉ちゃんだから……」

と苦笑を浮かべて唯を弁護する憂ちゃん。訳すと、唯は特別だからと言ったところか。砂糖菓子くらい姉に甘い妹だった。

憂ちゃんは本当、唯にゾッコンLOVEだよなあ。

「それじゃあ、あまり長居するのも悪いから、僕達はこれで……」

「あ、あの遥さん！」

挨拶も早々にドアノブへと手を掛けようとした瞬間、憂ちゃんが慌てた様子で呼び止めてきた。ドアノブへと伸ばしかけていた手を

ピタツと止め、憂ちゃんの方へと首を向ける。

「ん？ 何？」

「あ……。えっと、あの、その……」

ぴくりと体を反応させて、憂ちゃんは何やら探るように僕を見や  
って言葉を濁す。しばらく何か言いたそうに指をもそもそ絡め合  
わせていたが、結局急に視線を伏せて押し黙ってしまった。

あー、まあ、うん。

何となく、言いたい事は想像できるんだけどもねえ。

思い返せば、僕に姉か弟妹がいないのかと尋ねた時から様子が変  
だったワケだし。

妙にキョドっていたというか。

僕への対応に、戸惑っていたというか。

あれからずっと、僕に対してそんなぎこちない態度を取っていた。

「……………」

ともかく、何はともあれ。

あの時、ちゃんと適当にあしらえなかった僕にも、一抹の原因は  
ある。

その結果、こうして憂ちゃんが気に病む形になってしまったのだ  
から。

「梓。ちょっと外で待っていてくれないか？」

「え？」

真意が汲み取れず、キョトンと小首を傾げる梓に『頼むよ』と今  
度はアイコンタクトで願い出る。

数秒ほどの間を置いて。いつになく真面目な顔をしていた為だろ  
うか——物珍しく僕の顔を凝視していたが梓だったが、

「はい。分かりました」

と、やがて素直に頷いて微笑を浮かべた。

「それじゃあ、門のそばで待ってますね」

こゆつくり、と一言添えた後、梓は静かに玄関を開ける。きつと  
敏感に場の空気を読んでくれた末での行動だったに違いない。そん

な梓の後ろ姿に、「悪いな」と声を掛ける。

梓はそんな詫びを入れる僕にニッコリ笑みで応えて、そのまま玄関のドアを閉じた。

「さて、と……」

梓を見送った後、僕は未だ困惑としている憂ちゃんに向き直る。

「これで少しは話しやすくなったかな？」

「え？」

「いや、さっきから妙に梓の方をチラチラ見てたから。あまりこの場にいてほしくない話をしたいんじゃないかなと思ってね」

「あ……」

そんなハツとした感じで、小さく声を零す憂ちゃん。僕の口から梓を追い出したような事をした為か、あるいはこれから話す事となるであろう内容に躊躇しているのか——何にせよどちらかの理由で言外に気まずそうにしているのを見て、

「まあ、僕を気付かっただの事なんだろうけどさ」

と、なるべく場を和らげるよう、軽い感じで憂ちゃんに声を掛ける。

「いえ、私の方こそ色々と気を使わせてしまっ……」

「そんなに気に病む必要は無いよ。僕が勝手にした事だし、それに……」

少しだけ間を開けて、僕は視線を横へと流してから言う。

「僕があんな微妙な態度を取ったせいもあるんだし。ごめんね？ 姉弟がいるかいらないくらいの事で暗い雰囲気作っちゃってさ」

「そんな！ むしろ私が不躰な質問をしたせいで——」

それ以上、憂ちゃんは何も言わなかった。けれど、何かを窺うように僕を見つめる。

きつと知りたいのだろう。

悪いとは思いつつも。

何故、僕があの時急に押し黙ってしまったのか。その理由を。

その真実を。

だからこそ、僕は梓を追い出すような真似をした。  
今から言う事は、極力誰にも知られたくない内容だったから。

「……………」

本音を明かせば、あまり過去の事は吹聴したくはない。  
まして、“あの事”は。

どんなに些末でどれだけ些細でどれだけ些事な内容だったとしてもだ。

それでも。

それでも、今は話しておかないといけない気がしたから。

だから、僕は――

「だいたい、想像は付いてるだろうけどさ……………」

憂ちゃんは伏せていた顔をそっと上げて僕を見つめる。

だけど僕は、そんな憂ちゃんを直視できずに。

今から吐き出す言葉から目を背けて、僕は言う。

今さら己の過去なんて否定出来ようもないのに、それなのに目を背けて。

僕は言う。

「いたんだ。僕にも姉さんが……………」

重苦しい沈黙が流れた。外から車が通り過ぎる音が聞こえる。玄関口に鈴虫でもいるのだろうか、風鈴にも似た音が僕の耳に届く。そばにコオロギもいるのか、すっかり夏の風物詩となった音色が玄関まで響いた。

どれくらいそのままだったのだろう。ややあって、

「そう……………ですか」

と、憂ちゃんは細々と呟いた。さほど驚いた表情はしていないから、やはり想像は付いていたのかもしれない。

その代わり、憂ちゃんはとても悲しそうに表情を曇らせていた。

それは、僕の姉が既にこの世にいないという事を悟った末での表情ではなく。

未だに姉の事を吹っ切れていない僕の様子を見て——胸を痛めているようだった。

「……………あは」

場を誤魔化す為か、それともそれは自分の気持ちに対してのものだったのか——何故か無意識に空笑いが漏れた。

……………まいったな。

そんな顔をさせる為に言ったワケじゃないのに。

まして、自分の事のように悲しむ憂ちゃんを見たかったからじゃないのに。

僕なんかの為に、悲しんでくれなくてもいいのに。

まったく。

ホントに、この姉妹は。

唯にしろ、憂ちゃんにしろ。

どうして僕の心を、こうも揺さぶってくれるのか——。

「……………僕もね、桜が丘高校に転校したばかりの頃、憂ちゃんみたいにね、唯に救われた事があるんだ」

唐突に口を開いた僕に、憂ちゃんが「え？」と目を丸くした。

言っている意味が分からないといった様子の憂ちゃんであったが、構わず僕は話を紡ぐ。

自分の過去を話すのを何よりも忌避していたはずだったこの僕が、喉から溢れ出てくる言葉の数々を吐き出すように——されど、胸の中に息づく温もりを感じながら、僕は語り続ける。

「あの頃は、ぶっちゃけ今ほど明るくはなくてさ。誰かに話し掛けられても一言二言返事をするだけのつまらない奴だったんだ。そんなんだったから、すぐに殆どのクラスメートが僕を敬遠するようになったんだ。まあ当然っちゃ当然だよな」

そりゃそうだ。ほんの少しばかりの好奇心と、まだ転校してきたばかりで色々大変だろうと気遣って話してくれたであろう皆に、

僕は悉く適当な相槌だけで済まして、ろくに会話をしようとしなかったのだから。逆にそれで好意を抱かれる方が不思議なくらいだ。

実を明かせば、女子高という全く未知なる魔境の中、クラスメイトとの距離を掴みあぐねていただけの事だったのだが。なので、話し掛けられても単にどう反応すれば分からなかったのだ。まあ僕自身、さして気にもせずに放置していた事が一番の原因だったのだろうけど。

誰かと対立する気もなかったけど。

誰かと馴れ合う気もさらさら無かった。

いつか大切な人を失うくらいなら、このまま独りでもいいと。

別にずっと孤独でも構わないと、そんな風にすら思い始めていた。でも、そんな時に――

今まで風邪を引いていて、二・三日学校を休んでいた唯が、ふつと僕の前に現れたのだった。

## 第19曲く儚くも永久のカナシ

平沢唯。

今まで風邪で休んでいて、結局この時になるまで顔を会わせる事のなかったクラスメート。

そんな彼女が、僕の前に立っていきなり自己紹介を始めた。

正直、僕は初対面にも関わらず、まるで気後れしていない唯の満面の笑顔に、ただ啞然とするしかなかった。

だから僕は、それから少し遅れて、おずおずと唯に見習うように自己紹介したのだった。

『えっと……音無遥、です』

『うん！ よろしくね、はるちゃん！』

『……よろしく。ところで、“はるちゃん”って何？』

『遥ちゃんだから“はるちゃん”！ 可愛い渾名でしょ？』

『可愛い……かな？』

『可愛いくなかった？ んーじゃあ、音無ちゃんだから“おっちゃん”てのどうかな！？』

『その発想はなかった』

それが彼女——平沢唯との初めての接触だった。ファーストコンタクト

無論“おっちゃん”だなんて加齢臭漂う渾名、その後すぐに断つたけれど。

## 第19曲く儚くも永久のカナシ

「それから唯は、誰もが僕を遠ざける中、そんな雰囲気をまるで気にせずに笑顔で話し掛けてくるようになったんだ……」

唯との思い出を一つ一つ反芻しながら、僕は憂ちゃんに語り続ける。

自然と頬が緩むのを自覚しながら――。

『はるちゃん。一緒に音楽室に行こっつ』

『……良いけど、友達と一緒に رفت方がいんじゃないの?』

『うん。だからはるちゃんを誘ってるんだよ?』

『……………』

『あれ? はるちゃん、顔赤いよー?』

『な、何でもない……!』

『はるちゃん聞いて聞いて〜! さっきね、学校まで行く道のりですぐ変わった猫を見つけたんだ〜!』

『ふーん』

『鳴き声がね、「ニャーニャー」じゃなくて「ひろしひろし」だったの〜!』

『“猫ひろし”だろそれは』

『はるちゃん。今さっきね、廊下でイズマツシュ・サイガ12が落ちてたから拾ってきちゃった〜!』

『それ以前に、どうして日本の高校にショットガンが落ちているのかと。そして何でお前は正式名称を答えられるほど銃器に詳しいのかと』

『これ、どうしたらいいのかな〜? やっぱり持ち主に届けた方がいいのかな〜?』

『職員室に持って行ったらどう? 見た目は精巧に出来てるけど、

どうせ玩具だろうし』

『でもこれ、グリップに「スネーク」って書かれたラベルが貼ってあるよー?』

『……それなんてメタルギア?』

『はるちゃん。あのね、今度は「デスノート」ってタイトルの黒い本を廊下で拾っちゃった!』

『だからどうしてそんな非現実的な物を、さも当然のように拾ってくるのかと』

『それでね、この本触ってから変なのが見えるようになったちゃって』

『……まさか、リユークみたいな死神が見えるだなんて言わないよな?』

『ううん。でもテリー伊藤に似たおじさんがね、「君にウォーキングエクササイズを教えてあげよう」って、さっきから笑顔で囁いてくるの』

『デューク更家!?』

『はるちゃん。今度はね』

『今度は何だ? 約束された勝利の剣エクスカリバーでも拾ってきたか? それとも「僕と契約して魔法少女になってよ!」と営業する鬼畜系生物とも遭遇したのか?』

『ううん。今度はね、クマさんのイラストがプリントアウトされたパンツを廊下で拾ってきたんだけど……』

『詳しく話を聞こうじゃないか(キリッ)』

『はるちゃんがいつになく喰い付いてきた!?』

『はるちゃん。英語の小テスト何点だった?』

『フフフ。聞いて驚け見て喚け——なんと! 十点満点で百点だったのだ!』

『いやその理屈はおかしいよ』

『それはともかく、唯の方は何点だったんだ？』

『私はね、ほら見て。十点満点で笑点だったよ！』

『いやその理屈の方がよっぽどおかしい』

『はるちゃん。一緒にご飯食べよう！』

『いいよ。ゲヘヘ、まさかオカズの方から来てくれるとは思わなかったぜ。今日はこれでイける！（性的な意味で）』

『……はるちゃん、例え冗談でもその反応はちよつと気持ち悪いよ？』

『なんだと！？ もつと罵ってくれッ！』

『え？ じゃあ——はるちゃんの変態！ 繁殖期！ 歩く色欲魔！』

『こ う か は ば つ ぐ ん だ ！』

『昇天！？ はるちゃんがついに壊れちゃった！！』

「……そんな感じで、いつの間にか軽口も叩けるくらい、僕達は仲良くなつていったんだ。それから僕の方からも唯に話し掛けるようになって、それで——」

と、そこまで思い出を語ったところで、僕はふと思立ってピタツと口を閉じた。

ん？

あれ？

あれあれあれ？

おかしいな。曲がりなりにも今は完全にシリアスな雰囲気だったはず。それがどうだ？ 唯との思い出話を語ったばかりに、すっかりシリアスな雰囲気が台無しになつてるじゃまいか！！

あれか。唯との思い出がギャグ過ぎて、うまく感傷に浸れないせいなのか。仮にも今までシリアスな話には実際に曲名として使われ

ているタイトルを各話のサブタイトルに使っていたのに。今回だつて『儚くも永久のカナシ』とそれっぽい曲名を起用したのに。それなのに何がどうしてこうなった!?

「……ふふ。クスクスクス」  
と。

メタ的なんだか自虐的なんだかワケの分からない思考に溺れていたその時、それまで黙って僕の話に耳を傾けていた憂ちゃんが不意に笑い声を零した。

「……あのー、憂ちゃん?」

「あはっ。ごめんなさい。遙さんの話を聞いてたら我慢が出来なくなつて……」

と、未だに口元を抑えて笑いを堪える憂ちゃん。よほど唯と僕とのやり取りがツボに入つたらしい。

しかし我ながら、唯とは不条理ギャグ漫画みたいな会話しかしらんな。いいのだろうか、このままで(今後の方向性も含めての意味で)。

「……ん。もう大丈夫です。すみません。途中で話の腰を折っちゃつて」

「いや。別に構わないよ」

もとより、さっきまでの重苦しかった空気を払拭したくて、唯との馴れ初め話を持ち出しただけだし。別にウケを狙つたワケではなかったのだが、まあ結果オーライってヤツだ。

「そうなんですよね。お姉ちゃんって、いつでもどこでも変わらないでいてくれるんですよ……」

と、きつと唯の顔でも思い浮かべているのだろう——実にほんわかとした微笑を浮かべて、憂ちゃんと言う。

「落ち込んでいる時も不安で仕方がなかった時も——お姉ちゃんはいつだって『大丈夫だよー。きつと何とかなるよー』って、いつもと変わらないあの笑顔で、ただずつとそばにいてくれるんですよ」  
「……………」

唯の笑顔。

見ているだけで何故か心が安らぐ、彼女の笑顔。いつでもどこでも変わらないでいてくれる、そんな明るい彼女。

「嬉しい時は自分以上にはしゃいでくれて、悲しい時は一緒に気持ちを共有してくれて。だから私は——」

そこで、スツと目線を上げて、憂ちゃんは僕を見つめた。

一切の揺らぎも曇りも無い澄んだ瞳で——初めて唯と出逢った時のような眩しい笑顔で、憂ちゃんは言った。

「そんなお姉ちゃんだからこそ私は——お姉ちゃんの事がすごく大好きなんだって、胸を張って言えるんです」

「——……」

そう、なんだよな——。

いつだって唯は、こんな僕に笑顔で接してくれた。

最初はそんな唯に少しだけ鬱陶しく思っていたハズの僕も、気が付いた時には彼女に気を許すようになっていて。

それはまるで。

あんなに大嫌いだったハズの、かつての姉さんの時のように——。

「いつか、ね」

無意識下に、勝手に口が開いていた。

頭の中はまるで空白なのに——まるで何かに憑かれたかのように、僕は喋る。

「いつかね、唯に訊ねた事があるんだ。『どうして僕なんかと仲良くしてくれるんだ？』って……」

そしたら唯は。

どうしてそんな事を訊く必要があるのだろうと言った風に首を傾げて。

常識を語るかの如く、彼女はこう言っただけ。

『どうしてって……。はるちゃんと一緒にいるとすごく楽しいからだよ〜？』

それだけ、だった。

それだけの単純な理由で、彼女は一人孤独でいた僕に接してくれた。

まるで姉さんの時みたく。

姉さんの時とは、少し違うベクトルだったけど。

その時だけ、唯と姉さんの姿が重なったように見えた。

それがほんの少しだけ嬉しくて。

何より、とても切なかった。

唯のあの言葉のおかげで、僕が桜が丘高校へと転入した本来の目的を、思い出させてくれたから——。

「そうだったんですか」

僕の言葉を聞き終えて、憂ちゃんはその時の場面を想像したのか、可笑しそうに目尻を下げて言う。

「何だか、すぐくお姉ちゃんらしいと言うか、聞くだけでこそばゆい気持ちになっちゃう言葉ですよね」

「そう、だね……」

それはきつと、計算で言ったのではなく、唯の事だから思った事をそのまま恥ずかしげも無く言ったのだと思う。

僕の事を、本当に大切な友達なのだと思ってくれているから——。

「……………」

大切な友達。

いつしか、僕にも大切な友達と呼べる存在がたくさん出来てしまっていた。

唯をきっかけに、漣と律に梓——それと偶然ではあったけれど、ムギとも再会を果たして——。

「……………」

もしも。

もしも、今の僕を姉さんが見たら、どう思うのだろう。

恨むだろうか。

妬むだろうか。

蔑むだろうか。

それとも。

それとも——……………？

「それこそ戯言、だよな」

そう。所詮は戯言。

こうして無様に生き延びてしまった、僕という矮小な存在も含めて。

全てが、戯言なんだ……。

## 第19曲〱儂くも永久のカナシ〱（後書き）

最初と最後の落差がひどすぎる件について。ククク、これも我が輩の奥底に眠る荒ぶる芸人魂が復活の雄叫びを上げ（ry

どうでもいいような事で割と重要な事なのではありますが、遥が言っていた通り、シリアスな話には実際に曲名として使われているタイトルをサブタイにしていたりします。うん。やっぱどうでもいいかもしれん……orz

次回は、またギャグ無しのシリアス回になる予定ですよー。

## 第20曲『星に願いを』(前書き)

続・シリアス注意報。

あと、途中で憂ちゃん視点に代わります。

## 第20曲　星に願いを

「——それで純<sup>じゅん</sup>たら、私が最後まで残していたリンゴを勝手に食べちゃったんですよ。せつかく楽しみに取って置いてたのにッ」  
「あはは」

真夏の夜の下、昼と比べると幾ら涼しい風が僕達の頬を撫でる。

汗ばんだ体に微風が吹き込み、仄かに気持ちいい。

街灯の明かりが少し眩しく感じるほどに暗くなつた夜道を、雑談しながら僕と梓は二人並んで歩く。無論、目的地は梓の家だ。ここで黄金卿を目指そうなどと言おうものなら、「うーうーうーっ」と梓が抗議の声を上げるに違いないので言うつもりは毛頭無い。一体何の話だ。

殆ど家で室内灯が点いている静かな住宅街で、時間帯的に場違いなセミの鳴き声が響いてきた。あなた、ただでさえ暑苦しいんだからさっさとお帰りよ、と酔っ払いを追い払う酒場のママさんの感想を抱きつつ、梓と言葉を交わし合う。

基本的には、梓の身の上話を僕が相槌を返し、時に話を膨らませる程度で会話は進んでいる。僕としても饒舌に喋る気分にはなれなかったので、逆に有り難かった。

きつと気を使われているのだと思う。

いつも違う僕の様子を見て。

それを裏付けるように、帰り際、僕と憂ちゃんが玄関先で何を話していたのかといった事には、一切触れてこなかった。梓なりに触れるべきではない話だと配慮しての事だろう。あれこれ詮索してこない事に感謝しつつ、変に気を使わせて申し訳ない気持ちにもなつた。うーむ。

こういう時こそ道化芝居を演じるべきなのに、場を誤魔化す戯言すら思い付かない。それこそ戯言だ。姉さんが今の僕を見たら、き

つと鼻でせせら笑って皮肉の言葉でも囁くに違いない。

姉さん。

姉さん、か。

結局、憂ちゃんまでにもいらぬ心配を掛けてしまった。

最後の最後で、言い訳みたいな戯言をほざいて。

どうしてこうも、うまく立ち回れないのか。

ホント、僕って奴はつくづく――

「わー。綺麗な星ー」

梓が不意に呟いた。その言葉に、さっきまでの思考を払い、梓を真似て夜空を見上げた。

無数に散らばる光の粒子。一つは淡く輝いて、もう一つは肉眼でもはっきり視認できるくらい発光して。どこもかしこも黒しくない空に、白の絵の具が付いた筆を無作為に振り回したような満点の星が広がっていた。

「今日はいつもより空気が澄んでるせいか、星がよく見えますね。今にも手が届きそう」

「そう、だね……」

星を見上げながら嬉しそうに言う梓に、僕はぼんやりと頷く。

何かの本で知った知識ではあるが、今僕らが見ている星は、数千年前に燃え尽きたモノが、今になって届いた光なのだそうだ。つまり、幼い頃にそこにはあると思っていた星は、既に消滅してしまっているのだ。

それでも尚、星は瞬き続ける。己の存在を世界に知らしめるように。

「……………」

何となく、空に向かって手を伸ばしてみた。

星を掴むように。

そこには既に無い星を――その光だけでも、この手で掴むように。指の隙間から覗ける星の海を見つながら、ふと思う。

今頃、憂ちゃんも同じ星空を眺めているのだろうか――。

「はあ……」

遙さん達が帰った後、私は元いたリビングへと戻っていた。そばには、まだお姉ちゃんが気持ち良さそうに寝息を立てて眠っている。

「はあ……」

テーブルに肘を付いて、再度溜め息を吐く。さっきからずっとこんな調子で、あの時の――別れ際の遙さんの表情ばかり頭をよぎる。

『ごめんね。また辛気くさい話をしちゃって』

それまで、お姉ちゃんとの思い出を楽しそうに話していたのに、何かボソボソと独り言を呟いた後、遙さんはまた表情を影らして言った。

『僕は憂ちゃんみたいに姉さんを大切に出来なかったから、仲の良い二人を見てちよつと感傷に浸っちゃっただけなんだ。だから気にしないで』

今日はホントにご馳走様。唯にもよろしく伝えといて。

そう苦笑を浮かべて去ろうとした遙さんの顔は、何だかとても切なげで、今にも消えてしまいそうなくらい儚げだった。

急な変化に戸惑っている私を見て、きつと重い空気を振り払おうとしての事だと思う。でもその苦しそうな笑顔が、私の脳裏に焼き付いてしまった。

振り返ってみると、遙さんは私達と楽しそうに笑い合いながらも時折寂しそうな表情を浮かべていたような気がする。その時は分からなかったけれど、きつと話に出ていたお姉さんの事に想いを馳せていたんじゃないのかと思う。

「昔、何かあったのかな……」

訊ねれば教えてくれたかもしれない。でも簡単に踏み込んだんじゃない何かが、遙さんの奥底にあるような気がした。

私が考えているより、ずっとずっと重い何かを……。

「ふみ」

「あ。お姉ちゃん起きたの？」

私が掛けたタオルケットをどけて、お姉ちゃんがまだ眠そうな眼を擦りながら、のっそりと起き上がった。目線をキョロキョロさせて、「あれ？ あずにゃんとはるちゃんは？」と私に訊ねる。

「梓ちゃん達ならとくに帰っちゃったよ。もう夜だし」

「あ、ホントだ。真っ暗だ」

カーテンの隙間から覗く夜空を見て、お姉ちゃんが吐息混じりに呟く。今更だけど、変な時間にお昼寝（というより夕寝？）して、ちゃんと夜眠れるのかな？ 何時間も寝ていられるお姉ちゃんなら別に大丈夫かも。

「わ。今日は星が綺麗に見えるね」

すっかり目が冴えたのか、寝起きとは思えないくらいの俊敏な動きで窓に近寄り、カーテンを開けるお姉ちゃん。そこには、お姉ちゃんが言った通り、綺麗な星空が広がっていた。

「きつといつもより涼しくて、空気が澄んでるからだよ」

お姉ちゃんの隣りに立って、私も星を見ながら言う。

「前にテレビで観た事あるんだけど、今私達が見ている星って、もう何千年か前に無くなっちゃった時の光なんだよね？」

「うん。そうだよ」

天文学的な詳しい事まではよく知らないけれど、その認識で問題はないと思う。私も少し前に何かの本で読んだだけのうる覚えの知識だけ。

「何千年か前に無くなった星の光、か……」

キラキラと輝く星を見つめながら、私はボソツと囁くように呟く。そう思うと、どうしてか物悲しい気分になった。

そこにちゃんと存在していたハズのに、今となっては光としてし

か私達に伝えられない。今こうして眺めている星も、いつかは見えなくなっちゃうかもしれないんだ。そう思うと、どうしても胸を締め付けられる。あまりにも儚過ぎて、脆過ぎて――どうしようもなく切なくなってしまった。

「でも素敵だよ。何千年も前の時の光が、こうして私達の所に届くなんて。ちょっと感動的かも」

うつとりと星を眺めて漏らしたお姉ちゃんの言葉に、「え？」と私は疑問符を零した。

「だって私達のご先祖様の時に無くなったかもしれない星が、こうして光になって空で輝いてるんだよ。ひよっとしたら、こうして私達が見ている星も、ご先祖様も同じように見ていたかもしれないじゃん。それってすごいって思わない？ 私達とご先祖様達が、あそこにあるいっぱい星と繋がってるんだよ。それって、とても素敵な事だって思うんだ」

そう嬉しそうにはしゃぐお姉ちゃんを見て、私はもう一度星空を見上げた。

そっか。

小さな光としてしか存在できなかったこの星も。  
ご先祖様の時に無くなったかもしれないあの星も、もしかしたらずっとずっと昔にいた人も眺めていたかもしれないこの星も。

こうして、時間も場所も超えて、私達の所へと繋がっていつてるんだ……。

「うん。そうだね」

もう悲しい気分にはならなかった。代わりにホッコリとした温かい何かが、私の心を優しく包んだ。

「私も、すごく素敵な事だと思うよ。お姉ちゃん」

「うん！ だよーね！」

お姉ちゃんは私の言葉を聞いて、ちっちゃな子供みたいに破顔一

笑した。

ホント、子供の頃から変わらない。

こんなお姉ちゃんだからこそ、私は――。

「お姉ちゃんはさ、遙さんの事、好き？」

不意に投げた私の言葉に、「ん？」とちよつとキョトンとした後、お姉ちゃんは笑顔でキツパリ言った。

「好きだよ。だってすごく大切な友達だもん！」

「そっか……」

変わらない。幼い頃、迷子になった私に手を差し述べた頃と、何一つ変わらない。

だからこそ私は、お姉ちゃんの事が大好きなんだ。

「もちろん憂の事も好きだよ。むにむに」

「えへへ。ありがとう。私も好きだよ」

ガバツと頬を擦り寄せてきたお姉ちゃんを、私は甘んじて抱きとめる。この時期だと暑苦しいハズなのに、その温かさが逆に心地良い。

「今頃、遙さん達も同じ星空を見ているのかなー？」

「きつと見てるよ。こんなに綺麗な星空だもん」

「そうだと良いねー」

お姉ちゃんと寄り添い合いながら、私はどこまでも広がる幾億の星の海を見つめる。

今ここにある星の光は、過去にも未来にも――どんな世界にも繋がっている。

もしも私達の気持ちも繋がっていて、それが大切な人達に伝わってくれるのなら。

私は、こう星に願いたいと思う。

どうか私とお姉ちゃんの――みんなの大好きという想いが、遙さんの寂しい気持ちを少しでも和らげてくれますように……。

第20曲 星に願いを

第21曲　僕と漫しゃんの700日戦争（前書き）

コメディーよ！　私は帰ってきた！

## 第21曲 僕と澪しゃんの700日戦争

とある休日。何をトチ狂ったのか、太陽熱を吸収してくれと言わんばかりの真つ黒なゴスロリ服を着用し、昼食を購入すべくコンビニへと赴いてみると、Tシャツにホットパンツという如何にもラフな格好をした澪が雑誌コーナーでファッション誌のような物を立ち読みしていた。

ふむ。これも何かの縁。このまま通り過ぎたら友達の名が廃るというものだ。ここはちゃんと挨拶せねばなるまいて。

そう決断して、足音もろとも気配を殺し、そつと澪の背後に近寄る。

しめしめ。雑誌に集中しているせいか、まるで僕の存在に気が付いてない。何の雑誌を読んでいるのか気になるところだが、まあこの際それは置いておこう。

悪魔が我に囁く。これは澪に悪戯を仕掛けられる、千載一遇のチャンスだと……！

ホホホ。澪しゃんよ、この僕に背後を取らせてしまった事を存分に後悔させてくれようぞ……！！

邪念が命じるまま、獲物を狩る獅子の如く両手を突き出し、そして――

「澪しゃんやんやんッ！！（もみもみもみッ）」

「ぎにやああああアアアアア……？」

思いつきり澪しゃんの胸を揉みまくった。

## 第21曲 僕と澪しゃんの700日戦争

「何なんだこの豊満な乳は！　けしからん！　実にけしからん！！  
よし写メを撮ろう！！」

「いやアアア！　やめろオオオ！　今すぐその手を離せエエエ！」

「サーイエツサー！　了解であります！（カチヤン）」

「ひいあア！？　誰がブラのホックを外せと言ったアアア！！」

アクシデント発生（故意）の為、しばらくお待ちください

「まったくお前って奴は！　どうしてそう変態的な行動ばかりしやがるんだ！」

顔を真っ赤にしてコンビ二備え付けのトイレに駆け込んだ後、ブラを直してきた澪が、憤怒の表情を浮かべながらいきなり大喝してきた。もう姿形が怒りのあまり鬼と化してしまっている。ぶつちやけ、めっさ怖い。

だが、それが良い！

「普通に挨拶しろよ普通に！　お前には常識というものが無いのか！？」

「そんなもん、生まれた時に母親の胎内へと置いてきたわ！」

「じゃあ今すぐ胎児からやり直して、常識を取りに行つてこい！！」  
無茶で苦茶な事を言いおつてきた。無理ゲーにも程がある。

「それと、何だそのゴスロリ服は？　アレか？　私にツッコミを入れるという、あからさまな意思表示なのか？」

「え？　ツツコンで、挿入してくれるの……？」

「誤解を招くような表現すんなア！」

スパーンっ！

と、どこからともなく取り出されたハリセンで、思いつきり頭を叩かれた。フルパニの千鳥<sup>ちどり</sup>かなめくらい芸達者なツツコミ方だった。うむむ。澪さんの奴、日に日にツツコミスキルが磨かれていつてるぜい。もう僕は、君のツツコミ無しでは生きていけない体にな

「つちやったでござるよ！」

「このバカ遙！ 少しは人目を気にしろよな。見ろ、さっきの騒ぎですっかり周りから注目されてしまったじゃないか」

言って、めちやくちや恥ずかしそうに顔を赤らめながら、周囲に視線を巡らす漑。その仕草がまた何とも可愛らしい。

「黙れとまでは言わないが、場をわきまえた言動をしろよな。KYにもほどがある過ぎるぞ」

「KYってなんじゃらほい？」

「は！？ そんな事も知らないのか！？ いいか、KYというのはな——」

「Kill you《お前を殺す》の略語？」

「そんな物騒な意味合いじゃねえよ！ あのな、KYっていうのはな——」

「空気読めないの略語でしょ？ それくらい僕でも知ってるよ」

「——ッ！！ お・ま・え・なッ」

ピクピクと眉間を動かし、眼を血走らせて凄んでくる漑ちゃん。あらやダ怖い。

やがて我を取り戻したのか、「ふっ」と一呼吸置いた後、「一応、これは興味本位で訊いてみるが……」と続ける。

「KYがアレなら、GWだとう略すんだ？」  
ゴールデンウィーク

「ガンダムウィング」

「モビルスーツかよ。じゃあATMは？」

「アホな父ちゃんもついiraへん」

「島田紳助かよ」

古いCMネタにも正確にツツコンでくれる漑ちゃんであった。ゾクゾクするねえ。

さて。お遊びはここまでにして、そろそろ本題に入るとしますかね。正直、今までのやり取りが名残惜しくもあるが。

「ところで、漑なんとかさん」

「私をとある暴食シスターみたく呼ぶな。だいたい漑だけで十分じ

やないか」

「失礼。噛みました」

「嘔吐け。噛む所なんてどこにも無かったろうが」

「噛みまひた」

「絶対わざとだろそれ！」

「ガンタダいた？」

「いねえよ！ 少なくともドラクエに出てくるような覆面モンスターなんて、未だかつて現実に見た事すらねえよ！！」

「阿良々木君も太鼓判を押せざるを得ない素晴らしいツツコミ、本当にありがとうございます！」

「くだらん前置きはいいから、さっさと本題を切り出せ！」

「あ。そうだったそうだった。あのさ、僕が声を掛けるまで一体何の雑誌を読んだの？」

「ああ、これの事か？」

言って、一度は棚に戻した雑誌を再び手に掛けて、僕に表紙を掲げて見せる。

「ファッション誌だよ。何となく気になってな」

そこには、まさに今時といった容姿をした同年代ほどの少女が、にこやかな笑みを浮かべて表紙を飾っていた。よく見ると、『今年の夏はこの水着で決まり！ これで気になる男の子を落としちゃおう』という見出しが書かれている。

そういえば、軽音部は夏の合宿で海に行くんだっただけ。確か前に僕も梓に誘われていた事をすっかり失念していた。おそらくは漣もこの特集に目がいつて、何気なくこの雑誌を手にとったのだろう。漣も女の子だね。

が、そこで簡単に頷いてはつまらない。ここは変化球の利いた返答をせねば！（キリッ）

「なるほど。漫画版『迷い猫オーバーラン！』第2巻79ページを見てムラムラしていたわけですね、分かります」

「誰も希のぞみの入浴シーンだなんて見てねえよッ！」

「いや、しつかり見てんじやん！」

しかも巻数とページ数だけで、その時の場面まで言い当ておった！  
漣しゃん、恐ろしい子……！

「さっきファッション誌を読んでいたって言ったばかりだろうが！  
人の話をちゃんと聞けや！」

「痛い痛い！ 漣しゃん、耳引つ張らないでッ」  
「やかましい！」

恫喝と共に、これ以上なく引つ張られる僕の両耳。そりゃあもう  
輪ゴムの如くビヨーンと。まさか僕の耳にここまでの伸縮性があつ  
たとは思わなんだ。つかマジで痛い痛い！

「一体どんな耳をしてんだよお前は！ 何かの間違いで背中に耳が  
付いてるんじゃないのか！？」

「残念。正解は足の裏です」

「ニコちゃん大魔王かお前は！」

マニアックなネタにまでツッコミを入れてくれる漣しゃん。拍手  
喝采を送りたいほどの完全度だった。

あらやだ何この気持ち。漣しゃんにツッコまれる度に、胸の奥が  
ドクドクと熱い鼓動を脈打つ。体中が火照る。もう漣しゃんの顔か  
ら視線が離せない。離せられない！

「ひよつとして、これが恋なの……？」

「ひい！？ 急に熱っぽい視線を送るなッ！」

気持ち悪い！ と一蹴し、僕のそばから素早く離れる漣。ぐへへ、  
その嫌がる顔がまた何ともたまらないぜ！

決めた。告白しよう。この溢れ出る漣への想いをぶつけずにはい  
られない。今この時、漣にプロポーズせずして何をする！

「漣しゃアアん！ 一万年と二千年前から愛してました！ 僕と結  
婚してくださいさアアいッ！」

「ぎゃあああ！？ く、来んなアアア！」

漣へとダイブした瞬間、賞賛を送りたくなるほどの実に見事な反  
射神経でかわされてしまった。そのまま僕のダイブは愛の告白と共

に空振りし、床をズベベと無様に滑り落ちる。おのれ小癪な真似を！

「貴様あ！ 我的愛を避けるとは何事か！ 恥を知れ恥をッ！」

「お前が言っな！ それにあれの一体どこに愛が詰まっただんだよ！ もっとマシな告白はでいいのか！」

「あなたと合体したい！」

「考えうる限り最低な告白だな！」

もう付き合ってられん！ と言うやいなや、いきなり漣は踵を返して猛然とダッシュし始めた。おのれ逃げるつもりだなッ！？

「逃がすかアアア！」

「ひい！？ 付いて来んなアアア！」

自動ドアを抜け、周囲の好奇の目に晒されながらも、童心に返ったように鬼ごっこを始める僕達。まあ普通の鬼ごっここと違って、僕に捕まったら筆舌に出来ない程のセクハラが待っているのだがね！ 脱兎の如く逃げる漣を捕まえるべく、全力で追いかけている最中、ふとある事に気付いた。

「あ。昼食買っの、すっかり忘れてた……」

第21曲『僕と滯しやんの700日戦争』（後書き）

みんな！ 今すぐ前話と今回の話を読み比べるんだ！

信じられるかい？ この主人公、同一人物なんだぜ……orz

## 第22曲 和がこんなに鬼強いわけがない (前書き)

そついや、まだ和を出してなかったな、とふと思い立ったので、急遽予定を変更して和を登場させてみました。ハッスルし過ぎて少し文字数が多くなってしまったぜい。

キャラ崩壊に注意おば (特に和が)。

## 第22曲　和がこんなに鬼強いわけがない

「わあ。和のお弁当<sup>のぶち</sup>って、いつ見ても美味しそう」

「そう？　前にも言った事あるけど、あり合わせの物を適当に詰めているだけよ？」

「それでも十分だよ。私なんて、いつもお母さんに作ってもらってばかりだし……」

「あら、良いお母さんじゃない。私は両親が共働きでなかなか家にいないから、正直澪が羨ましいわ」

「よせやいバツキャロー。照れるじゃねえか」

「いや、なんでお前が答えてんだよ遙アアアアア！」

## 第22曲　和がこんなに鬼強いわけがない

「ていうか、いつの間に私の背後にいたんだよお前は！　普通に声掛けろよ！　いきなり現れてびっくりするだろうがッ！」

「ちゃんと声掛けたよ？　『紫の鏡紫の鏡紫の鏡』って小声で何度も」

「私を呪ってどうする！？」

「久しぶりね、遙」と。

憤慨する澪に首根っこを掴まれて暴れる僕達に、和が全く意に介していないさそうな微笑を浮かべて声を掛けてきた。

真鍋<sup>まなべ</sup>和。

少し茶髪がかったショートヘア。いつもと同じ赤いフレームの眼

鏡。いかにも知的な雰囲気が見える顔造形。そのインテリ系の印象を裏切らず成績優秀で品行方正、かつ容姿端麗。その為、クラスメイトや教師からの信頼も厚く、生徒会役員も担っていたりする。また唯の幼なじみでもあり、唯本人にしてみれば、頼れる姉的存在に位置している少女でもある。

そんな彼女が、

「ホント、あなた達は相変わらずね」

と、微妙に呆れた視線（主に僕に対して）を送ってそう曰<sup>のたま</sup>ってきた。何だかもう見飽きたと言わんばかりの口調である。芸人魂の集合体と言っても過言でもない僕としては心外なので、ここで変化の効いた言葉を返したい。

「やあ、和たん。セカンドインパクト以来だね」

「人類保管計画以来じゃなかったかしら？」

予想外のボケ返しだった。ノリ良いなあ。

「そんな事より、何しに来たんだよ遥。今はお昼の時間だろ。さつさと自分のクラスに戻ってお弁当でも食べてろよ」

見るからに鬱陶しそうに半眼で僕を見やる遥に、「いやいや。そういうワケにもいかんのよ」と緩やかに首を横に振って返答する。

「何でだよ。帰れない事情でもあるのか？」

「うん。ちょっと唯とケンカしちゃってさ……」

僕の微妙に暗い表情を見て、「え？」と遥も動揺を露わに疑問符を上げる。

「め、珍しいな。お前達がケンカするなんて。一体何が原因でそうなったんだ？」

「うん。実は……」

ごくろり、生唾を呑み混む音が聞こえてきた。見ると、遥が珍しく心配そうに僕を見つめて次の言葉を待っている。和はと言うと、こちらも箸の動きを止めて、ジッと真剣な目で僕を直視していた。

そんな彼女らの視線を浴びつつ、緊張した面持ちを自覚的に持続させながら、僕はようやく口を開く。

「実は唯と——……という下りはぶつちやけ嘘で、零達のお弁当をかつさらに来ますたイエイ！」

「和。今日数学で出た宿題なんだけど、後で一緒にやらない？」

「別にいいわよ」

「まさかのスルーだと！？」

さつさと席に戻って和と談笑し始めた零に、僕はガクツとその場で膝を付いてうなだれた。

僕の——この僕の一世一代のボケを、そんな何の面白みも無いスルーで殺すだなんてあんまりだ！ 謝れ！ 笑いの神に土下座して謝れエエエエー！！

「おのれ貴様あ！ 僕がせっかくボケたというのにその反応はなんだ！ そこはしっかりツツコミを入れんとおぐいえあうあえああいああーッ！」

「マジ泣きすんなよ。あーもう面倒くさい奴だな」

ぼろぼろと落涙させながら嗚咽を漏らす僕に、零が心底ウザそうな顔をしてきてコンチキショウ。おのれ零しゃん。立腹するあまり、途中で文が乱れてしまったではないか。近い内に必ずやその艶やかな肢体を舐め回して復讐してやると堅く心に誓ったのは言うまでもない。3割は嘘だつぺ。

「それより遥。自分のお弁当はどうしたのよ？」

と、和が至ってマイペース（僕が号泣しているにも関わらずにな！）にソーセージを箸で摘みながら横目で言う。

「自分のがあるなら、それを食べたらいいいじゃない」

「そんなもん、朝の休み時間中に平らげてしもつたわ！」

「早弁にも程があるだろ」

つか自業自得じゃねえか、と零しゃんが同情の余地無しといったジト目でそう仰られます。テラ正論過ぎて何も言えやしねいのが困りどころだ。異議あり！ と逆転を狙う余地すら残されていない。なんて骨体。もとい、こつたい。

「だってお腹が空いてたんだもん。仕方ないじゃん。きっと原因は

水道水だけの朝食にあつたと見たね！」

「固形物じゃなくて液体が朝食ってどんなんだよ。朝食という言葉の意味を分かつたらんだろお前」

「まあまああ。とりあえずそういったワケで、澪しゃん達のお弁当を頂きに俺参上したって事ですよ。ご理解頂けたかな、かな？」  
「なるほど。さっぱり分からん」

言つて、澪しゃんは僕を無視してパクパクを弁当をつつき始めた。人がせつかく説明してあげたというのにこの子ったら！ まったく、なんて卑しい子なのかしら！

むむむ。こうなつたらやむを得ない。ならば、かねてより練つていた『ミツシヨン・ジャイアンツ（剛田つ、もとい強奪作戦）』を始動するしか他ない。そしてグッドタイミングな事に、和がちゅうど水筒へと手を伸ばして箸を休めている。今ならば、ここで僕が和のおかずを掠め取るうとアクションを起こしたとしても、とつさは反応できまい。

ククク。これは願つてもいない絶好のチャンス。狙うなら今しかあるめえ！

和の弁当箱——その隅に置かれているミニハンバーグへと狙いを定めて勢い良く手を伸ばし、そして——

「和のミニハンバーグ取ったリイイ！」

ヒョイ（ミニハンバーグを掴む音）

ベキ！（僕の指が折れる音）

「あががーッ！ 僕の指が一瞬であらぬ方向にいー！」

「残念だつたわね遙」

激痛のあまり悶え転がる僕に、和がクイツと眼鏡を押し上げながら勝ち気に微笑む。

「遙がやるうとしている事くらい、全てお見通しよ」

「くそ和たんめ！ 僕の考えを読んだ末、敢えて水筒へと手を伸ばし、僕を意図的に誘い込むとは……！」

「え、ええええええ！？ 今何が！？ つか、私の目の前で遥の指が折れ、折れエエエ！？」

何やら溻しゃんがドン引きの様子で驚愕の声を上げてパニクっているが、とりあえず放置だ。今は、どうやって和を攻略するかどうかの方が重要だ！

「やるではないか、和たん」

しばらく転がっていた床からふらりと立ち上がり、再び和と対峙する。

「まさかこんな所で貴様のような強敵と巡り会えようなどとはな。ふふふ、久しぶりに血が騒ぐ。我の中の眠りし戦鬼が、今まさに覚醒して武者震いを起こしておるわ！」

「どちらかと言うと、震えているのは足の方だけだね。生まれたての子鹿みたくなってるわよ？」

「ええい、うるヘイ！ べ、別にあんたの事が怖いわけじゃないんだからね！」

ツンデレみたいな発言をしつつ、少しずつ和との距離を詰める。

当の和は、百獣の王よろしく、どっしりとした物腰で近寄る僕を見据えていた。チツ、強者特有の余裕ってヤツかそうですか。ならば、その油断を逆手に取るまでだ。

以前じつくりと肉薄しつつ、僕は最良の一手を投じる為、思考をフル回転で巡らす。現在、和の弁当箱には、少しのおかずとご飯しか残っていない。個人的にはおかずを狙いたいところだが、先ほどあっさりと指を折られた手前、再度同じ方法でいくなんて愚の骨頂だ。ここは和の予想を裏切るような物を狙うべきだろう。

とすれば、狙うのはあれしかない——！

「和たんのご飯、頂きいいい——！」

そう。さすがの和も、まさかご飯を手で掴んでくとは思うまい。これが熱々のご飯だったならまだしも、この時間になってすっかり

冷えてしまったご飯ならば、全く問題ないのだ！

折れていない側の左手を、和のご飯へと伸ばす。ふはは！ 今度こそ僕の完全勝利――

ヒョイ（ご飯を掴む音）

ひでぶ！（僕の左腕が折れる音）

「あぎやぎやぎやーッ！ 僕の腕があ！ なんか秘孔を突かれたモヒカンの悲鳴みたいな音を立てて折れた――ッ――！」

「いや、その理屈はおかしいだろ！？ どんな効果音だよ！」

「言ったでしょ？ 遥のやろつとしている事ぐらい、全部まるつとスリツとエブリデイお見通しだって」

悶え転がる僕を尻目に、和はさっさと弁当を平らげて、飄々と立ち上がる。

「それじゃあ漚。私これから生徒会の用事があるから、お先に失礼するわね」

「え？ あ、うん。い、いつてらっしやい……」

そう断りを入れて背中を向けた和に、漚は先ほどまでの壮絶なバトルに顔を青ざめながらも、小さく手を振って見送る。って、僕は無視ですかい。こんなとんでもない大惨事になっているというのに（僕の右手と左腕が）。

「本当に行っちゃった。それにしても、まさか和があんなにも強かつただなんて……」

「まったくですな。一体どこであんなサイヤ人じみた戦闘力を身に付けてきたのやら」

折れた右手と左腕に刺激を与えないよう慎重に庇いながら立ち上がり、僕は和が立ち去って行った方向へ視線を送る。

「しかし、いつまでも最強の座にのさばらせるつもりはない。今回は完膚なきまでに大敗したが、次こそは必ずやその最強の座を奪い

取ってみせちやるぜ！」

「いやお前、本来の目的をすっかり忘れてやしないか？」

和への再選を胸に誓っていた最中、漣が呆れ果てた口調で何やら呟いたような気がしたが、聞かなかった事にしておいた。

「ところで遥。その手と腕はマジで大丈夫なのか？ 見るのも痛々しいくらい無惨に折れ曲がっているワケだが……」

「大丈夫大丈夫。だってこれコメディーだし。次回には何事も無かったように治ってるハズだし」

「なんだその仙豆せんず並みのギャグ補正は」

第22曲、和がこんなに鬼強いわけがない、（後書き）

和たんが最強キャラになりますた。

どうしてこうなった！？

## 第23曲くあずにゃんこいーく

春つらら——という心地良い陽光もすっかり消え失せ、照りつく太陽が自意識過剰なまでに暑苦しく感じられる今日この頃。そんな最高気温が日々更新されつつある昼休みに、僕は迂闊にも弁当を自宅に置き忘れてしまった事に気付き、購買部でパンを購入する事を余儀なくされてしまった。これも暑すぎる太陽が悪いのだ。決して僕の頭が悪かったワケではない。

などと理不尽に責任転嫁した所で状況が好転するワケでもなく。しぶしぶと購買部向けて校庭を歩いていた道中、ふと何気なく横目で見た先に、我らがあずにゃんこと中野梓が、ちょっとした木々の日陰でオドオドと挙動不審していた。

「あ。遥先輩！」

何をしているのかとしばらく観察していたその時、梓が目ざとく僕を発見し、こっちの方へ手招きしてきた。それも、さっきまでの困り顔から一転し、救いのヒーローでも見つけたような喜色満面な笑顔で。

「……？」

何で如何にも安堵したような表情を浮かべて手招きしているのだろつと首を傾げつつ、僕は招かれるまま梓の元へと向かった。

というか、

「あずにゃアアアアアんー！」

「ひああああ！？」

奇声を上げながら、全速力で梓に抱きついた。

## 第23曲くあずにゃんこいーく

「あずにゃんあずにゃんあずにゃん！ クンカクンカああこれはまさしくあずにゃんの匂いだよ最高だよチョー最高だよ！ もう舐めたいくらいだよっ！ かもう我慢できない舐めるぺロぺロぺロぺロペロリ！ あああずにゃんの可愛いほっぺスリスリスリッ」  
「いやああああ！ な、舐めないでください！ 頬を擦り合わせないでくださいッ！」

「じゃ、じゃあ、頬じゃなくて粘膜を擦り合わせよ？ クチユクチユってしよ？ ハアハア……っ！」

「へ、変態だあー！！」

息を荒くする僕の腕の中で、梓が必死に身をよじらせて抵抗を試みる。あらあらまあまあ。この子ってば照れちゃって。かゝわゝいゝゝいゝ！

「大丈夫大丈夫。もう何も怖い事はしないから。安心していいんだよ。グヘヘヘ」

「怖いです！ その邪悪な笑顔がめっちゃ怖いです！！」

あれ？ おかしいな。冷静になってもらおうと天使のような笑みを浮かべたのに、さらにあずにゃんの恐怖を煽ってしまった。きつと、後光が差さんばかりの僕の神々しい笑顔にひれ伏してしまったのだらうと一人納得した。嘘だびや。

「本当に何もしないって。ちよつとあずにゃんのパンツを脱がすだけだから」

「ろくでもない事をする気満々じゃないですか！ もういい加減離してくださいよッ」

尚もドタバタと腕の中で暴れる梓にいい加減手を焼いてきたので、そのまま思い切りよくパツと解放してやった。ホントはもっとあずにゃんで遊んでいたかったのだが、まあ仕方あるまい。さすがにこれ以上やると助けを呼ばれかねんな。至極残念無念。

「はああ。やっと離れられた……。もう遥先輩は！ 出会い頭に

いきなり何をするんですか！ 猛省してください！！」

「……ごめんなさい。あと、どさくさに紛れてあずにゃんのおっぱいとお尻もいっぱい触ってごめんなさい」

「ええ！？ 本当に何をしてくれてるんですかぁ！」

そう驚愕して、顔を真っ赤にしながら自分の肩を抱く梓。どうやら、僕が自己申告するまで全然気が付いてなかったらしい。ちなみに、感触からしてBカップでした（B行為なだけに）。

「ホントに遥先輩って人は！ この前の時もそうでしたけど、もつと普通に挨拶してくださいよ！ いくら同性とは言え、セクハラは御法度なんですよ！」

「バカ野郎！ 僕からセクハラを取ったら何も残らねえじゃねえか！！」

「そこまで自分を卑下しなくても！」

それ以前に、セクハラだけが存在理由だなんて嫌過ぎます！ と梓が大音量でツッコミを入れる。同性というか、ホント言うとな僕は男なので、御法度どころか島流しものの罪になりかねんな。今後は慎重にセクハラするでしょう。結局セクハラするんかい。

「だいたい、どうしてそう毎回セクハラする必要があるんですか！ 遥先輩だって、この間深刻な顔をして私に相談してきたぐらいなんですからね！」

「そう、だったのか……。やったね」

「喜んじやったー！？」

「そうかそうか。そんなに澪しゃんが嫌がつていたのか。これはもう、澪しゃん攻略の日も近いですな！」

「むしろ遠のいてますよ！ 現実を見てください現実を！」

「——はっ。見えた！ 見えたぞお！ 澪しゃんが裸になってベツドに寝そべりながら僕を待つ未来が！」

「ありえない幻覚を見ちゃったーッ！」

幻覚とか言われた。まったくもって失敬な。きつと梓には、僕と澪しゃんの輝かしい未来がまるで想像できないのだらう。実に嘆か

わしい事だと心中でむせび泣いた。嘘ですたい。

「も〜。そんな事ばかり言っていると、いつか本当に警察に捕まっちゃいますよ?」

「望むところだ!」

「望んじやったー!?」

「むふふ。一体どんな美人婦警さんが僕を逮捕してくれるんだろ? ドキドキするな〜。やっぱ婦警さんだけに、手錠プレイは欠かせません!」

「DMですか!」

「いや? 手錠をかけるのは婦警さんの方だよ?」

「DSの方だったーッ!」

以上、僕と梓によるボケツツコミ劇場でした。次回、僕と漑しゃんのボケツツコミ新劇場版・破にご期待ください。清々しいくらいに嘘だっちゃ。

「はてさて閑話休題。こうして呼ばれて飛び出てジャジャジャンしたワケだが、梓はこんな所で何してたんだ?」

「はっ! そうだ。こんな事してる場合じゃなかった!」

あれを見てください! と慌てて頭上——木の幹を指差す梓。言われて指の先をたどって見上げると、そこには生後間もない白茶の子猫が、ちよつとした太い枝の上でぶるぶる震えていた。見るに、早く助けてくれと言わんばかりに、瞳をウルウルさせて救難信号を放っている。

「おお、何かと思えばぬこでないか。何であんな所にいるんだ?」

「ぬこ? えっと、それはともかく。たまたま近くを通った時に子猫の鳴き声が聞こえたので、鳴き声のする方向に行ってみたら、今みたいにぶるぶる震えている子猫を見つけて……」

「さしずめ、好奇心で登ってみたら下りられなくなったと言ったところか」

「多分、そうだと思います」

頷く梓。しかし、自分で登っておきながら下りられなくなった

なんて、間抜けな子ぬこもいたもんだ。むしろ、あんなちっちゃい体でどうやって登ったのが気になるところだ。プリンセス（笑）天功よろしく、イリユージョンでもしてみせたともいうのだろうか。んなアホな。

いや、この際イリユージョンとか隅に置いて。

「ところで親ぬこは？　いないのか？」

「それが私も周りを探してみたんですけど、どうにも見当たらない……」

ふむう。親猫がいないんじゃない？ どうしようもないな。手を伸ばして届くような高さじゃないし。まして上手く登れるような足場も無いし。せめて足が届く所にちょっとした太い枝でも生えていたら別だったんだけども。

うーむ。こうなると、律儀に親猫が助けに来るのを待つか、梯子でも用意しない限りはどうにも助けられそうにないな。

「遥先輩……」

とても不安そうに僕を見つめる梓。今にも微風だけで落っこちそうな子猫が心配でならないらしい。心優しい娘だ。

「ん。大丈夫大丈夫。すぐに助けてやるから」

そう落ち着かせるように梓の頭を撫でて、未だぶるぶると震えたままの子猫を見上げる。

「ちよつと待つてろよにゃん子」。すぐに助けてやつからな。じやあ僕は梯子を借りに行くから、あずにゃんはここで待機な？」

「はい！　任せてください！」

よし。そんじゃちよつくら用具室に行つて、梯子を借りに行くのでしょうか。

## 第23曲 あずにゃんこいー (後書き)

主人公が発情期すぎる件について。

なんか、遥登場!! 奇行みたいな式がすっかり定着しちゃったな、この小説……。

## 第24曲『イン・パラディスム』（前書き）

週に一回くらいは更新していたのに、二週間も空けてしまったじゃ……（汗）。

そんなワケで、お詫びの意味も込めて、今回はいつもより長めです。ま、例によってシリアス回だけでもね！

## 第24曲　イン・パラディスム

結論から言えば、子猫は五体満足無事に救出する事ができた。子猫の方も特に暴れたりもしなかったので、そのおかげもあって滞りなく助けられた事も無事に済んだ要因の一つだろう。何はともあれ、猫ともども大事なく済んで何よりだった。

それで、だ。

子猫を助けたまではいいが――

「この子、どうしましょう……」

ミヤ、と甘ったるい声で鳴く子猫を抱きかかえながら、梓は悩ましげに眉を傾かせて呟いた。

場所は変わって体育館裏。よく告白イベントなどで定番と化しているスポットだが、生憎と桜が丘高校は女子高の為、そんなキャツキャウフフなイベントが起きるような場所では断じてない。また、普段は閑散とした物淋しい所の為か、憩いの場として使う生徒も誰一人として居らず、これ幸いと僕達は助けた猫と共に人気の無い此処を隠れ蓑にしていた。

密集した木々が燦々と晴れ渡る空を隠している為、まるで陽の光が当たらない。不気味なほど薄暗い上に、冬場はかなり寒くて最悪なのだろうが、このクソ暑い季節には逆に好都合だった。

「どうにか誰にも見られずにここまで来れたけど、ホントどうしたもんかね」

溜め息混じりに言っつて、僕はちょっとしたコンクリートの段差に腰を落ち着けた。ちなみに、梓は嬉々として暴れ回る子猫を宥める

為に、僕より先に座っていた。

「しかし腕白な子ぬこだな。人に対してもまるで警戒心が無いし」

「そうですね。人懐っこいと言うか」

言いながら、うりやうりやと梓は子猫の鼻を弄くる。当初はくすぐって身をよじらせていた子猫も、逆に楽しくなってきたのか、梓に猫パンチをかましている。そんなチビな癖して好戦的な様子を見て、「あはっ」と梓が笑い声を零した。

あー。なんか、すげー和む。

「いや、和んでる場合じゃないですがな」

緩みかけた思考を再び張り直し、これからの事を考える。

子猫の救出まで無事に済んだ。が、問題はその後だ。助けたはいが、この後の処遇をどうするかかが問題だった。

普通に考えるなら、親猫の元へと帰すのが筋だ。が、その親猫が不在な上に行方知れずとあつては話にならない。

ならば元いた所か、この場合だと親猫が子猫を探し回っている事を信じて近くの場所で離してやるべきだとは思ったが、

「ダメですよそんなの。まだこんなに小さいのにお母さんも無しに手放すなんて……。それにこの辺は車の通りも多いですし、絶対危ないです！」

と、僕の提案はあえなく却下された。まあ子猫の身を重んじれば、当然の反論だと思う。

さて。ならばどうするかだが――。

「遥先輩。このままだとチャイムが……」

「……………」

梓が不安げに僕を見る。梓の言う通り、このまま時が過ぎれば当然の如く昼休み終了を知らせるチャイムが鳴り響き、僕達学生の本分として教室に戻らなければならない。それこそ、サボリでもしたら教師に大目玉だ。最悪、罰として自宅謹慎を処さる上、内申点にも響く事だろう。いつも真面目な梓は言わずもがな、普段はちゃんぼらんしている僕としても、それだけはどうにも避けたい（留年

なんて、やっぱカッコ悪いし」。

仕方ない。ここは一つ――」。

「奥の手を使うとしますか……」

## 第24曲　イン・パラディスム

「奥の手って、うちの部室を使う事だったのかよ……」

「ん？　りったん的には、神の一手の方が良かったの？」

「そういう問題じゃねえよ」

つか、神の一手って何だよ、と呆れ混じりに律は応えた。

軽音部の部室――そこで僕と梓は、腕を組んで立っている律を対面に、寄り添うようにソファ―に腰掛けて会話していた。

ところでこのソファ―、何気に高級素材を使ってやがった。何かもう、手触りだけで一般品とは一味違う事が分かってしまうのだ。

これはひよっとしなくても出費者はムギ、もとい琴吹家の者と見た。そういや、ここにあるティーカップやポットも、全部ムギの所有物なんだったけ。それも当然のように高級品で。琴吹財閥は化け物か。

閑話休題。そんな高級素材を使用したソファ―のフカフカ感を存分に満喫しつつ、

「悪いねりったん。ここまで引つ張って来た挙げ句、部室の鍵まで開けてもらって」

と、僕は眉間にシワを寄せている律に向かって、そう言下に詫びを入れた。

「まったくだよ。弁当食べてる最中に無理やり拉致られて、何だかよく分からない内に部室の鍵を開けさせられて。なんだかんだで部室に入った途端にこれだもんな」

と、じゅっと白い目で梓の腕に抱かれた子猫を見やる律。言外に

「さすがにヤバいだろうそれは」というのが表情だけ読み取れる。そう。奥の手とはどのつまり、軽音部の部室でこの子猫を匿う事だったのだ。

ここならば、普段部活でしか使用されないし、防音加工もされているので、猫の鳴き声くらいでは周囲に届いたりはいしない。その為、道行く生徒や教師にバレる事もまずない。子猫を匿わなければならないといったかなり拙い状況の中で、ここ以外の避難場所は考えられなかったのだ。

ので、部長として唯一軽音部の鍵を所持している律に、少し手荒だったが無理やりここまで来てもらったのだ。それ故、律をここまですて連れて来た際、さすがに何も知らせないワケにもいかなかったのだ、他の生徒達にバレないようバックに隠し入れた子猫を出した時、律が目丸くして驚愕の声を上げたというのは言うまでもなかった。「で、どうするんだよそれ。事情は一通りさつき聞かせてもらったけどさ……」

「あの……放課後になるまで、ここにいさせちゃダメですか？」と、梓。

「まあ乗り換かった船だし、私としても今更その猫を追いつもりなんてさらさら無いけどもさー」

今回だけだからな、と懇願する梓にそう苦笑して応えた後、律は不意に子猫の頭をぐりぐりと撫で始めた。子猫の方はと言えば、こちの苦勞も知らないで「ミャー」と実に愛くるしい鳴き声を上げて、恍惚そうに瞳を閉じる。チキシヨイ。本当に可愛い過ぎる。

「それはそれとして、だ。放課後までここで匿うまではいい。でも、大変なのはその後の方だろう？」

唐突に子猫から手を離し、いつになく気難しい表情を浮かべて、律は僕達に言う。

「いくら何でも、その猫をこのまま部室で飼うワケにはいかないぞ。さわちゃんだって許しはしないだろうし、今だってかなり危ない橋を渡ってんだからさ」

「まあ待てりつたん。こう考えるんだ。危ない橋なだけに、危険な状況下に陥った男女は恋に落ちるといふ吊り橋理論が本当なのかどうか試す、絶好のチャンスなのだと……！」

「そうだな。絶好なだけに、遥と絶交できるまたとないチャンスだ」「誰がうまい事を言えと。ていうか嘘ですごめんなさい」

即効で謝ってみた。てつきり、りつたんの小粋なツツコミがくるものとばかり思っていたのに、これいかに。

やっぱ、事態が事態なだけに（そして、部長という肩書きもあつて）いつもみたくふざけていられる心境ではないという事なのだろうか。ちよっぴり寂しい。あれ、おかしいな。なんか目から鼻血が……。

「話を戻すけど、本当にどうすんだ？ 梓がその猫を飼うのか？」

「飼い猫を預かるまでならまだしも、野良猫や捨て猫を拾ってくるのは、さすがに両親が許さないかもです……。律先輩の方はどうですか？」

「私んちもペットは禁止なんだよ。零も同じく。そっぴや唯も、親が猫アレルギーとか何とか前に言ってたな」

「じゃあ、ムギ先輩なら……」

「あー。ムギも無理。血統書付きのでないと、基本親が許さないから」

「ん？ 何で遥がそんな事知ってた？ お前、ムギの家庭環境なんて詳しかったか？」

それも断言できるくらいに、と訝しげに訊ねてくる律。

やつべ〜。ついつい口が滑った。何とかして適当に誤魔化さないと。

「あ、いや、前にムギから聞いた事があるんだよ。雑種は飼えないとかどうとかって」

「ふーん。まあいいけど……。つか、そう言う遥の方はどうなんだよ？」

「僕のアパートも基本ペットは禁止なんだよね。カメとかハムスタ

「とかの小動物ならOK牧場なんだけども」

「そう、ですか……」

一通り聞き終えて、しゅんと意気消沈とする梓。望んでいた回答を得られなかったのだから、当然ちや当然の反応だろう。

さて。これで最も簡単かつ早期に解決できる手段は絶たれた事となる。ふむう。そんなにうまく事は運ばないか……。

「そうすると、後は他の里親を探すくらいか……」

律が腕を組みながら、「ん」。でもなあ」と渋い顔をして唸る。

「でも、何ですか？ 律先輩」

「今日中に里親が見つかるのかって話だよ。梓、誰かすぐに引き取ってくれるような人に心当たりでもあるのか？」

「そ、それは………」

目を伏せて、押し黙る梓。子猫を引き取ってくれそうな知り合いに思い至らなかったのだろう、そんな暗い表情だった。試しに律にもそれとなく視線で訪ねてみたが、彼女も首を横に振って否定してみせた。言うに及ばず、僕にも子猫を引き取ってくれるような知り合いはいない。元々、知り合いなんて少ない身の上ではあるのだが………」

律の言う通り、がむしゃらに手当たり次第里親を探すのは良いが、今日明日中に見つかるようなものでもないと思う。なおかつ、この子猫は雑種。これがアメシヨーのような血統書付きだったら話とはかく、野良で雑種だとさらに条件は難しくなるだろう。去勢手術などで金も掛かるだろうし、すぐに頷いてくれるような話でもない。これがドラマや漫画だったら、好都合主義に猫好きな心優しい人に早々と出会えて、諸手を上げてハッピーエンドを迎えられるのだろうけど。しかし生憎と、僕らがいるのはリアルな世界。そんな簡単に事は進んではくれないのだ。

仮に、今日にも里親が見つからなかったら。その時、この子猫はどうするのか。

誰も預かれないこの状況で、どうすればいいのか。

どうするべきなのか――。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が重苦しく三人の間を行き交う。ただ一匹だけ、梓に抱かれた子猫が、バタバタと手足を動かして「ミャーミャー」と鳴き喚いた。

それは、単に遊んでほしいとねだっているだけなのか。

それとも、ここにはいない親猫を求めているのか。

どちらにせよ――どうしたって、人である僕達には判断が付かなかった。

「やっぱりさ……」

不意に、律が気まずそうに呟いた。これからする話は、とても酷だという意味を含めるように。

「やっぱり、親猫が迎えに来てくれるのを信じて、元いた場所に返した方が――」

「ダメですッ!!」

キーンっ、と梓の大声が静かな部室に響き渡った。子猫の方も大声に驚いて、瞳孔を開いてピンツと耳を張る。

「ダメです! 絶対ダメですッ! 親猫が迎えに来てくれる保証なんてどこにもないのに、それなのに、この子を独りぼっちにさせるなんて。そんなの、そんなの……」

いくら何でも、あんまりです――。

そう言っつて、梓は子猫を守るようにギュッと力強く抱きしめた。顔を伏せているので表情は窺えないが、きつと瞳に涙を溜めているのではないだろうか。

またしても沈黙が下りる。先ほどまでのモノとは違い、いたたまれない静寂が辺りを包む。胸を刺すような張り詰めた空気が、耐え難いほど肌身に染みて居心地が悪い。

梓の気持ちはよく分かる。僕だってほんの少しの間だったのにも

関わらず、すっかりこの子猫に情が移っている。今更無関係な振りをする心境にはなれない。梓もそう思っているに違いないし、きつとどれだけ日が暮れようと、この子猫の里親を見つけてみせるという気概もあるくらいだろう。無論僕も、最後まで子猫と梓に付き合うつもりではいる。

だがしかし、気合いや情だけでどうにか出来るほど、世の中そう甘くはないのも、また事実だ。

それは、とどのつまり――

「結果的に、里親が誰一人として見つからなかった場合はどうするか……」

誰にも聞こえないくらいの声量で、僕はボソツと独り言を呟く。

里親が見つからなかったら、当然子猫はこのままの状態を維持する形となる。誰も引き取らない限りは、この子猫はずっと独りぼっちのままにいる事になるのだ。

そうなれば否応なしに、僕達はある決断を下さなければならなくなる。

元いた場所に返すという、酷とも言える決断を。

「……………」

いまだ子猫を抱えながらうずくまる梓を横目で見ながら、物思いに耽る。

きつと僕と梓がしようとしている事は、人間のエゴでしかないのだろうと思う。

客観的に見れば、僕達はただ、この子猫を元いた世界に返すだけの行為に過ぎない。それが飼い猫なら問題だが、野良猫を野生に返すだけの行為に、別に非難される謂われなど無いのだ。

例え、そこに生きていける保証はなくとも。

そもそも、生きていけるかどうかはこの子猫次第。

生きるも死ぬも、この子猫が決める事なのだ。

この小さな体に収まる命の決定権を、僕達人間が勝手に所有していいものではない。

仮初めの善意だけでは、いずれ互いを滅ぼす。

そんなモノは、所詮安い自惚れ。

もしくは、偽善。

優しさを与えるだけ与えて、その後勝手に別れを告げる事ほど、残酷なものはない。

だからこそ、一時の感情に流されてはいけないのだ。

最期まで面倒を見る気がないのなら、尚更。

それは分かっている。

分かっているんだ。

だけど。

そういうものだと言っただけの程度。

人間は——少なくとも僕達は、そんな単純には生きてはいけないものだから——。

「もしも……」

先の見えない思考にどこまでも浸っていた最中、不意に梓がふつと顔を上げて微かに呟いた。

そんな梓の言葉に、僕と律は視線だけ送って、次の言葉が紡がれるまで静かに黙する。

「もしも今日中に、この子猫を飼ってくれる人が見つからなかったら——」

見ると、てっきり濡れていると思っていたその瞳には、ほんのりと赤みがかっているだけで既に涙は気配は無く。

代わりに、強い意志が込められた力強い瞳で。

梓は。

梓は、僕達の視線を真っ向から受けながら、高らかに語気を強めて言っただけだ。

「その時は、私が——!!」

「結局、誰も里親になってくれる人は見つからなかったな」

「そうですね……」

放課後——なんて時間を既に何時間も通り過ぎ、さすがに殆どの部活動が終了した今現在。深く暗い影が周囲を浸食し、もう夜と言っても差し支えない景色が広がってしまっている。今この暗い校庭には、僕と梓くらいしか人が見当たらなくなっていた。いるとすれば、職員室でまだ仕事を片付けている最中であろう教員くらいのものか。

二人と一匹しかいない侘びしい校庭を、僕達は敗戦した選手のようにトボトボと歩く。心なしか、足取りが重い。ズルズルと鎖に繋がった鉄球を無理に引きずるような、そんな感覚。

うむー。こういう雰囲気の人にこそ、何か冗談の一つでも言えればいいのに、他愛ない会話文くらいしか口から出ない。いつもの茶目っ気たっぷりのアホな僕はどこへ国外逃亡したと言うのか。こうなれば、国際指名手配でもしてひっつかまえるしか他ないのか。いや、何の話をしとんじやい。

なんつーか、つくづくこういったシリアスな雰囲気は苦手だよな、僕って……。

「まあ、ある程度覚悟はしていたつもりだったけど、こうして一番避けたかった現実を目の前に付けられると言葉も出ない気分になるよな。これだけの数の生徒がいりや何とかなるかって、少しは楽観的に思っていたんだけどなあ……」

「運が悪かったというのもあるかもしれませんが。訪ねた人の殆どが、ペット禁止か既にペットを飼っている家庭ばかりでしたから。こうなってしまった以上は仕方ありませんよ」

「仕方ない、か……」

確かに、こうなった以上はどうしようもない。すっかり辺りも暗くなってしまったし、今からこの時間帯で色々なご家庭に足を運んでまで里親を探すのは、さすがに気が引ける。何より、こんな遅く

に赤の他人の家に尋ねるのも、さすがに迷惑だろうし。

「そうは言ってもさ、梓——」

動かしていた足を止め、所在なく頭をボリボリ掻きながら、僕は梓とその腕に抱かれた子猫を見据えて言う。

「このままだと、その猫をお前が預かる事になるんだぞ？ 本当にそれでいいのか？」

それは、部室でも梓が明言していた言葉。

もしも今日中に里親が見つからなかったらどうするのか。

律にそう問われたあの時、梓はしばらく間を空けた後、こう返したのだった。

『もしも今日中に見つからなかったら、その時は里親が見つかるまで、私がこの子を預かります！』

それを聞いた時、正直僕と律は、開いた口がふさがらなかった。梓本人が野良猫や捨て猫を預かるのは無理だと言っていたハズなのに、どうしてこの猫を——野良猫を預かる事が出来ようと言うのか。

『確かに野良猫を預かるのは、さすがに両親が反対するとは思いますが、でもちゃんと説得すれば、きっと両親も……』

記憶の中の梓が、僕達の疑問に決意のこもった眼差しを向けて明瞭に答える。

『多分、最初の内は反対してくると思うんです。でも、そこは無理やりでも絶対押し切ります！ この子の里親が見つかるまでは、私が責任を持ってこの子猫を育ててみせます！！』

そこまで言われて、僕も律も折れた。それで本当に子猫を見捨てずに済むのなら、それに越した事は無い。最後には、あれほど頑なに難しい顔をしていた律も、

『私の方でも手当たり次第知り合いに訊いてやるよ。けど、あんまり期待はすんなよ』

と、半分諦めにも似た苦笑を交えながら出来る限りの協力を申し出てくれたくらいだった。それでも結果的に里親が見つからなかったワケなのだが。

「里親が見つかるまで預かるのはいいけど、いきなりそれは相当怒られんじゃないか？」

そうかもしれないね、と心底困ったような表情を浮かべながらも、梓は「でも」と続ける。

「もう決めた事ですから。両親にはちゃんと事情を話して、里親が見つかるまではちゃんと面倒を見るつもりです」

「何ヶ月とかかったとしてもか？ 下手すれば、それ以上かかるかもしれないんだぞ？」

「……………その時は、」

——ビュウ、と急に強い風が吹いた。反射的に瞼をうつすら閉じ、風で流された前髪を手で押さえる。

風が止み、再度瞼を開けてみたその瞬間、梓の透き通るような澄んだ瞳が、僕の視界に入ってきた。

「私が、この子の親になります」

「……………」

「本当のお母さんに負けないくらい、私がこの子の親代わりになってみせます。私が親で良かったって思ってくれるくらいに。私の所に来て幸せだって、そう実感してくれるように」

「……………そっか」

梓の言葉を聞き終えて、僕は微笑を浮かべて呟いた。

何なんだろうな、この気持ちは。僕を指して言ったワケでもないのに、すごく嬉しいと思っている自分がいる。

僕は、この子猫じゃないのに。

それは、大切な家族も帰るべき家もなくなったこの子猫と——自分の境遇を重ねて見てしまったせいだ。

ずっと無条件で自分のそばにいてくれる存在が確かにいるのだと。そう思わせてくれたからだろうか。

悲喜こもこも、戯言だけど。

この気持ちだけは、嘘じゃないんだけども。

「まったく。この幸せもんが」

梓に抱かれたままの子猫の頭を、グリグリと撫で回す。よほど気持ちいいのか、喉をゴロゴロと鳴らし始め、恍惚とした表情を浮かべる。

「こんなお人好しに——いや、この場合はお猫好しか？ 何にもしても、こんなとんでもなく人の良い奴に偶然拾われて、本当にラッキークッキー八代亜紀なんだぞ、お前」

「ふ、古い……」

梓がボソツと小声でツツコンできた。うん。僕もそう思う。内心、恥ずかしく思っている自分がいるのは秘密だ。

「……本当に羨ましいくらいだよ」

僕にも、かつて梓のように手を伸ばしてくれた人がいた。

今より暗くて、捻くれていて——感情なんて一切表さなかったボロ雑巾のようだった僕に、手を差しのべてくれた人が。

『アンタがどれだけ嫌がろうが拒絶しようが逃げ回ろうが、手加減無く手抜き無く、ずっとアンタのそばにいて恩を返せないほど幸せにしてみせてやんよ。死ぬほど覚悟しとけ』

そう悪どい笑みを浮かべながら、姉さんは自信満々に言っていた。

あの時は、押し付けがましい耳障りなセリフだと思ったけど。

姉さんは本当に、僕を幸せにしてみせたのだから、頭が上がりない。

姉さんの宣言通り、恩を返せないくらい。

恩を返すどころか、取り返しのない仇を返してしまったワケだけでも。

「お前は、僕みたいになろくでもない奴になるなよ」

「え？　どういう意味ですか？」

子猫向けて言ったセリフに、梓がはてなと小首を傾げて訊き返してきた。

「……うんにゃ。何でもない」

つまらない戯言だよ、と言い捨てて、僕は子猫から手を離れた。さてと。雑談はこれくらいにして、いい加減帰路に着かないとな。一人暮らしの僕はともかく、帰りが遅いと梓の両親が心配してしまう。

そう思つて梓の方を見ると、「戯言？」と以前首を傾げたままの状態でいた。つて、まだ考えてたんかい。

「ほら。本格的に暗くなる前にさっさと帰るぞ」

と梓に声を掛けてから、僕は一足早く校門へと向けて歩み出す。

「あ！　ちよつと置いて行かないでくださいよ〜っ」

可愛く頬を膨らませて、振り落とさないよう子猫をしつかり抱いて近寄ってくる梓を微笑ましく見つめながら、僕はふと思った。

こんな僕にも、いつかまた姉さんのように、手を差しのべてくれる人が現れてくれるのだろうか、と――。

## 第24曲〜イン・パラディスム〜（後書き）

この小説の、色々な意味で何かと恐ろしい点。

・いつも原作から外れたようなふざけた話が続くかと思えば、ふつとわいたように重苦しいシリアスがやってくる点。↑なにそれ怖い

・いつの間にやら、すっかり主人公が変人から変態にクラスチェンジしちゃったお。↑なにそれ怖い

・クラスチェンジというか、犯罪者にジョブチェンジしてなくね？  
↑なにそれホント怖い！

・澪しゃんのツツコミスキルが万能過ぎてマジばねえ。↑なに、それ……怖い……。

・というか、澪しゃんって何気にオタ知識豊富過ぎだよな。↑なにそれ、素晴らしい！（無論、原作ではそんな事ない）

・澪しゃんに限らず、他のキャラも割と崩壊しちゃってるよね。↑それは仕様です

・あ。そういえば、気が付いたらお気に入り小説登録が百件越えた。↑なにそれ超嬉しい！

・そして、こんな何が何やらワケワカメな小説に、最後まで読んてくれる方や、感想まで書いてくれる読者様がいてくれる点。↑なにそれ、さては神様ですか貴方達

## 結論

・この小説の半分は、読者様の愛情で出来ている。  
あともう半分は作者の劣情。  
↑なにそれが一番怖いッ！

## 第25曲〱バカとテストと問題集〱（前書き）

まことに勝手ながら、第7曲を少し修正させていただきました。

でないと、今回の話と矛盾しちゃうので……（汗）。

## 第25曲　バカとテストと問題集

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらないだけなのよっ！」

「冒頭からどつかで聞いた事のあるセリフ!!」

## 第25曲　バカとテストと問題集

「ま、世の中がつまらなかるうが貴方がつまらなかるうが、勉強がつまらないという事だけは変わりないんだけれどもね！」

「某生徒会系ラノベの真似をしたかと思えば、そんな事が……」

そんな前振りもなく急に立ち上がった僕をジト目で直線しながら、隣りに座っている澪が心底呆れた口調で言う。

「つまり、あれか？　期末試験前に、赤点取るかもしれないと泣きながら勉強を乞うてきて、こうしてお前らの為に勉強会を開いてやった私に対する嫌みなのかそれは？　そんなに私の教え方が気に入らないとでも？」

「いやいやとんでもない、と澪の言葉に大仰に首を振ってみせて否定する僕。

「僕はね、ただこう言いたかったただけなんだよ」

フツと自嘲じみた笑みを浮かべ、一呼吸置いた後、僕は高らかに言うてのけた。

「テストだなんて、いつそカンニング竹山しちゃえばいいじゃぎゃびああああ!？」

言い終わる前に、澪の手元にあった消しゴムが直線を描いて飛来

し、そのままブレる事なく僕の額にグサリと刺さった。

.....。

ええ！？ 消しゴムが！？

「いやその理屈はおかしい！ どうやれば何の変哲もない消しゴムが僕の額に刺さんのよ！？ ていうか血が！ 額から血が噴水みたいにイイイイイ！？」

「やかましい。黙って勉強しろ」

床をのた打ち回る僕を睥睨しながら、さもウザそうに冷たく吐き捨てる澪。なにその淡白な反応！ この血なまぐさい現状を見て言う事がそれだけ！？ あんた鬼だよ！ 悪魔超人だよオオ！

「まったく。これがコメディじゃなかったら、マジで死んでたところだぞ」

しばらくしたら激痛が収まってきたので、刺さったままの消しゴムを抜き取った後、僕は元いた位置に「やれやれ」と嘆息しながら座り直した。まだ額がズキズキ痛むが、血だけでも止まってくれただけでもよしとするか。これも僕の体に流れる竜人の血の驚異的治癒力のおかげだと、先祖代々から流れる血脈に感謝した。んなアホな。

いやはやそれにしても、今回はホントギャグ補正に助けられた。なんて万能なんだギャグ補正。マジすげーよギャグ補正。今なら、ギャグ補正の力で空すら飛べるのではないだろうか。それこそパーマンみたく。

「むしろ飛んでるのはお前の頭の方だろうが。さっさと地上に着陸して現実と向き合え」

「.....いつから澪しゃんは、読心術なんて使えるようになったの？」  
さっきの技といい読心術といい、だんだんと人間離れしてきたくないかこの人？ ひょっとしてこれも、人類最強の生徒会役員の名を欲しいままにしている和さんの影響なのだろうか。だとしたら未恐ろしい事実だった。

こうなれば、負けじと僕も精神と時の部屋に入って修行するしか

ない！　といずれ訪れるであろう和とのバトルに熱い闘志を燃やした。嘘だったら、いいなあ……（でないと確実に僕が和に殺される）。

戯言もここいらで大概にして、閑話休題。

「仕方ない。ここは漑しゃんの言う通り、首をくくって勉強するしかないマイカー」

「それを言うなら腹だろ。首くくったら死んでしまっただろうが」

「死ぬ覚悟も持さないという意味だよ！　そして死ぬ時は漑しゃんの胸の中と決めているので、何にも問題ナッシング！」

「問題ありまくりだ！　それ以前に、お前に貸す胸なんてどこにもないわッ！」

「なんどすて！？　それじゃあ漑しゃんの聖乳無<sup>ソーマ</sup>しに、どうやって生きろと言っんだい！？」

「知るか！　どっちみち死ぬなら意味無いだろうが！　つか、どこ  
のクエイサーだお前は！！」

「お前ら、ホント仲良いなー」

と、今までずっと僕と漑のやり取りを静観（勉強そっちのけで）  
していた律が、そんないかにも傍観者なセリフを吐いた。

とまあ、以上の会話で分かる通り。

今僕と律は、来たる期末試験前に備えて、漑の自宅の部屋で勉強  
会を開いていた。

しかし、こうして漑しゃんの部屋に来るのは、前回——中間テスト  
前の勉強会以来なのだが、相変わらず見栄え良く小綺麗にされて  
いる。しかもただ綺麗なだけじゃなく、男心をくすぐるような、い  
かにも女の子といった趣味が窺える部屋をしているのだ。よく見る  
と、辺りは悪目立ちしないファンシーな柄で装飾されているし、所  
々にちょこんと可愛らしいぬいぐるみが置かれている。かと思えば、  
やはりそこはベースリスト所以からだろうか、誰かは分からないがベ

―スを弾いている男性のポスターなんかも貼られていたりもしてあった。

つまり簡単に要約すると、見るからに溲らしいといった部屋をしているのだ、ここは。

そんな溲の部屋で、僕はいつもの夏用制服姿（ちなみに溲は部屋着。僕と律は学校が終わってここへと直帰したので制服のままなのだ）で胡座をかきながら、「ねえねえ。疲れたし、もうそろそろ休憩にしない？」と溲達に訪ねてみた。

「お、いいね。私も遥に賛成」

「休憩つて、まだ始めてから30分も経つてねえじゃねえか。もっと気張れよお前ら」

まったく、と心底呆れたように溜め息を吐く溲しゃん。どっちかと言うと、僕らより溲しゃんの方が疲れてるように見えるのだが。

溲しゃんは苦労人だからな。怠け者な僕とは大違いである。

「遥も律も、夏休みに入ったら海に行くんだろ？ 今度の期末試験で赤点取ったら、夏休み中も補習させられる事になるんだぞ。まさか忘れたワケじゃないよな？」

「忘れてはないけどさ。いざ勉強しようとなると、どうにも集中できないんだよな。ああもう、ドラム叩きてえ！」

「我慢しろよ律。私だつてもう何日もベースに触ってないんだから」

二人共、試験前で全ての部活動が休止になっているせいか、楽器をいじりたいという禁断症状が出ているみたいだった。これも軽音をやっている者特有の症状なのだろうか。

「だいたいさ、試験範囲が広過ぎなんだよ。日本史だけでこんなにもページ数あるんだぜ？」

ほら見てみるよ、と律がうんざり顔で試験範囲であるページを捲ってみせた。

こうして見ただけでも、ざっと50ページほどもある。他人事じやないだけに、マジで洒落にならんページ数だ。

「仕方ないだろ。先生が決めた事なんだから。ものは試しに訊いて

みるが、『源氏物語』の作者が誰か答えられるか？」

漣にいきなり出題されて、「え？」と間抜けにもポカンと口を開けて呆ける律。

「え、えーっと……だ、誰だったけ？」

「……本当にそんなんで、今度の期末試大丈夫なのか？ 間違いくこれ、テストに出る問題だぞ？」

「やれやれ。りったんは本当にお馬鹿さんだな」

ハツと鼻で笑い、だらしない律の代わりに僕が答える。

「そんなの、隣人部に決まってるじゃないか」

「紫式部だバカ！ 斜め読みして友達を募集する部活とか全然関係ねえよ！」

と、怒鳴りつつも正確なツツコミを入れてくれた漣ちゃん。漣ちゃんも読んでたんだ、あれ……。

「ていうか、そういう漣ちゃんこそ自信あるの？ 今度の期末」

「そうだそうだ！ 偉そうな事言っただけ、漣の方こそちゃんと答えられるのかよ？」

「……まあ、ある程度くらいは」

律のバーゲンくらい安過ぎる挑発に、漣は少し語気を弱めつつもそう答えた。ここで『モチのロンだ！』と答えないあたりが、謙虚な漣ちゃんらしいところか。

「ふむ。ならば漣ちゃんにもお手本として答えてもらおうじゃないか。ほれ、漣ちゃんの問題集貸してみ？」

ほれほれと手を出す僕に、「う、うん……」と戸惑いながらも漣が問題集を手渡す。ちなみに、化学の問題集だ。

「じゃあ、準備はいいかえ？」

「お、おう」

「いったれ遙ー！」

まかせとけ！ と律の声援にグツと親指を立てて応えつつ、僕は問題集のページを捲って漣に出す問題を探す。お、これにしよう。

「じゃあ問題。図Aの名称を答えなさい」

「えーっと、図Aの名称図Aの名称——……って答えられるか  
アアアア！」

そんなツツコミと共に、バシンとテーブルを叩いて、漉しゃんがおつかない顔をしながら怒号を飛ばす。あらやだホント怖い。

「図Aって何だよ図Aって！ 図で説明するような問題を出すなよ！ 分かるワケねえだろそんなもんツ！」

「ちよつと今の聞いた遥さん？ あれだけ私らに偉そうな事言っておきながら、漉はこんな様ですわよ？」

「やゝよね。ホント信じられませんか？」

「じゃあそう言うお前らは答えられるのかよ！？」

「答えられるワケがない！」

「お・ま・え・ら・な」

あ。漉しゃんがこめかみに血管を浮かせながらプルプル震え出した。ヤバい。少しふざけ過ぎたかも。これはもしかしくなくても、MK5（マジでキレる5秒前）に間違いないですだ！！

「お前ら、ちゃんと真面目に勉強しろ——ッ！」

漉しゃんの魂からの叫び声が、耳鳴りを起こすほど部屋に響き渡った。

フェイドアウト  
溶暗。

そんなこんなでやってきた、ドキドキ 期末テスト答案返しの日。

「やった。前回と同じ、全教科満点だった」

「やったー！ 私も全教科満点だったッ！」

「ちょっと待て!？ 遙はともかく、どうして律まで満点を取れるんだよ！ 私でさえ平均90点台なのに！ こんなのおかしいだろうッ！」

## 第25曲〱バカとテストと問題集〱（後書き）

例によって漑しゃんの登場回でした。

ああもう、漑しゃんが好き過ぎて生きるのが辛いぜ。

## 第26曲　モザイクカケラ

夢。

夢を見ていた。

でも、それは単なる空想じみた夢ではなく。

過去の残滓をそのまま映し取っただけの、記憶の欠片。カケラ

大嫌いで好きだった、遥かに遠く——どこまでも儚い人の夢…

…。

「おーおー。お前があのかのクソ親父の隠し子かー。なんか、女の子にしか思えんくらい可愛らしい顔してんな」

「……………」

「無反応かい。まあいいや、今はクーデレ萌えって事で。ひひひ。デレてくれる日が待ち遠しい限りだね」

「……………」

「まーた無反応かい。見るからに陰気な奴め。で？　あなたのお名前なんてーの？」

「……………」

「ほう。●●●かー。良い名前じゃねえか。明るいついか、どことなく前向きな感じで。惜しむらくは、その本人が梅雨みたいにジメジメした奴だって事だな。名は体を表さないという生きた見本みたい奴だな、お前。かはは」

「……………」

「って無反応かい！」

「はろはろ。あなたの愛するお姉ちゃんのお出ましですよ。きやるーん」

「……おはようございます」

「反応薄っ！ お前ってホントに暗いやっちゃんー。なに？ 悲劇の主人公ぶつての？ このシエイクスピア作品だよ。ハムレットですかこのヤロー。どうせなら戯言遣いとか嘘つきみーくんみたいな面白可笑しい主人公になりやがれてーの」

「……オレが楽しく生きてようがつまらなく生きてようが、あなたには関係のない事ですよ。それにどうしても生きていたいほど今の人生に執着は無いですし、いつ死んでも未練は無いです」

「はん。生意気言いやがって。つか、お前今生きてんだろ？ だつたらしつかり生きて、それから死ねや。なんて、これはミサトさんの言葉なんけどもな！ わっはっはっ！」

「……………」

「なぬ！？ お前、エヴァを知らんのか！？ この罰当たりもんめ！ いいか？ エヴァの素晴らしさはな——」

「ちゃーす。お前の理想の女性像、全ての野郎どもが羨むナイスボデーをしたお姉ちゃんのお出ましですわよ。トゥットウルー」

「あんたのその毎度同じみな登場にはいい加減飽き飽きしているんだが……」

「毎度同じみとは聞き捨てならんな。毎回バリエーション豊かな登場してんだろっが」

「大して変わらねえよ」

「ツツコミ乙。とか言いつつ、理想の女性像という部分は否定しないのな。うひひ、このクーデレから轉身したツンデレさんめ。このこの」

「……うるせえ。いちいち頬を指でつつくな」

「それにしてもこの弟、照れ屋である。そんな事より、なにをさっ

きから熱心に読んでんの？」

「……参考書」

「うわ、いかにもつまんねー小学生。せめてラノベ読もうぜラノベ。特に『戯言シリーズ』と『嘘つきみーくんと壊れたまーちゃん』は必須だぞ。つか、お姉様の聖典ねこれ」

「ミステリーは興味ない」

「ったくしゃあねえ奴だな。じゃあお姉様秘蔵の小説、この『ダ・カーポ』のノベル版をだな——」

「小学生にエロゲー原作小説を読ませてんじゃねーよ」

「はあっ……はあっ……」

「……はっ。なーにびっくりしてんだよ。あまりにも意外過ぎて言葉も出ないってか？」

「う、あ……あ……」

「……っ。へへ、お前をこのまま見過ごすワケねえだろうがバーカ。すぺしゃるバーカ」

「……う、あ、——ち……血が……血が——……ッ」

「しっかり聞けよ愚弟。きっとこれがお前に捧げられる、最後の言葉になるだろうからな——」

「あ……あ……」

「いいか。お前の——お前の姉ちゃんは、どんな時もどんな所でも、ずっとお前を——……」

## 第26曲　モザイクカケラ

大型自動車の稼動音が聞こえる。なんて回りくどい言い方をせずとも、バスの音だと脳が処理する。そばに何かしらの鳥類でもいる

のか、バスの音と共に混じって鳴き声が鼓膜に響いてきた。

まだ意識が完全覚醒していない為か、周囲の音がぼんやりとしか届かない。程良く気持ちよいハズの微睡みが、何故か今は息苦しく感じる。夢の中で姉さんが微笑んでいるだけで、心が激しく壊れそうで――

「おい遙ー。起きろー。もうじき着くぞー」

バスに揺られて夢心地の中にいた僕の頬を、誰かがつついて声を掛けてきた。その声に、ようやく意識が外界へと向かう。

「あー……。漣ちゃん……？」

「やっと起きたか。なんだ？ 昨日、徹夜でもしていたのか？」

うつすら目を開けたその先に、少し呆れた表情を浮かべた漣の顔が、僕の顔を覗くような姿勢で視界に入ってきた。

未だぼんやりとした思考のまま、ふとすぐそばの窓を見ると、蒼々とした海原が眼前に広がっていた。その風景を見て、ようやく自分の置かれた現状に合点がいく。

「あー、そっか。これからみんなで海に行く途中なんだっけ……」

「なんだ遙ー。まだ寝ぼけてんのか？」

そんな小馬鹿にしたような言葉と共に、前の座席にいた律がひよこつと背もたれを越えて顔を出してきた。しかもいつも増して元氣潑刺とした表情で。目の前に海が広がっているせいか、いつもより若干テンションが高いせいなのかもしれない。

このいつでもテンションが高い律がこうしてさらに気分を上乘せしているのだから、結構ウザい感じに仕上がっていた。普段うるさい奴が祭り事となると余計うるさくなる現象と同一だ。さすがにウザいと口に出したりはしないが、しかし耳を貫いて頭にもキンと響くので、少しは声のボリュームを下げてもらいたいところである。

「ちゃんと目を覚ませー。私らがこれから行くのは海なんだぞー。地獄に逝くワケじゃねえんだからな？」

「ふ、不吉な事を言うな律！ このバスを事故らせたいのか！」

「あはは。冗談だよ漣」

怖がりの漣の事だから、今の律の言葉でこのバスが大破して血みどろになる惨劇でも想像したのだろう——涙目で相も変わらずハイテンションな律に吠えていた。

それにしても、

地獄。

地獄、か——。

「ある意味、僕は地獄に逝くべきなのかもしれないけど……」

「……？ 何か言ったか遥？」

誰にも聞かれないよう囁くように呟いた独り言に、漣が耳聴く訊き返してきた。そんな漣に、「何でもないよー」と笑みを偽って返す。

「単なるつまらない戯言なのですじゃ」

「ざ、戯言？ なんか知らんが、お前その言葉好きだよなー」

好きと言つか、姉さんがある小説の主人公を真似ていた口癖を、僕が真似てるだけなんだけども。

あるいは、僕という存在そのものが、戯言なのかもしれないけれども。

「わー！ すっごく綺麗な海〜！ 早く泳ぎたい！」

「ちょ、唯先輩！ あまりはしゃがないで下さい！ 他の乗客の人に迷惑になりますから〜！」

と、後ろの座席の方で、嬉々とした声と恥ずかしそうに注意する声が聞こえてきた。言わずもがな、唯と梓だ。

「楽しみだね海〜。早く泳ぎたい！」

「もう。遊びに行くんじゃないやありませんからね？ あくまでもこれは軽音部の合宿で——」

「まあまあ梓ちゃん。海も練習も同じくらい楽しみましょ？」

梓の席から一つ分離れた隣りの座席——のほほんと微笑みを浮かべているムギが、いつもと変わらないお嬢様然とした口調でそう言った。

「ムギの言う通りだぞ梓。せっかくの海で合宿なんだ。海も練習も

両方楽しまないと損だぜ？」

「うー。そりゃそうなんでしょうけど……」

律の言葉に、梓が不服顔で言葉を濁す。梓的には、練習の方に身を入りたいのだろう。なんと言うか、つくづく生真面目なよい子ちゃんである。

「というか、さつきから遥先輩静かですよ。こういったイベントには誰よりも進んではしゃぎそうなのに……」

「そういえばそうだねー。はるちゃん、お腹でも減ったの？」

唯じゃあるまいし、と漑が唯の言葉に苦笑を浮かべる。

「でも梓の言う通り、さつきから不気味なくらい静かだよなお前。心なしか、顔色も悪い気がするが……」

「……ん。ちよつとバス酔いしちゃったみたい。大丈夫、少し寝てたらすぐ治るだろうから」

「そ、そうか。じゃあ私達はなるべく静かにしてた方がよいな……」

……。あ、そうだ。酔い止め飲むか？ 私、今持つてるけど……」

「なんか漑、いつになく甲斐甲斐しいな。あれか？ 遥相手に、まさかの母性愛に目覚めたちゃったのか？ んまあ、漑お母さんって優しい」

「う、うるさい！ うるさいよ律！ 病人がいるんだから静かにしてろー！」

「あ、あの、漑先輩の方も少し声が大きいかと……」

と、ギアアギアアと僕のそばで騒ぎ立てる漑達をよそに、僕は独り窓の向こうへと再び視線をやる。

太陽の光に反射して、煌びやかに波打つ海。そのすぐ上では、群れをなしているカモメが翼を羽ばたかせて空を泳いでいる。

瞳に写る景色をぼんやりと見つめながら、僕は今度こそ誰にも聞こえない声量でボソツと呟く。

「何で今になって、あんな夢を見るかな……」

それは、心の奥底に閉まっておいたハズの記憶<sup>トラウマ</sup>。

どれだけ贖おうとも、どれだけ償うとも。

どれだけ滅ぼそうとも——決して消える事のない僕の罪。

それは姉さんが僕に施した、永遠の呪縛か。

僕自身が罪の重さに耐えかねて、己にかけた過去に対する戒めなのか。

それとも——。

「僕なんかが、みんなと一緒に海を楽しむ資格なんて無いって言い  
たかったのかな……」

分かってる。

ちゃんと分かってるよ、姉さん。

そんなつもりなんて最初からなかったから。

“オレ”の人生は、既にあの時から終わっているから。

この気持ちも。

思い出も。

友達も。

幸せも。

何もかも全て、姉さんのものだから。  
だから、僕は。

僕は——。

## 第26曲〱モザイクカケラ〱（後書き）

今回からいよいよ夏の合宿編の始まりです。

ここまで来るのに、だいぶ遠回りしちゃったな……。

第27曲　天空の花嫁、そして伝説へ（　本編とは一切関係ございません）

「ねえムギちゃん。ムギちゃんの別荘ってまだなの？」

「あと十分くらい歩けば着くから、もう少しだけ頑張って唯ちゃん  
「ていうか、まだバス停から十分くらいしか歩いていないじゃない  
ですか。もう疲れちゃったんですか？」

「おいおい。そんな調子で今度の学祭やっていけんのか？　ライ  
ブは結構体力使うし、そんなんじやすぐバテちまうぞ」

「全くもってりったんの言う通りですな。少しは僕達を見習え唯よ  
！」

「私に荷物を預けて一的人身軽なままのお前が言うなア！　そもそも  
遥！　お前具合が悪かったんじやなかったのか！？」

「ええ。あまりに具体が悪いものだから、これはもしやって思っ  
て産婦人科に行ってみたなら、3週目ですって……（ポツ）」

「嘔吐け！　今作ったばっかの設定だろそれ！」

「あなたと僕の子よ」

「身に覚えが全くないわ！」

「男の子かしら？　女の子かしら？　それとも小野妹子かしら？」

「遣隋使か！　お腹から昔の偉人を出産する気かお前は！」

「どっちにしても、名前は“ああああ”にしましょうね」

「適当に付けた勇者みたいな名前になってんじやねえか！　もうそ  
れ、ひどいなんてレベルじゃねえぞ！？」

「じゃあ、澪お父さんはなんて名前がいいの？」

「え？　いや急に言われても……。ちよつと待ってくれ。え〜つと、  
私と遥の子供だから――……。ってそういう問題じゃねーッ  
！！」

第27曲　天空の花嫁、そして伝説へ（　本編とは一切関係ございません）

「いい加減にしろよ遙！　お前がバスの中で具合悪そうにしていたから、こうして遙の分まで荷物を持ってやってんだぞ！　元気になったんなら、さっさと自分の荷物持ちやがれ！」

「きゃあ！？　暴力はやめてよお！　DVD！　DVD！」

「それを言うならDVだ！　家庭内暴力家庭内ってなんだよ！　そもそも家庭内ですらねえよ！」

と息をぜえぜえ切らせながら、肩を怒らせて憤慨する澪しゃん。この暑さと僕の分の荷物まで背負っているせいか、玉のような汗をダラダラと流していた。ツツコミ共々、本当にご苦勞様です。

見渡す限り鬱蒼とした森林と、おそらくムギの別荘へと続いているのである。切り開かれた一本道を、澪と二人並んで歩く。ちんたらと談笑（楽しんでるのは主に僕だけだが）しながら歩いていたせいか、先を歩く律達にだいぶ後を越されていた。

まあ、一応ここからでもムギの別荘らしき屋根が見えるし、互いに迷うような事はないであろう。どっちにしても目的地も同じだしなら、無理に先を急いで慌てる必要も無い。今見えている屋根が幻だったのなら話は別だが。うむ、澪しゃんに話したらガクブルしそうな内容だ。なんかオラ、ワクワクしてきたぞ！

とは言え、今にもへたり込んでしまいそうな澪しゃんに、そんなホラーを話す気にはさすがにならなかった。おかげさまでこうして元気を取り戻せたのは事実だし、恩を仇で返すような真似は僕としても本位ではない。

そんなワケで、楽ではあったけれど、そろそろ荷物を返してもらうとしようか。

「やれやれ。これしきの労働でバテてしまうとは情けない」

「それが荷物を持ってもらった奴のセリフか！？　ちょっとは私に感謝したらどうなんだよ！」

「ありがとうございますこのヤローツ！　お礼に肩でもお揉みしましょうかゴルァ！」

「何でキレながらなんだよ！　ワケ分からんわ！」

「すかさずツツコミを入れてくれる澪しゃん。いついかなる時もツツコミを忘れない澪しゃんは、本当にツツコミキャラの鑑だと思います。あんた今、最高に輝いてるよ！」

「とまあ、冗談はさておき——」

言いながらヒョイと澪の手から僕の荷物を受け取り、今までとは打って変わり、至って真摯な気持ちを込めて言葉を紡ぐ。

「澪のおかげでだいぶ気分が良くなったよ。本当にありがとう」

正直言つと、まだ若干胸ヤケが残っているのだが、けれどもそれも、こうして普通に会話できるくらいにはいくらか回復している。

だから僕の言葉に多少の誤魔化しはあれど、感謝している気持ちには嘘偽りはない。

それはきつと、澪と話していて気が紛れたからだろうと思う。

少なくとも、こうやって誰かを話している間は、姉さんの事を思い出さずに済むから……。

などと、人が珍しく真面目に礼を述べたにも関わらず、一方の澪しゃんはと言えば、ポカーンと信じられない光景でも見たような顔で放心していた。何なのだ、その微妙に失礼な反応は。

「返事がない。ただの　しかばねの　ようだ」

「ちゃんと生きとるわ！　勝手に殺すな！」

「いや、急に澪しゃんが黙り込んだからさ。どうかしたん？」

「……な、何でもねえよ。ほら、元気になったんならさっさと行くぞ。律達も待つてるだろうしな」

「……？　ブラジャー」

何故だかいきなり踵を返して先を急ごうと前を先行する澪に首を傾げつつ、親鳥の後を追う雛のごとく澪の後ろを歩く。

途中で、「……ビツクリした。遙があんな見た事もない笑顔で礼を言うなんて思わなかった」とか何とか遷がボソボソ呟いたような気がしたが、訊ねたところで言いそうにない雰囲気だったので、そのまま黙って歩き続けた。

『おおおおお！』

途中で律達と合流した後、ようやく目的地であるムギの別荘へとたどり着いた僕達は、眼前にそびえ建つ豪邸を見てそんな感嘆の声を上げた（ムギを除く）。

僕の背丈よりも高い石垣。色彩豊かな草花や松の木などが植えられている広い庭園。ペンキ剥がれの無い綺麗な壁。もう見るからに金持ちの所有地と言った造りをした別荘が、今まさに僕達の目の前に存在していた。こりゃあ、その辺の庶民では手を伸ばしても届きそうにない物件でございますなー。いやホント真面目な話。

「こりゃまた、前回より一段とすげえなー」

「ん？ 前回よりって、去年の合宿で使った別荘じゃないのこれ？」

「いや、今回のとはまた違うんだよ。前に使った別荘より良いヤツが使えるそうだからって、ムギがこっちの方を勧めてくれたんだよ」

私としては前の方の別荘でも全然構わなかったんだけどな——と僕の質問に苦笑を交えて返答する律。まあ僕ら庶民にしてみれば、これより劣る別荘でも贅沢なくらいだしな。むしろこんな凄い別荘を本当に使わせてもらえていいのだろうかと恐縮してしまうものすらあるし。これも一般庶民の悲しい性さがですな。

「ねえねえムギちゃん。これが去年言ってた借りられなかった別荘なの？」

「ごめんなさい唯ちゃん。その別荘は今年もダメだったの。多少狭いと思うけど……我慢してね？」

これよりまだ上があるんかい！　と思っただのは決して僕だけではないハズ。

「そっかー。じゃあ人型にトランスフォーム出来るスイッチならあるかな？」

どこのロボットアニメですか、と呆れた目で唯にツッコむ梓。

「ごめんなさいね。トランスフォームとかも無理なの。代わりに自爆スイッチとかならあるんだけど……」

『自爆スイッチならあるの！？』

これにはさすがに揃って驚愕の声を上げる一同（例によってムギを除く）。

うつむ。まさか自爆スイッチなんてアニメか漫画ぐらいにしか縁のないような装置が、まさか現実に存在していたとは。やっぱ金持ちともなるとホームセキュリティも万全なんだなあ、と一人適当な解釈で納得してみた。うん、我ながら無理があり過ぎるな。ここはムギを代行して「嘘だけど」と場を流しておくしよう。

「と、とりあえず中に入るとするか。ムギ、鍵はちゃんと持って来てるんだよね？」

「ええ」と律の問いに笑顔で頷いて、ポケットから取り出した別荘の鍵を掲げて見せるムギ。どうやら皆さん、自爆スイッチ云々の話は聞かなかった事にするらしい。まあ、賢明な判断ではある。

「よし。じゃあ一旦みんな各自の部屋に荷物を置いてから、またリビングに集合な」

『了解』

律の言葉に、僕を含む軽音部一同がサムズアップして応えた。

## 第28曲 エロゲエの世界よ、ようこそ！

「みんな揃ってるかー？」

『揃ってまーす！』

「荷物はちゃんと自分の部屋に置いてきたかー？」

『置いてきましたー！』

「誰か体調の悪い奴はいないかー？」

「りっちゃん隊長！ さっきから私のお腹がグーグー不気味に鳴ってるであります！ これは体調不良の前兆でありますでしょうか！」

「それは単に腹が減ってるだけだ唯ー。他にいないかー？」

「りっちゃん大腸！」

「濁点を付けるなー。普通に隊長と呼べ遥ー。で、何だー？」

「イエッサ、りっちゃん隊長！ 僕の右手に封印されている邪神が今にも復活せんとばかりに疼いているのですが、どうすればこの右手を静める事が出来るでありますでしょうか！」

「2chでスレでも立てて相談しろー。すぐに『厨二病乙』と診断が下るハズだー。他にいないかー？」

「りっちゃん小腸！」

「誰か他にいないかー？」

「無視でありますか！？ 僕という迷える子羊を黙殺でありますか隊長オオ！？」

「ホントに誰もいないのかー？ ちょっとした事でも他愛ない悩みでも何でも構わないんだぞー」

「えっと……じゃあハイ」

「おお溼。どうした？ どっか体調でも悪いのかー？」

「いや体調が悪いというか、一部分が悪いというか……。せ、先月よりその……ウエストが太くなってだな。それでいつもスリムな律

に指南というか助言を貰いたくて――」

「狼は生きる。豚は死ぬ――」

「にべもねえ！ あと遠回しに『死ぬ』って言われなかったか私！？」

「誰も体調悪い奴はいないな――。よし、それじゃあ――」

『それじゃあ……？』

「遊び倒すぞお前ら――ッ！――」

第28曲　エロゲエの世界よ、ようこそ――

「うおおおい――！ ちょっと待てエエエエ――！」

「わーい！」と子供みたく両手を上げて海へと突撃しようとした律を寸前で捕まえた漣が、絶対逃がすまいと律の右腕を力強く握りつつ、柳眉を立てて大喝する。

「遊ぶのは練習してから！ 何の為にここに来たと思ってんだよ！」

「えー。せつかくの海なんだぞ？ 遊ばなきゃ損じゃーん」

「りっちゃんの言う通りだよ！ 海に来たからにはまず泳がないと――！」

「だから本来の目的を忘れるなって私は――って唯！？ いつの間にか水着に着替えたんだ！？」

漣の言う通り、文句を垂れる律のそばで賛同の声を上げた唯が、いつの間にやら可愛いらしいビキニ姿へと変わっていた。あらホントかわ唯。これはしかと眼に焼き付けなければ！

「海はあくまでもオマケ！ 私達は軽音部の合宿に来てるんだぞ！ どう考えても練習する方が大事だろうが――！」

「えー。別にいいじゃんかよ漣――」

「遊びたーい！」

ブーブーと不満顔で反目する律と唯に「お前らって奴は……」と

額を押さえて嘆息混じりに呟く。もう呆れて言葉も無いと言った風な感じだ。つくづく澪は苦労性だなー。

「まあ待ておまいら。僕に良い案がある」

話が一向に進まない拮抗とした状態を見て、スッと挙手する僕。

同時に、皆の視線が僕に集まる。皆の元気が僕に集まったら、それは元氣玉だ。何の話やねん。

「何だ遙。くだらない事だったら、まずお前という幻想をブツ壊すぞ？」

「え、ファンタジーな存在だったの僕？」

消えちゃうの？　僕、消えちゃうの？　澪さんの幻想殺し《イマジンプレイカー》で“そげぶ”されちゃうの？

「そうじゃなくて、真面目な話をしようとしてたんだよって、ハル力はハル力は心外な気持ちで憤慨してみたり！」

「打ち止め《ラストオーダー》かお前は」

と、ジト目でツッコむ澪さん。いや、先にネタを振ったのはアంతの方ですよん。

「それより話を戻すけど、この際多数決で決めてみたら？」

「お。遙にしてはまともな提案だな」

「……一言余計だよ澪さん」

僕だって、たまにはまともな事だって言えるさ！　三年に一回くらいは。サッカーワールドカップが開催するくらいの確率じゃねえか。

「それじゃ早速多数決にしよう。勿論私は練習が先な」

「私も練習がいいですっ」

と、いの一番に澪に賛同の声を上げる梓。ま、これは予想通りだな。さすがは軽音部が誇る良心コンビ。

「断固として遊ぶ！」

と、こちらもほぼ予想通り、声高に反対派へと回る唯と律。さすがは軽音部が誇る悪心コンビ。

「むー。2対2かー。まあでも、こっちの勝ちは見えたな。だって

こつちにはムギという信頼出来る味方が――」

「私も遊びたいです」

「まさかの裏切り!？」

満面の笑みで言ったムギの『遊びたい』発言に、澪しゃんが驚愕を露わに声を張る。うん、こればかりは僕も予想外……でもないか。ムギって、こんなキャラだったような気もするしな。見た目に反して無邪気と言うか。今でも玩具を目の前にした子供もみたいに瞳を爛々とさせているし。そんなに海で遊びたいのか、ムギよ。

いや、百合好きのムギの事だから、水着姿の唯達がキャツキヤウフフしている様子を堪能したいだけなのかもしれない。真実味が濃過ぎて戯言が入る余地すらないぜ。

「あれ?　ところで遥先輩は数に入れなくていいんですか?　遥先輩も一応メンバーに入っているのに……」

「僕はいいいよ。あくまで炊事係として来させてもらっただけだし」  
ていうか、本来ならば部外者であるところの僕が、軽音部の問題に口を出すなんて、それこそ野暮ってなもんだ。海で遊ぼうが練習しようが、僕に選択権などは無い。みんなが海で遊ぶなら僕も付いてくし、練習するなら、僕はその間に夕飯の準備でもするだけだ。

僕がそう説明すると梓は「別にそこまで下手に出なくてもいいよ　うな気が……」と複雑そうな苦笑を浮かべてそう返してきた。きっと僕の事を気に掛けている言葉なのだろうけど、梓こそ別にそこまで気を使わなくていいのに。

「……仕方ない。何はともあれ、こうして多数決で唯達が勝ってしまっただけだし、海に行く準備でもするか」

私としてはかなり不本意なんだがな、と溜め息混じりに呟いた後、自分の部屋へと向かう澪しゃん。それに連鎖反応するように「じゃあ私も」と律を始めたした全員（何故か既に水着を装着済みの唯も含む）が水着へと着替えるべく自室を向かって行った。

みんなが自室へと入って行くのを見届けてから、一人思考に耽る。ふむ。そんじゃあ僕も水着に着替えるのでしょうかね。ぶっちゃけ

て言つと、僕も唯や律と同じく海で遊びたい気分だったし。こつちとしても海に行けて好都合だ。

そう結論付けて自分の部屋へと向かおうとした直後、不意に誰かに肩を掴まれた。皆一様にして自室に向かったハズなのに一体誰が、すわ怨霊かと粟立つ心境で背後を振り返ってみると、

「……ムギ？」

「あの……ちよつといい、かしら？」

自室からわざわざ僕の方へと舞い戻つて来たのだろうか——視界から去つたハズのムギが、頬を赤らめながら上目遣いで僕を見ていた。

……何なんだこれ？ 相手が相手なだけに、微妙に反応に困る状況なのだが。

「あー。えつと……何か用か？」

「いえ。大した事じゃあ——あ、でも、ひい君にしてみれば大した事なのかも……」

何やら言い難そうにモジモジと体をくねらせて小声で呟くムギさん。だから何なんだ、その男の前でトイレと言い出せずにいる昭和初期の乙女みたいな反応は。

どうしていいか分からず、しばらく訝しげにじーっと見ていると「あ。ご、ごめんなさい！ ひい君の事が急に心配になっちゃって……」と僕の視線に気付いてムギが頭を下げる。

「いや別に構わないけど……。で、心配って何が？」

「え、えつとね。私達、今から海に入る、じゃない？」

何やら指をツンツンさせながら口を開くムギに「まあ、うん」ととりあえず頷いて見せる僕。

「そうすると水着に着替えなくちゃいけないワケで、そうになると、その……ひい君が大変な事になると言つか、すごく、エ、エツチな感じになると言つか……！」

今度は何故か頬を真っ赤に上気させて語気を荒げるムギに「んん？」と眉をひそめて首を傾げてみせる僕。

何が言いたいのかさっぱり分からんが、ひとまず要約すると、水着に着替えて皆と海に行くと、とてもエッチな出来事が起こるという解釈でいいのだろうか？

「……ふむ」

ムギ曰わく、とてもエッチな出来事とやらを試しに想像してみた。

水着に着替えて、いざ皆と海へ↓夏だ！ 海だ！ 水着だー！↓  
照りつく太陽、波打つ海、たわなに実ったおっぱい！↓ビーチバレー、スイカ割り、水に濡れて揺れるおっぱい！↓そして、海といえは……？↓皆様お待ちかね、T O L O V Eの発生（ポロリもあるよ！）↓これなんてエロゲ？

「……大丈夫だ、問題ない（キリリッ）」

「問題ないの！？」

僕の言葉に、目を丸くして声を上げるムギ。何をそんなにビックリしているのか分からんが、男としては一度は夢見る最高のシチュエーションじゃないか。問題なんて何もありはしない。

「ほ、本当に大丈夫なの？ だってほら、ひい君は男の子……だし。水着を着替えると、その、男の子の一部分が目立つワケで。色々と問題があるように思えてならないんだけど……」

目線を右へ左へと泳がせて、困ってるんだか恥ずかしがってんだが釈然としない表情を浮かべてボソボソと呟くムギ。以前としてはつきりとしなないたどたどしい口調だったが、そこまで言われてようやく僕もハッと真意が掴めた。

ああ、そっか。ムギが言いたいの——

「それなら大丈夫。バッチリ対策は取ってあるから」

「対策って……？」

キョトンとした顔で訊ねてきたムギに、

「まあ、見てれば分かるよ」

と意味深な言葉を残して、僕は自室へと戻った。



第28曲『エロゲエの世界よ、ようこそ！』（後書き）

久しぶりにムギのキャラが立った回でした。

というか、遥とムギの関係上、どうにも出せにくいですよー……  
（個人的にもすごく気に入ってる女の子なのに）。

今後は、もう少し出番が増えるよう頑張りますー！。

第29曲ゝはがない(この小説はエロ成分が足りないの略)ゝ(前書き)

今回はとあるスペシャルゲストにお越しいただきました。

第29曲はがない（この小説はエロ成分が足りないの略）

「うーみーだー！！」

「こら唯に律！ 海に行く前にまず準備体操！ 泳いでる最中に足つっても知らないぞ！」

「あは。何だか澪先輩、すっかりみんなのお母さんといった感じですねー」

「……奴らの保護者的存在という意味では、割りと的を射た呼称ではあるかもな。それはそれとして、遥とムギはどうしたんだ？ さつきから姿が見えないんだが……」

「ああ。遥先輩とムギ先輩なら、少し着替えるのに時間が掛かるから先に行っていてくれって言ってましたよ」

「そっか。まあ遥がいない方が、こっちとして平和な時間を少しでも過ごせる——」

「澪ちゃん見て見てー！ 今さつき浜辺でイカ娘ちゃん捕まえちゃったー！」

「ぎゃー！ なにするでゲソ！ 離さなイカー！」

「まさかの逆侵略！？ って、どこからそんなの拾ってきたんだよ！？ 今すぐ元いた場所に返してこいッ！」

「おい澪。こっちにラブプラスとか言う名前のポケモンがいたから、すかさず網でゲットしちゃったぜー！」

「それを言うならラブラスだ！ そしてゲットするなら、せめてモンスターボールを使えよ！ どこそそのロケット団かお前は！！」

「遥先輩がいなくても、騒々しいのは変わらないみたいですね……」

第29曲はがない（この小説にはエロ成分が足りないの略）

「……何やってんの漣？」

唯達より遅れて水着へと着替えを済ませて、急いでムギと一緒に海へ向かってみると、何故かorzみたいなポーズを取ってうなだれている漣さんと出くわした。

第一村人発見、もとい第一変人発見！　みたいな。

つか、何だこれ？　状況がさっぱり把握できないんだが。まあいいや。なんか隙だらけだし、これ幸いと漣さんのはちきれんばかりのおっぱいを揉「どさくさに紛れて何しとんじゃ！」めませんでした。チッ！　あともうちよつとところで避けられてしまった。反射神経の良い奴め！

「まったく。危うくともないクロスオーバーを実現してしまうところだった……」

何やらワケワカメな事を嘆息混じりに呟いて、漣がゆっくりと起き上がる。同時に、漣のおっぱいもたぶんたぶん揺れる。何と言うか、うん。おっぱいバンザイ！

にしても、こうして改めて間近で見ると、ホント漣さんってグラビアアイドル並みにグラマラスな身体してるよな。黒のビキニ姿がまた艶やかな色香を惹き立ててよく似合っているし。センス良いな漣さん。

「……う。あんまりジロジロ見るなよ。女同士とは言っても、結構恥ずかしいんだからな」

僕の熱視線に当てられたせいか、漣が頬をほんのり朱に染めながら、胸元を包むように肩腕で隠した。むう。せつかくの絶景だったのに。若干僕に対して警戒しているせいもあるのかもしれない。

「それはそれとして……」

と、今度は逆に僕の方をじーっと凝視する漣。何だか品定めしているような、そんな真剣な眼差しだ。

僕の水着姿を。

そりやもう、舐めるようにじーっと。例えるなら『遙たんペロペロ!』と言わんばかりに。自分で想像しておいて、そんな変態じみた発言する澪しゃんに鳥肌が立ってしまった。なにこれ怖い。

閑話休題。本題に戻ろうか。

はてさて。男である僕が性別を偽っている以上、無論水着だつて男子用というワケにもいかない。そんな物を着た日には、僕の性別がバレ、すぐさま澪達に通報される事受け合いだろう。それだけは何をしてでも防がなければならない。

そして試行錯誤した結果、僕が選んだのは――  
セパレートの水着とパレオ。

それが今回、男である僕が海対策として選んだ水着だった

これならば、当初ムギが懸念していた男の子特有の問題――股関節部分の膨らみは隠せるし、我ながら見た目はどう見ても胸の無い女の子にしか見えないという自負もある。

さて。澪しゃんは僕のこの姿を見て、どう判断を下すのか……。

「……負けた」

「は？」

何故か腹回りを押さえて表情を影らせる澪しゃん。何か知らんが、何やら澪しゃんに勝ってしまったらしい。一体何にだ。

「つーか、お前何でそんなにスリムなんだよ! いつも唯と同じくらい部室でお菓子ばっか食ってるくせに――!」

しかもどこぞのモデルみたいにめちゃくちゃスレンダーな体型だし! と僕の腹を指差して、涙目で澪が訴えてきた。ああ、負けたってそういう意味か。

「いや、別に気にするほどじゃなくね? 澪しゃんだって、パツと見グラマーで男ウケ良さそうだし」

「うう」。私はどちらかと言うと、遥みたいにくびれた腰とか細長い綺麗な手足の方がいいんだよ」

それは男としてどうなんだろう。世間一般では僕みたいな奴を男の娘と呼ぶのだろうけど、生憎と心まで娘になった覚えはない。

まあ現在進行型で女子高に忍び込んでいる僕が言えたセリフじゃないか。そのおかげで、こうして澪ちゃんにも男とバレずに済んでるワケだし。盗人猛々しいとは、こういう時に使う言葉なのかもしれない。

「な？ 言っただろ？ 何も問題ないって」

ひとまず澪ちゃんのお墨付き（？）も貰えたところで、それまでずっと僕の横で澪とのやり取りを静観していたムギ（ちなみに、澪とは対象的に白のビキニ姿）に、そっと耳元へと寄って囁いた。補足しておく、今澪ちゃんは「もっと合宿前に減量すべきだった……」と後悔先に立たないような事を呟いて、再びorzポーズを取っていた。つまりこの瞬間、僕達の動向に全く気づかれていない。

「え？ え、ええ。そうね。私の杞憂で済んで良かったわ」

と言った割には、複雑そうな曖昧な笑みを浮かべて言葉を濁すムギ。何か他に心配事でもあるのだろうか。

「代わりに、女としてのプライドがズタズタにされちゃったけれども……」

何かムギがあさつての方向を向いて腹を撫でながら細く呟いたような気がしたが、追求したら藪蛇な感じがしたのでスルーしておいた。危ない事には手も足も口も出さない主義なのだ。

「おい。はるちゃんムギちゃん澪ちゃん。早くこっちに来て遊ぼうよッ」

それまで楽しそうに律と梓とで浅瀬の中ボール遊びをしていた唯が、手をブンブン振って僕達に声を掛けてきた。存分に海を堪能してますと言わんばかりの輝いた満面の笑顔がとても眩しい。

「ほら、澪ちゃん。唯達が呼んでるよ」

未だ砂浜でorz状態でいる澪の胸にポンと手を置き、言葉を繋げる。

「いつまでもそうして落ち込んでないで、せっかくの海なんだから僕達も思いつきはじけちゃおうぜ」

「……ああ。それもそうだな——ってどこを触つとんじゃおのれは

「!!」

瞬時にパシンと払われる僕の手。やった！ 今度こそナチュラルに漣ちゃんのおっぱいに触れてやったぜ！

「なんで胸に手を置くんだよ！ 普通こついう場合、肩に手を置いて慰めるもんだろっ！？」

「愚か者めが！ 僕に普通だなんて考えがあると思うてか！」

「くっ。まるで否定できない……！」

と、奥歯を噛んで悔しがって見せる漣ちゃん。僕が漣ちゃんによって完全に変態認定された劇的瞬間でもあった。別に今更な事ですかそうですか。

「ホントに油断も隙も無い奴め！ 至少くらい真っ当な生き方はできんのかお前は！」

「後ろ向きに検討させてもらいます」

「絶望的なまでに何の期待も見いだせない返答の仕方なのだが！？ セクハラした事に対する罪の意識すらないのかよ！」

「ごめんごめん。代わりと言っちゃなんだけど、お詫びに全裸になつてよ」

「まあ、それなら許……さねえよ！ なんで私が詫びを入れる側なんだよ！ どつちかと遥が全裸になる側だろっ！？」

「ナ、ナンダッテー！」

「驚くほどの白々しさで仰け反るな！」

某洗濯用洗剤のCMみたいなツッコミ方だった。

「漣ちゃん、ツッコミお疲れ様。いつも大変ね」

まだ海で遊んでもいない内に憔悴している漣に、ムギがそばに寄って労いの言葉を掛ける。さっきまで僕と漣のやり取りをニコニコ顔で見物していたので、説得力は皆無に近いが。

「そう思うなら、ちよつとはムギもツッコミ手伝ってくれよ……」

「私にはちよつと荷が重いわ」

と苦笑を交えながら返すムギ。というか、唯と似たようなボケ体質であるムギでは、その大役はいま一つこなせないだろう。やっぱ

ツッコミ役は澁しやんでないと！（あずにやんでも一応可）

「お前ら早く来いよ。日が暮れちまうぞ」

「海水が冷たくて気持ちいいですよ」

なかなか来ない僕達に痺れを切らしたのか、今度は律と梓が海の中で声を張って手招きしてきた。あれほど練習にこだわっていた梓も、何だかんだで海を満喫しているようだった。楽しそうで何よりだ。

「ほらほら澁しやん。早く海に入ろうぜ。僕達の闘いはまだ始まったばかりだ！」

「打ち切りになった少年漫画のラストみたいな事言うなよ！ 色んな意味で不吉過ぎるだろうがッ！」

「ふふつ。海、楽しみね」

と、三者三様に声を掛け合いながら、僕達は波打つ海へ向かって一斉に駆け出した。

第29曲はがない（この小説はエロ成分が足りないの略）（後書き）

そんなワケで、イカちゃんとかラブさんという白昼夢のようなスペシヤルゲストの登場でした。ナ、ナンダッター！？（語尾→）

ちなみに、今後イカちゃん達の登場予定は一切ありません。あしからず。ナ、ナンダッター！？（語尾←）

### 第30曲　カレーなる一族

「いや、海すげー楽しかったな。もうこれでこの夏は何も思い残す事は無いな」

「おいこら律！ 本来の目的を忘れるな！ 約束通り、この後はちゃんと練習してもらうからな！」

「ちえー。分かったよ漣。まあムギが演奏に必要な物は全部用意してくれたみたいだし、その辺は期待してもいいかもな」

「ええ。全部新品だから少しでも扱いに苦労するかもしれないけれど、喜んでもらえたら嬉しいわ」

「すごい！ 全部新品だなんて、さすがはムギちゃん！ お札を燃やして灯り代わりに使うのも躊躇いが無さそうくらいのお金持ちなんだね！」

「明治時代の成金じゃないんですから……。ところで、遥先輩は私達が演奏している間は どうするんですか？ 必然的に遥先輩だけが独りぼっちになってしまいますけど……」

「ああ。その間は夕飯の準備でもしてるから、僕の心配ならいらないよ。夕暮れ前でちょうど調理するのは良い時間だし」

「はるちゃんの作ったご飯か。すごく楽しみ。よく学校ではるちゃんのお弁当をもらって食べてるけど、すごい美味しいんだよね」

「そんなに美味しいのか？ 私、遥達とは別のクラスだから食べた事ないからよく分からないんだけど……」

「ん？ 僕の腕前が気になるのかい、みのさん」

「私はミリオネアの司会者か！ 私の名前は漣だ。今更ながら人の名前を間違えんなよな」

「失礼。噛みました」

「いや、何か悪意ある噛み方だった」

「噛みまひた」

「あからさまにワザとくさい！」

「カーネルサンダーズがいた」

「どこに！？ ケンタッキーの看板キャラであるカーネルサンダーズが一体このどこに！？」

「それは僕達の心の中に、さ……」

「かつこいいい！　なんて思うワケあるかこのバカっ！」

「まあまあ。味なら心配する必要ないぞ。私もよく遥の弁当をもらってるけど、唯の言う通りかなり美味いしな。私が保証するって」

「そう、なのか？　まあ味覚の良い律がそう言うなら、信じてやってもいいかな……」

「信じる者はスクワットされるって言うしな」

「罰ゲームか！　それを言うなら『救われる』だろ！　信じた奴もそんな真似されたら浮かばねえよ！　はあ、もういいや。とりあえず私達は別室で楽器の練習してるから、遥はその間に夕飯の準備をしっかりしておくんだぞ？」

「ああ。ただしその頃には、澪ちゃんも八つ裂きになっているだろうけどな」

「何でだよ！？」

### 第30曲　カレーなる一族

——などと、冒頭の愉快痛快な会話から数時間後。　つまりは夕食の準備が整った現在。

『おおおおおおおおおおお！！』

広々としたダイニング。その中心に置かれた長テーブル（悠に十人は座れそうなほどの）に置かれた料理の数々に、軽音部の皆が異

口同音に感嘆の声を上げる。皆一様にして、眼前に並べられた料理に目が離せないと言った状態だ。

さて、皆の反応を解説し終えたところで、次は本日のメニューな  
どでも軽くご紹介の方をば。

まずは簡単にサラダの盛り合わせ。次に男爵イモのポタージュ。  
そしてメインディッシュであるカレーライスは、二種類のカレー  
ーをかけ合わせ、なおかつコンソメスープの素を入れ、じっくりコ  
トコト時間をかけて煮た自慢の一品である。もちろん、ふくじん漬  
けも忘れちゃいない。デザートはまだ出してはいないが、冷蔵庫で  
保冷したままの状態で、手作りのチョコプリンが人数分入っている。  
実は少し前にも、すき焼きをご馳走してもらったお礼にと唯と憂  
ちゃんにチョコプリンを作ったあげた事があったのだが、その時の唯  
がとても美味しそうに食べていたのを思い出してまた作ってみたの  
だ。

あの時の唯の顔は、天使にでも触れたかのような満面至福の笑み  
を浮かべていたものだ。のちの『天使にふれたよ!』である。嘘で  
ある。

「すーごーいッ。これ全部はちゃんが作ってくれたの?」

と、ネタバレにも似たメタ思考に耽っていたその時、唯が爛々と  
した目で僕に訊ねてきた。よほどお気に召してくれたらしい(まだ  
食べてもないのに)。

「まあね。むしろスーパーまで行く道のりの方が面倒くさかったよ」  
何しろ、歩くだけで汗が流れ出るくらい暑さだったしな。それ  
も六人分の材料を持ち運んでいたのだから、大変なんてものじゃな  
かった。せめて自転車でもあれば良かったんだけど、それすら無か  
ったからなあ。ムギの家では、普段から自転車を使わない生活を送  
っているのだろうか。

「ま、とりあえず早く座ろうぜ。料理が冷めたらもったいないし」  
ていうか、ドラムの叩き過ぎで腹がペコペコなんだよ、と腹を  
撫でながら覇気無く言う律。僕が調理している間に、珍しく練習に

打ち込んでいたようだ。不真面目な律にしては珍しい。

それはともかく、みんなも律の提案に異論は無いらしく、というか、いつの間にやら僕だけを除いて全員既に着席していた。むしろ唯なんて「いただきます」を言う前から既にカレーライスを食していた。食欲に忠実過ぎだろコイツら。

はてさて鬼の手。露骨に閑話休題を導入しつつ、ここからカレーライスを食べた皆の感想をダイジェストでお送りいたします。

「おいしいイイイ♪　すごく美味しいよこれ♪。憂と同じくらい美味しいかも♪」↑かわ唯

「本当だ。まさか遥の料理がこんなにも美味かったなんて……」↑僕のお嫁さん（異論は認めない）

「あ。これ二種類くらいカレールー使ってんな。私もよくブレンドして使ってるぞ」↑りったん隊長

「たまにはこういう庶民的な料理も良いわね」↑むぎゅう嬢

「わ♪。みんなが言う通り、すごい美味しい。私のお母さんより上手かもです」↑どちら様？

「いやどちら様って！ 私ですよ私！　中野梓ですよ！」

「あ、なんだあずにゃんか。肌が真っ黒に焼けてたから誰だか分からなかったよ」

「海で遊んでいた時点で既に焼けてたじゃないですか！　だいたい、私じゃなかったら一体誰だと思ってたんですか！」

「僕だと思ってた」

「いや遙先輩そこにいるじゃないですか！ 自分自身と間違えないでくださいよ！」

「じゃあ何と間違えればいいの？」

「何も間違えないでください！」

とりあえず、間違えちゃいかんらしい。それ以前によく僕の考えが読めたな、あずにゃんよ。

「ところで、話は変わるけどさ……」

と、カレーライスをスプーンで掬ったままの澪しゃんが、律に視線を向けつつ口を開く。

「ご飯を食べた後はどうするんだ？ また練習でもするのか？」

「えゝっ？ また練習なんてヤダよゝ。せつかくのみんないるんだから遊ぼうよゝ！」

「唯先輩、もはや遊ぶ事しか考えてないんですね……」

ぶゝぶゝ駄々をこねる唯に反し、梓が呆れ口調でそう呟く。まあ、唯らしいと言えば唯らしいが。梓もそう思ったのか、はたまた諦めの境地を悟ったのか、それ以上に何もツツコまなかった。賢明な判断ですな。

「まあまあ。みんなでこうして合宿に来てんだ。練習も大事だけど、遊ぶのも夏の思い出作りに欠かせない事だと私は思うぜ？」

「律の言う事も一理あるけど……。でも遊ぶつたって何をするんだ？ 海で遊ぶには、もうだいぶ日も暮れてるし」

「そう急かせるなよ澪。ちゃんと考えはある」

考えて？ と皆の視線が集まる中、律は勇者の剣を掲げるように、握っていたスプーンを振りあげて声高にこう宣言した。

「夏と言えばやっぱりこれ！ みんなで肝試し大会を開催したいと思いまゝすッ！」



### 第30曲〜カレーなる一族〜（後書き）

随分とお久しぶりでございます。あれ？ もう更新しないの？ と思われた方々、お待たせして申し訳ございませんでした。まだだ！ まだ終われんよ！

今まで私生活が色々と忙しかった為、こんな遅いタイミングでの更新となってしまうました。もうホントね、色々とおったんだ。色々……（死んだ魚みたいな遠い目）。

これからも諸事情により更新が遅れるやもしれませんが、なるべく早めに更新できるよう精進していきたいと思います。

では、また次の更新にて。

### 第31曲 階段レストラン (前書き)

思っていたより執筆が進んだので、早めに更新してみました。

お盆休みって偉大だなー。

### 第31曲 階段レストラン

「よし。みんなクジ引き終えたな。ちなみに私はみんなを脅かす役な。へっへっへ、こりや楽しくなってきたぜ」

「あ。私はムギちゃんとペアだ」 よろしくムギちゃん」

「あらホントね。こちらこそよろしくね唯ちゃん」

「私は漑先輩とペアみたいですな。あまり気は進みませんが、お互い頑張りましょうね漑先輩」

「そそそ、そうだな梓。ま、まあ、ききき肝試しなんて子供騙しのお遊びみたいなものだし、わ、わわわ私は全然平気だけれどな！（ガクガクブルブル）」

「……漑先輩。その震え様と噛みまくりの反応では、まるで説得力が皆無なんですが……。そ、それはそうと遥先輩は何の係だったんですか？」

「んー？ 僕は律と同じ係だよ」

「そうなんですかー。じゃあお手柔らかにお願いしますね、遥先輩」  
「まっかせろい！ 性感マッサージの神業職人<sup>マエストロ</sup>と呼ばれた僕の手腕をとくと味わうがいいッ！（キリリン）」

「いや違いますよねッ！？ 律先輩と同じと言う事は私達を脅かす役ですよね！？」

「もちろんちゃんと脅かすよ？ 『えひひひ。ほら早くおっちゃんにそのビチヨビチヨに濡れたイヤらしい股を広げて見せてみいや。せやないと、お前のこの恥ずかしい写真をネットに流してまうで？』 っていう感じでな！」

「脅かすの意味が違い過ぎるんですが！？ 肝試しを乱交パーティーか何かと勘違いしてるよこの人！」

「おいコラ遥！ 一体なに言い出してんだよ！」

「ああ律先輩！　あまりの恐怖で正気を失っている澪先輩が頼りにならない以上、あなただけが最後の良心です！！」

「澪の淫らな姿を見ていいのは、この私だけだ！！（キリッ）」

「ダメだこの二人！　早くなんとかしないと！」

### 第31曲　階段レストラン

「ちえー。梓のやつ、本気で殴りやがって。ほんの冗談だったのに」

「だんだんとあずにゃんも澪しゃんに似てきちゃったよね」

あの後ついに梓がキレ出して、拳骨を食らった頭をすりすりと撫でていたわる僕と律。澪しゃんほどの威力はないにせよ、梓のツツコミもついに手が出るようになってしまったか。この先澪しゃんのような過激ツツコミを会得しないよう祈るばかりである。澪しゃんのツツコミを受けた人間にしかわからないが、某野原さん家の奥さん並みに凄まじいんだよな、アレは。そりゃもう漫画みたいなたんこぶが出来るくらいに。

場面は変わってとある鬱蒼とした暗闇の森の中。その草陰で僕は律と身を寄せ合い、澪達をいつでも脅かせるよう腰をかめてスタンバイしていた。律なんて、わざわざ釣り竿にこんにやくを垂らせるまでの準備を施していた。今時こんにやくで。ベタな上に古風過ぎる。

「えっと、こうしてスタンバってるのはいいけど、いつぐらいに澪しゃんと梓は来るの？　確か最初は澪しゃんペアのハズだよな？」

「おう。もう五分もすれば来るんじゃないか？　なんせムギの別荘をぐるりと一週するだけだし」

一週するだけ——とは言うものの、この広さだ。どこぞの団地をも凌駕していきそうなこの別荘の周囲を、ほんの数分で周りきる

のは不可能だろう。その上、月の光と別荘の室内灯しか明かりがないこの暗さの中。足下も何かと覚束ないだろうし、こっちが思っているより時間が掛かるかもしれない。

そうになると、しばらくは律と二人つきりとなるワケか……。な、なんかドキがムネムネしてきたぜ！　という思春期男子的な感情は一切湧いてこなかった。何でだろう？　相手が色気とは無縁に位置する律だからだろうか。うむむむ？

「それはそうと、遥は何も用意してなくていいのか？　手持ち無沙汰だと心もとくないか？」

「ん？」いきなり話を振られ、それまでの思考を一旦中断して律に向き直る。「え？　手ぶらじゃダメなの？」

「ダメってワケじゃないけど……って、なんで胸を包むように手を添えてんだよ？」

「手ぶらなだけに手ブラってなワケですよ。もはははは！」

「ブラなんて必要ないくらい平坦な胸だけだなー」

「あらヤダこの子ったら。いつだって胸にブラを装着して常に己の心も殿方に晒さないようにしなさいって、わたくし直伝の乙女教育をもうお忘れになって？」

「先生のラリホーがあまりにも効果イケメン過ぎて全く覚えてませーん」

「まあ大変。効果テキメンをイケメンと言いつ間違えるくらいステータス異常になってるだなんて！　今すぐベキラマを唱えなくっちゃ！」

「先生ー。それだと焼き死にまーす。リカバー的な呪文でお願いしまーす」

「あらごめんなさい。ミナデインで良かったかしら？」

「先生以外の人間にも私を殺す気満々でいる奴がいようとは……。だが私を倒したところで、第二、第三の私がお前を待ち受けている事だろう！　わははは！」

「な、なんだってー！　くそッ。僕達の戦いの日々は、いつになっ

たら終わりを迎える時が来るというのか！」

「それはきつと天の声からこうお告げがきた時だろうさ。『ざんねん！ はるかのはうけんはここで終わってしまった！』となー！」

「ふざけんな！ こんな物騒な異世界にいつまでもいられるか！」

僕は元いた世界に戻る！」

どっちみち、思いっきり死亡フラグ全開なセリフだった。

というか、もう設定もキャラも口調も滅茶苦茶になっていた。

何なんだこの即興コントは。楽し過ぎるぞ。

りったんのノリの良さに完敗、もとい乾杯。

「……ふふ。あははは！ ホント遙つて面白い奴だな」

律も僕と同じような事を考えていたのだろうか——最初だけ含み笑いをした後、今度は大口を開けて笑い出した。その笑い方は仮にも女の子としていいのだろうかと懸念を禁じ得なかったが、敢えて黙る事においておいた。

「あははは！ ふう、いきなり笑ってすまん。氣い悪くしたか？」

「いんや。そんな事ないよ」と、首を軽く横に振る僕。

「僕もりったんとうして一緒にいて、すごく楽しいって思ってるし」

「へー。ずいぶんと嬉しい事言ってくれんじゃん。ひょっとして、私に惚れちゃったか？」

「うん。思わず触手が出そうなくらいに」

「……いや、出すなら普通に手を出せよ。氣持ち悪いから」

「氣持ち悪いだなんてひどい！ 僕の愛の形を示そうとしたただけなのに！ しくしくしく夜露死苦ウ！」

「泣きながら一体どこの族に挨拶してんだお前は」

「戦闘民族かな」

「ホントにどこの暴走族なんだよそれ！」

いやどこって、まさかドラゴンボールを知らないのか？ どうしてドラクエは分かってドラゴンボールは分からないんだ。鳥山明先生に大してなんと無礼な。

ポケもツツコミも兼ね備えた、貴重な両刀キャラなのに、マニアックなネタになると対応しきれない律なのであった。

あー、どんな無茶振りでも正確にツツコんでくれる澪しゃんが無性に恋しい。

「あーまー何にせよ、楽しんでくれて何よりだよ」

苦笑を浮かべつつ、律は頬を掻きながら話を戻した。どうやら、先ほどの僕のポケは無かった事にするらしい。寂しい。

「せっかく合宿に来たんだし、楽しまなきゃ損だしな」

「そうだねー」

「でも遙、本当はこういうの好きじゃないんだろう？」

「……………」

全く思ってもみなかった律の言葉に、一瞬頭がフリーズした。

今までの行動に何か不自然なモノが含まれていただろうか。そりゃバスに乗っていた時は少しナーバスになっていたが——などと己の行動を振り返りつつ、

「……………何でそう思ったの？」

と、なるべくぎこちない笑顔にならないよう、極力明るい表情を浮かべて律に真意を問いただす。

「あーいや、別に確信あつて言ってるわけじゃないんだけどさ……………」

そう前置いて「ん」。なんて言ったらいいんだろう？」と自分に呟いて、うんと意を決したように頷いてから、たどたどしくも次の言葉を紡ぐ。

「なんつーかさ、無理やり楽しんでもるように見えるって言っか」

「……………」

「誰といても、本当はいつも独りぼっち——みたいな感じにいるよな気がして、さ」

「……………」

それは。

それだけは。

自分でも薄々分かっていながらも、どこか無意識に考えないよう

にしていた事だったのに。

なるべく誰にも悟られないよう、道化を演じていたハズなのに、  
よりにもよって、律に見破られるだなんて――

「あ、あの、さ」

喉に鉛でも詰まったような感覚に襲われつつ、言葉を無理やりにも吐き出す。

何でいい。ごまかさないと。

どうにかして、僕に対する疑念を取り払わないと。

でないと、僕は。

僕は。

“僕”は？

“僕”は“オレ”は――？

“オレ”は――“僕”でなくなる――……？

「あのさ、律――」  
と。

どこか感傷に浸っている感じの律の肩に、自制が利かないほど小刻みに震える手を掛けようして――

『きゃああああアアア！？』

「な、なんだア！？」

突如として響いてきた悲鳴に、律が驚いて隠れていた草陰から勢いよく立ち上がる。僕も伸ばしかけていた手を途中で止め、悲鳴が聞こえてきた方向に視線を向けた。

「今のって、漣の声じゃなかったか？」

「うん。多分……」 確証は無いが、あの悲鳴は律の言う通り、耳慣れた漣のものだった。あの声からすると、そう遠くはない。僕以外の誰かが、先に漣達を脅かしに行ったのだろうか？

「つて、え？ あれ？ 僕達以外に脅かす役っていたっけ？」

「いや、そんなハズは……」

そこまで言いかけて、不意に律は唇を噛みしめて地を駆け始めていた。きつと悪い想像が頭を掠めたのだろう、一瞬だけ青ざめていた顔をキツと不安を取り払った鋭利なものに変えて、一心不乱に疾駆していた。

そんな切羽詰まった律の後ろを、僕も木々を掻き分けながら全力で追いかける。

漣の上げた悲鳴とはまた違う、律に対する不安を胸に抱きながら――。

第32曲 あの日見た馬鹿の名前を僕達はまだ知りたくもない

結論から先に言わせてもらえれば。

漑を恐怖のどん底に陥れたのは、軽音部顧問である山中さわ子先生であつた。

「あれ！？ さわちゃん先生、どうしてここにいるの！？」

ひとまず漑達の所まで急いで赴いて、一緒にいた梓に事情を聞いていると、悲鳴を聞きつけたのか、唯とムギが僕達より遅れて慌てた様子でやって来た。そして予想だになかった珍客に驚愕を露わに声を上げる唯。そんな僕達のすぐそばでは、突然木の陰から現れたさわ子先生に驚いて気絶したらしい漑ちゃんが、梓によつてしっかりと肩を抱かれて介抱されていた。いや話には聞いていたが、漑ちゃんがここまでホラー嫌いだったとは。肝試しを始める前からかなりテンパっていたけども、まさか白目を剥いて気絶するとはさすがに思わなんだ。

.....。

よし！ 今度、漑ちゃんに本当にあつた怖い都市伝説でも聞かせて楽しんじゃおうそうしよう。

などと、人として色々と終わっている感が否めない決意を胸に下しているところ。ううう。良かった。どうにか無事に着けた」とと涙を浮かべてさわ子先生が安堵の溜め息を吐いていた。

そのさわ子先生なのだが、森の中をさ迷っていたせいなのか、あちこち葉っぱだの砂などで衣服が汚れてしまっていた。その様子から、いかにさわ子先生が必死の思いで此処までたどり着いたのかが窺える。つか、そうなる前に電話のひとつでもすれば良かったのに。

今一度ケータイという文明の利器の存在をじっくり認識すべきだと心から思う。

「とりあえず、一旦別荘まで戻りましょう。先生は疲れてらっしゃるし、澪ちゃんはあるな風になっちゃってるし」

と、ムギの言葉で皆の視線が澪に集まる。確かにあんな状態（力みたいに泡まで吹いて気絶中）だし、確かにいつまでもここにいるワケにもいかないな。

そういったワケで、気を失っている澪ちゃんを二人掛かり（律と梓）で担ぎ、僕達は肝試しを中断して別荘へと戻る事に相成ったのであった。

第32曲　あの日見た馬鹿の名前を僕達はまだ知りたくもない

「はあ。冷たくて美味しい」

澪を近くのソファで寝かせた後、リビングに集まってお茶を飲む僕達。よっぱど喉が渴いていたのだろう、さわ子先生は恍惚とした表情でさつきみたいなセリフを何度も呟きつつ、お茶も三回くらいおかわりしていた。

「それで？ 改めて訊くけど、何であんな所にいたんださわちゃん？」

と、さわ子先生の右隣りに座っている律が、怪訝に眉をひそめて訊ねた。ちなみにその横を僕。そしてその正面に唯、ムギ、梓という配置でそれぞれ腰を下ろしている。

「いやー、後で合流してみんなを驚かそうとしたんだけど、途中で道に迷っちゃって」

「驚かせようっていう目的だけは達成できたみたいですけど……」

たははと苦笑するさわ子先生に、梓が絶賛ソファの上で気絶中の澪ちゃんに視線をやって呟く。澪ちゃんにとっては、とんだ災難

だったワケだが。

「ところで鬼塚先生」

「いや山中ね？ GTOじゃなくてGTYだから。グレートティーチャー山中さわ子だから」

「これは失礼しました。間拔作先生」あいだぬけさく

「誰がとんちんかんのリーダーやねん」

古過ぎるネタを正確にツツコンでくれたさわ子女史であつた。

こやつ、なかなかできる！

「つて、冗談はいいから、早く本題を出しなさい音無さん」

「それもそうですね。いや大した事じゃないんですけど、どうして僕達がこの別荘にいるだなんて分かつたんですか？ 僕と軽音部メンバー以外、この事は知らないはずだと思うんですけど」

確か律が合宿をさわ子先生に願ひ届けたという話までは事前に聞いたが、場所までは詳しく説明しなかつたとも言つていた。なら、どうやって僕達の合宿先を知る事ができたのだろうか。それが不可解に思つての質問だつた。

「ああ。それなら、みんなに付けた発信機を辿つてここまで来たまよ」

『一体いつの間に！？』

まさかの衝撃事実に、驚愕する僕と軽音部の皆さん（澁しゃん除く）。

どこに！？ 一体僕達の体のどこにそんなものを付けやがつてい  
うんだ！？

「あら、探そうとしても無駄よ。全部みんなの体内に入っているもの。やっぱ軽音部顧問として、部活中の皆の動向を知らないワケにはいかないしね（うふり）」

『これはひどい！！』

プライバシーも何もあつたもんじゃなかつた。笑つてごまかそう  
とするところが尚更性質タチが悪い。

良い先生は決して真似しないように。僕からみんなへの約束だゾ

！ 犯罪はダメ、絶対！

そもそも、人の体に発信機を付けておいてまで道に迷うとは。どれだけ方向音痴なんだこの先生。

「……ん。んうう」

さわ子先生の外道な行いに辟易していると、ソファで寝ていたハズの澪から微かに呻き声が聞こえてきた。どうやら、僕達の騒ぎ声に目を覚ましてしまったようだ。

「……あれ？ 何で私ソファで寝てるの？」

「澪ちゃん、気分はどう？」

ゆつくりと起き上がった澪に、僕はそばによって体調を訊ねる。

澪はすぐ僕に気付いて「……ああ。遙か」と未だ意識がぼんやりとしてそうな表情で呟く。

「いや、大丈夫だ。それにしても、どうしてソファで寝ているんだ私は？ 確か梓と一緒に肝試しをしていたハズ……」

「澪先輩、あまり思い出さない方が良さと思いますよ？ また倒れたりしたら大変ですから」

「あずにゃんの言う通りだよ澪ちゃん。さっきまでの事は綺麗さっぱり忘れて、代わりにこの間計った体重でも気にしてなよ」

「ぎゃあああああー！」

「トラウマを発掘してどうする！」

そんな律の激昂と共に、ぶん投げられたテレビのリモコンが僕の後頭部にクリーンヒットした。つか硬いのはやめれ！ 地味に痛いからやめれ！

「何をするかりったん！ これ以上、僕の頭がおかしくなったらどうすんだい！」

「やかましいわ！ ていうか自分の頭がおかしいという自覚はあるんだ！？」

「はいはい。騒がない騒がない」

僕と律が言い合いしている内に、さわ子先生が手をパンパン叩いて諫める。

「澪ちゃんの目が覚めた事だし、あんた達お風呂にでも入ってきなさい。どうせ今まで練習だの何だので汗を流してないんでしょう？ダメよ。女の子が汚れた体のままでいたら」

そう言うあんたの格好の方がよっぽど汚れてるけどな（精神も含む）。

「それもそうだな。そろそろ風呂に入ろうかと思っていたところだし」

「私もさわちゃんとりっちゃんに賛成！ 汗で服がぐしょぐしょだから早くお湯で流した〜い」

「うふふ。それじゃあみんな、私に付いて来て。お風呂まで案内するわ」

そう言うって先導するムギの後を「どんなお風呂なんだろうね〜」「ムギの別荘の風呂だから、きつと豪勢だぜ〜」「全く想像つかないですねー」と会話に花を咲かせて付いて行く。お風呂に入れるのがよっぽど嬉しいのか、みんなして喜色満面の笑みを浮かべていた。女の子は風呂好きというのは本当なんだな〜。

「あれ？ 遥は一緒に来ないのか？」

と、ぼんやりとしながら、皆がリビングから出ていく所を見届けていると、最後尾だった澪がリビングに残ったままの僕を振り返って訊ねてきた。

「うん。ほら、先生お腹空かせてるだろうし。余ってるカレーを温めて出してあげようかなって」

というのは嘘だけど。本音を明かせば、男である僕が付いて行ったら女装が露見してしまうので、みんなが風呂から上がるまでの口実に過ぎないのである。

なので「んまあ！ 音無さんってばなんて気が利く子なの！ ついでにお酒も持って来てもらえたらさわ子感激！ できれば日本酒で！」などと僕の背後で厚かましく騒いでいる二十三歳（推定）彼氏ナシ（断定）先生の為では決してない。ええ決して。

「そっか。じゃあ私達は先にお風呂に行ってるから、その間さわ子

先生を頼んだよ」

「ああ。ただしその頃には、漣しゃんは八つ裂きになっているだろうけどな」

「ちえりお！」

一体どこから取り出したのか、漣しゃんの手から投げ飛ばされたクマのぬいぐるみが、僕の顔面に見事直撃した。

あまりにもあんまりな酷い扱いをされたこのクマのぬいぐるみに、『ふじおか』という名誉ある称号を与えよう——意識が闇に落ちる瞬間、僕はそう胸に決めた。

第32曲　あの日見た馬鹿の名前を僕達はまだ知りたくもない（後書き）

前回の伏線を回収しないまま来ちゃった……（汗）。

いやいずれ！　いずれ近い内に必ず売春を！　もとい回収を！

### 第33曲〈見果てぬ夢〉（前書き）

ずいぶんと間を開けてしまつて申し訳ありませんでした。

そんなお詫びも込めて、今回はいつもより少し長めのシリアス風味な話となっています（単にどこで区切ればいいのかわからなかったという理由もあつたりなかったり）。

### 第33曲 見果てぬ夢

将来の夢とは何だろう——と時々ふとした瞬間に思う事がある。

そもそも、将来という言葉自体が漠然としていて、夢という言葉そのものが曖昧模糊としたものだから、はっきりとした輪郭として形あるものでもない。まあ単調に言い表せれば、未来の自分の姿という事なのだろうが、さりとて、未来という姿形を明確かつ正確にイメージ出来る人なんて、どれだけの数の人がいるというのだろうか。

そういえば。

かつて、我らが暴君にしてこの世の霸王であらせられた姉上に、一切の誇張なく有無も一言も言われないまま無理やり読まされた小説の中に、夢に関連したとても印象深い文章があった。

それは簡単に要約して記述すると、『夢はそんな簡単に叶わない——そしてそれ以上に、現実にも敵<sup>かな</sup>わない』という、まさしく夢のない話だった。

さて、ここいらで疑問を誰とも付かず投げかけてみるとしよう。ならば、そんな無慈悲な現実に勝つてまで叶えようとする夢に、そこまでの価値があるのだろうか？

仮に、だ。

仮に、そうまで叶えた夢に、そこまでする価値が無かったとしたら。

それが至極時間の無駄だったとしか言えないようなモノだったとしたら。

そう悟ってしまった時、人は一体どんな反応を示すのだろうか。

価値なき夢へと続く道の途中で、人はどこへ向かおうとするのだろうか——。

などと将来の夢なんて持ち合わせていない——まして現実には希望すら膨らませてなどいない僕みたいなつまらない人間が他人様の将来を心配するだなんて、まさに戯言もはなはだしい事柄である。

人の夢なんて千差万別。価値なんて本人しか分かりえない事だし、例えば価値が無かるうが夢が無かるうが、ぶっちゃけそれでも人は生きていられる。

つまるところ、なりたいモノがあってもなくても——それが必ずしも幸福や不幸に直線上に繋がるというワケではないのだ。夢〓幸福／挫折〓不幸という式が決して成り立たないように。

でも。

なりたいモノでも何でもなく。

それが運命によって定められたあるべき姿だったとしたら。

そうならざる——否。“そうなり果てるしかなかった人間”は。別の“何か”としてでないと存在出来ない人間がいたとしたら。

例えば“僕”みたいな存在は、果たして本当に“生きている”と言えるのだろうか——？

### 第33曲〜見果てぬ夢〜

「はあゝ。美味しかったゝ。音無さんって、料理が上手なのねゝ」

「いえいえ。おそ松くんです」

「……懐かしいわね、それ」

時刻は夜の八時過ぎ。肝試し騒動から大体一時間くらい経った頃だろうか。あの時の喧騒がまるで嘘だったかのように、シーンと辺りが静まり返っている。今頃、唯達が大浴場で体を流しているだろうから、そこまで行けば騒がしい声が響いてくるのだろうか、僕と

さわ子先生がいるダイニングは、まるで肝試し大会が嘘だったかのようにシーンと静まり返っている。それでも、カレーライスを食べながら喋る口もせわしなく動かすさわ子先生がいたので、そこまで気にはならなかったが。

目の前であつという間に空となったカレーライス（よっぽど腹を空かせていたと見える）の器を手元へと寄せて持ち上げた後、僕はさわ子先生を残して独り流し場へと向かう。最初から先生も付き添っていれば、唯達の間も一緒に食器が洗えて二度手間を掛けずに済んだのになあ——などと栓ない事を考えながら、僕は蛇口をひねった。

ジョバババと勢い良く流れ出る水の滝が、食器に付いた汚れと共に四方へと弾く。冷たい水の奔流を両手に浴びて涼を取った後、すぐそばにあるスポンジへと手を伸ばして、カレーの余り汁が付いた皿へとこすりつけた。

「みんな、今頃お風呂に入ってキャッキヤ　ウフフしてるのかしらね」

僕の背後——簡易型のカウンターを挟んだ向こう側のテーブルから、さわ子先生の声が聞こえてきた。カランコロンと麦茶入りのコップに在留している氷を持ち遊びながら、物思いに馳せて言葉を乗せる。

「いいわよね、合宿つて。私も学生時代によくやったものだわ」

「そういえば、貞子先生も元軽音部だったんですね？」

「さわ子やつちゅーに」

どこそのリ्यूさんみたいな返し方だった。

まあそれはともかく、と話を続けるさわ子先生。

「合宿つて言っても、こんな凄い別荘を借りるほどじゃなかったけれどね。大抵、顧問の先生の許可を取って部室でお泊まりだったし」

「ずいぶんと安上がりだったんですね」

「そーねー。でも楽しかったわ。部活のみんなと一緒にワイワイ騒ぐのは」

あの頃は若かったわ、って今でも十二分に若いけど。

そう笑みを零し、さわ子先生は小休止を入れて麦茶を口に含んだ。そんなさわ子先生の姿を遠巻きにチラツと視認しつつ、僕は皿を洗いつける。

「それはそうと、食事も済んだんですから、リツ子先生もお風呂に入ってきたらどうですか？」

体も服も森の中をさまよい歩いて汚れているワケですし——と洗剤の付いた皿を流水で落としながら、さわ子先生の方を振り向かずにそう促してみると、

「さわ子やつちゅーにとしては、もう少し音無さんと話していたい気分なのよねー」

と、やつちゅーにを加えたツツコミを返してきた。

……なんつーか、本当にノリの良い人だよな、この先生。

「それは」最後の皿を洗い終え、キュツと蛇口を閉めた後、僕は改めてさわ子先生の方を向いて言う。

「わざわざみんなを追い出すような真似をしてまでの事なんですか？」

そう淡々に言つてのけると、

「あら、なかなか鋭い事を言ってくるのね」

と、さわ子先生は特に驚きもせず言外に僕の言葉を認めた。

やつぱり、わざとみんなをダイニングから遠ざけたのか。

それも、僕に関する何らかの私用で。

「でも、どうして分かったのかしら？ 私、音無さんだけを引き留めるような真似はしなかったと思うんだけど？」

「なんとなく、ですかね。それに用があつたのなら、適当な理由を付けて僕をリビングに残らせただけの事でしょうし」

結果的には、僕自身が進んでリビングに残った形になっちゃいましたけどね。

そう漏らしつつ、僕は濡れた手をハンカチで拭いて、さわ子先生の対面まで行き、腰を落とした。

「それで？ 僕に話って何ですか？」

「これよ」

スツとテーブルの上を滑る一枚の用紙。そこには僕の名前《偽名》と共に、『進路調査表』なる大々的な文字が、冒頭を飾っていた。そしてそのすぐ下に、空欄のままとなっている第一、第二、第三希望の項目。

「あなた、まだこれ書いてなかったでしょう？」

「……………」

「あなたの担任の先生から頼まれたのよ。もし夏休み中に音無さんと会う事があつたら、これを夏休みが終わるまでに提出するよう言つてやつて下さいって」

そもそもこれ、夏休み前に提出すべき物なんだけれどね――。

手元に置かれた用紙をトントンと爪で小突きながら、そうさわ子は僕を直視して言った。特に抑揚もなく言われたので、どうやら嫌々引き受けたワケでも、別に面倒に思っているワケでもないようである。

「それでわざわざこんな所まで来たんですか？ ぬゝべゝ先生も大変ですね」

「俺の生徒に手を出すな！ なんて言うと思つたら大間違いやつちゅーにでさわ子先生やつちゅーに」

僕がボケる度に“やつちゅーに”のバリエーション豊かになるさわ子先生だった。

というかこの人、思つた以上にノリノリ仕様だった。

何がこの人をそこまで“やつちゅーに”にこだわらせると言うのだろうか。

「話を戻すけれど、元々ここに来るついでみたいなものだから、別に気にする必要はないわよ。それより、さつさと進学にするか就職にするか決めなさい。これで先生方の指導も変わってくるんだから」  
「これは失礼。すっかり忘却の彼方に浮遊させていました」

嘘だけど。本音を明かせば、進路希望調査表を片手に追い掛けて

くる先生から逃げ回っていただけだ。

それは、自分の進みたい道が分からなくて。

自分の未来が、まるで靄がかかったように見えてこなくて。

進路なんてものが、本当に僕みたいな奴にあるだなんて、微塵も  
思えないせいでもあって。

「——そうですね。さわ子先生の言う通り、早く決めないと担任も  
可哀想ですもんね」

そう囁く事で先ほどまでの雑念を払い、僕は適当に言葉を紡ぐ事  
に徹する。何にせよ、さっさと決めておかないと、今後かねちねち  
と言われそうだ。

「じゃあひとまず、第一希望は自宅警備員という事で——」

「ふむふむ。まだ未定つと」

速攻で一蹴された上に、目の前で改ざんされてしまった（そりゃ  
そうか）。

そのまま言葉通りポケットから取り出したボールペンで僕の進路  
希望調査表に『未定』とでかでかと書き込むさわ子先生に「いやち  
よつと待って下さいよ」と筆を途中で止めさせる。

「自宅警備員の何がダメなんですか。家庭の平和と安全を守る立派  
なヒーローなんですよ？」

「人はそれをヒーローじゃなくてプータローと呼ぶのよ」

「なるほど。マキバオーOPの元ネタとなったヤツですね」

「それはコータロー。ていうかそれ、十代読者の何割が理解できた  
のが不安でならないわ」

「じゃあ気を取り直して、第二希望は新世界の神という事をお願い  
します。デスノートの意味で」

「よし。第二希望も未定つと」

「いやだから待ってくださいって。それに神は神でも、神龍シエンロンの方な  
んですよ？」

「やったッ。これで私の願いが叶う……ってバカ！　そういう問題  
じゃないでしょうが。もう少し真面目に考えなさいよ」

「それもそうですね。僕を喚ぶのに、百八個のドラゴンボールを集めなければいけませんしね」

「そうそう——って多っ！ ドラゴンボール多っ！ なにその煩惱の数的な途方もない数字！？」

——ってそうじゃなくて！ とテーブルをバシンと叩くさわ子先生。

「進学にするか就職にするか、どっちかに決めなさいって言ってるのよ私は」

「二択しかないんですか？ 世知辛いですねー」

「何でもいいから早く決めちゃいなさい。何か面倒くさくなってきたから」

生徒の将来を面倒くさいの一言で済まそうとするとんでもない教師がそこにいた。

って、完全に僕のせいですがな。などと一人突っ込んでみる。

「そうは言われましてもねえ」テーブルの上で頬杖を付きながら、僕は真剣味の一切無い、のんびんだらりとした調子で口を開く。

「将来とかどうか言われてもピンと来ないんですよね。まだ先の事だけに実感が湧いてこないというか」

「まあ、無理に焦って決められるのも困るし、今すぐにとは強制しないけれどね」

そう言って、以前はつきりとしないう僕に根負けしてしまったのか、さわ子先生は僕宛ての進路希望を綺麗に四つ折りして、そのままポケットに締まってしまった。

「およ？ いいんですか？ それだと未定のままになっちゃいますけど」

「いいのいいの。だって私、あなたの担任ってワケじゃないんだし」  
うわ。最後の最後で丸投げやがったこの人！

それでいいのか現役教師よ。

いや、別に言ってる事自体は間違いじゃないんだらうけども。

「その進路希望調査を見た担任が頭を抱えてうずくまる姿が目につ

かぶようですよ」

「そーねー。可哀想にねー」

まるつきり他人事で済まそうとするさわ子先生であった。実に良い神経してらっしゃる。

「そもそもこんな用紙、今の生徒達がどれだけ将来の事を真剣に考えているのか——それが一番知りたくて配っているようなものなのよねー。そりゃ未定のままだと困るけれど、行き先の分からないままにいる生徒を導くのも教師の役目なワケだし。生徒が答えを出すまで、とことん相談でも何でもして付き合わなきゃならないものなのよ、私達教師っていう職業はね」

「なるほど。じゃあ僕みたいな奴は、さしずめ教師達にとっての頭痛の種つてところですかね」

「むしろ芽吹いて蔦が全身に絡まっている状態ねー。主にあなたの担任が」

良かった私クラスの受け持ちとかしてなくてー、と言ってから麦茶をグイッと煽るさわ子先生。この様子からして、何が何でも無関係を貫き通したいらしい。これで良いのか日本の教育。

「それにね。本来私達《教師》は生徒達の道しるべでしかないよ。私達に生徒達の将来を決める権利はない。私達はあくまで、未来に広がる無数の道を生徒と一緒に模索して、検索して、搜索して——。そして、道が定まった子達の背中をそつと陰ながら押す存在——言わば、ナビゲーションみたいなものなのかもしれないわね」

「ナビゲーション、ですか」

私の個人的な意見だけれどね、と曖昧とした苦笑を浮かべて相槌を打つさわ子先生。

「どこへ行きたいのか、どこを目的地とするのか——それは本人の意思次第。私達は、その行き先をなるべく的確かつ安全にナビするだけ。んで、道案内の後はいかようにもお好きなように、と言った感じがしらねー」

そう言って、さわ子先生はコップの中の氷をカランと転がし、今

や残り少なくなってしまった麦茶の水面を眺め始めた。教師という職業に、改めて何かしら思うところがあつたのかもしれない。そんな思考に耽つたような、物憂げな眼差しをしていた。

ふむ。一見ちゃんばらんそうに思えて（黙つていれば落ち着いた女性に見えなくもないのに。実にもつたいない話だ）、色々と考えていたりするんだな。これはさわ子先生に対する認識を変えるべきかもしれない。

「さわ子先生の話聞いていて思った事があるんですけど」一呼吸置いて、さわ子先生が顔を上げたところを見計らつて言葉を紡ぐ。

「先生は、昔から教師を目指していたんですか？」

「そんな風に見える？」

「まあ……」

今までの話を聞いた範疇はんちゆうではあるけれど。

真摯に教職員の何たるかを考えているようだし。

「残念ながらハズレよ」と首をすくめて見せるさわ子先生。

「音無さんぐらいの歳の時は、本気でプロのミュージシャンを目指していたわ。バンド界の頂点を狙うんだって、その時の部活メンバーと一緒にね」

「ああ。そういえば、先生って元軽音部でしたっけ」

確か少し前、軽音部のアルバムを律達に見せてもらった事があつたのだ。その時の写真の数々は、今なお僕の網膜に焼き付いて離れない。

何て言つたらあの時の衝動を伝えられるだろう。そう、良く言えばセンサーシヨナル。悪く言えば黒歴史。引喻を使うとするならば『お前をSATUGAIしてやろうかー！』とでも言いたげな、デトロイトでメタル・シティな格好のさわ子先生が、部活メンバーも揃つた写つていたのだつた。

まあ十代なんてものは、若さに任せて分かりやすい間違いを犯すものだからなー、などと件の十代であるハズの僕がそんな生意気とも取れる感想を述べてみたり。

「結局、夢は叶わなかったけれどもねー」

ポチャン、という微かな水滴が鼓膜に届いた。台所の蛇口（少し締めが甘かったせいかもしれない）から滴り落ちたものだろう、一定のリズムを刻んでシンと静まり返った空間に水音が響く。

台所から届く水滴を気にしつつも、さわ子先生が先を続けるまで、僕は敢えて沈黙を保つ。

「だからといって、別に今の職業に不満があるわけじゃないのよ？ 紆余曲折あってこうして音楽教師をやらせてもらっているけれど、これはこれで正解だったって、心から思っているしね」

そう微笑を浮かべて言ったさわ子先生は、確かに現状に不満なんて無さそうな、晴れやかな顔をしていた。

無論、ここまで至る道にも、僕なんかでは預かり知らぬ苦勞もあったのだろうとは思う。

それでも、こうして選び取った道なのだ。

後悔なんて、きっと無かったのだろう。

後悔だらけの僕なんかとは大違いだ。

「ま、さんざん将来夢がどうのこうの言ってるけど、別に夢が叶わなかったところで人生が終わるわけじゃないのよね。人によって挫折をバネに別の新たな夢を求めたり、今ある生活に別の幸せを見いだしたりして生きていくものなんだから」

「前者は代償。後者は昇華といったところですか？」

「あら、以外と物を知った事を言うのね」

「ちよつと知ってるだけの微々たる知識ですけれどね」

「多分そんな解釈でいいと思うわよ。心理学的な詳しい事までは分からないけど」

と、さわ子先生は赤いフレームの眼鏡を指で押し上げつつ「というより、私はこう思うんだけれどね」と先を続ける。

「人は現実だけに生きていられるほど強くはない——だから未来へと繋がる夢を見たがる。けれど、その夢の為だけに一直線に生きられるほど、人は強くはないとも思うの。だからみんな、現実と夢を

上手く両立させて、日々を生きているんじゃないかしら」

「……………」

「それに念願だった夢を叶えたところで、その先に待っているのはやっぱり現実なのよね。夢は叶えるところまでは良かったけれど、その先で挫折してしまった人なんてよくある話だし」

それは、例えば。

夢を叶えたままではいいけれど、それだけで完結してしまい、何をすれば良いのか分からなくなってしまった人とか。

叶えた夢が思い描いていたものとは全く異なり、人生に失望した人とか。

叶えた夢が生活していく上での仕方ながらやる淡々とした生産活動に変わり果ててしまった人とか。

世の中、そんな人で溢れ返っている。

夢を叶えたその先が、必ずしも希望に溢れているとは限らないとでも言いたげに。

「何て言うか、夢の話をしているのに、夢のない話ばかりですね」

「そりゃそうよ。夢から覚めたらそこは現実。人は現実からは決して逃げられないんだから。けれどね、」

そこで一旦話を止め、さわ子先生は残りの麦茶を飲み干した。ごくっという麦茶が喉を通る音。それからコップをトンとテーブルに置いた後、

「夢を目指そうとするその行為は、何ひとつして無駄な事なんて無いと思うわ」

と言った。

「無駄じゃ、ない……」

「ええ。私、部活メンバーと一緒にプロを目指していたって少し前に言ったでしょう？ プロになる夢は叶わなかったけれど、それでも私は楽しかった。満ち足りていた。何より輝いていた。あの時の私があったからこそ、今の私があると思ってる」

——だってあの時の私がいなかったら、絶対音楽教師になんてな

らなかったもの。

先生はそう続けた。自分の職業に確かな誇りを持った、そんな自身に満ちた笑顔で。

「人は何にだってなれるワケじゃない。夢が叶うとも限らない。でも、今ある人生に少しだけでも満足できる、そんな自分にだったら誰にだってなれるわ。教師をやっている今の私がそうであるように」

「………」

「勿論、どんな事でも言える事だけれど、それなりの努力が必要になつてはくるけれどね。それでも、例えそれが夢が叶わなかった人生だったとしても、生きていくだけの価値は十分あると、私はそう思ってるわ」

「……なるほど」

そう頷いて、僕は独り考える。

さわ子先生の話聞いて、一つの真理ではあるな、と思った。

夢が叶わなかったとしても、それでも人生は無慈悲に続いていく。しかし、その人生が既にどの世界から閉じられたものだとは限らない。

なぜなら、人生は無数に広がっているものなのだから。

夢は叶わなかったけれど、それでも幸せだと言えるような道が――人生に満足できるだけの道が、必ずどこに用意してあるものなのだから。

本人がそれを選び取れるかどうか別として、だけでも。

「さて、ここで話を少しずらす事になるけれど」

と、柄にもなく真面目な思考に耽っていたその時。

先生は。

さわ子先生は。

瞳の奥に獅子にも似た寧猛な光を宿して。

こう僕に問うた。

「今のあなたは、本当にあなた自身が望んでそうだった姿なのかしら？」



### 第34曲 からくりピエロ (前書き)

前回に引き続き、遥とさわちゃん先生が妙に真面目マジメしてる回です (またの名を超絶シリアス回)。

つ、次こそは！ 次こそは必ず平常通りのギャグ回を……！

### 第34曲くからくりピエロく

なあ姉さん。『自分が自分であるという証明をしてみせる』って問われた時、姉さんならどう答える？

あん？ 何その哲学的問題。今の小学生はそんな事まで習ってんの？

いや、単なる興味本位の質問なんだけど。

ふーん。ま、どうせ何か小難しい感じのつまらん本でも読んでたんだろ？ 全く可愛げの無い奴め。そんな本よりも漫画でも読めよな。お姉ちゃん的には『ふたりエッチ』なんかがオススメだぞ？

仮にも小学生に、新婚夫婦の性生活を描いた漫画なんて読ませようとしてんじゃねーよ。

とか言いつつ、すっかり内容を把握している我が弟なのであった。やーい、このむつつりスケベー！

アンタが夜な夜な人の部屋に勝手に侵入して、無理やり読み聞かせたんだろ？。あの時は一体何の呪詛かと恐怖したぞ。

あーあー、あの時のか。なんだ、すっかり聞いてたんだなお前。てつきり熟睡してるもんだと思ってたぞ。

そりゃ子宮スポットの下りを延々と荒々しい息遣いで話されたら、誰だつてすぐ目を醒ますだろ？。あの時は面倒な事に巻き込まれなくなかったから、そのまま寝てた振りしてたけれど。

なるほど、興奮して寝付けなかったんだな。分かる分かる。お姉ちゃんすごく分かるよ。自分でも読んで興奮したもん。思わずお姉ちゃんの子宮もキュンキュンしちゃったもん。ぶっちゃけ、読んでいる最中に3回はイッちゃったね。

そのまま逝けばよかったのに。

あれ？ あれれれ？ 今なんかお姉ちゃん罵倒されなかった？

死ね的な事言われなかった？

別に何も言っていないよ早く逝け愚姉。

ナチュラルに罵倒された！　ちきしょうこのヤロー！　ありがとうございます！

……恍惚とした表情で礼を言うなよ。ドMの変態かアンタは。

あひん！　もつと罵って！

もう嫌悪感を通り越して、姉さんが可哀想な人にしか見えてこない……。

Mの悲劇ってヤツだな！

上手い事言ったつもりか。そんな事より、さつさと質問に答えろよ。

ん？　ああはいはい。自己の存在証明についてな。まあ世間一般で考えりゃあ、免許証とか保険証あたりになるんじゃないか？

そつか。やっぱそんなものなのか。

さつきも言っただけど、あくまで世間一般で考えたらと言う前提の話な。そこをいくとお姉ちゃんの考えは一味違うぜ？　イチゴパフエデラックスとマツコデラックスくらい味が全然違うぜ？

いや、どう考えても後者は味を知ってはならないもの筆頭だろうよ。

こまけえこたあいなんだよ！　言葉のあややってヤツだよ！

綾な。あややじゃなくて。『桃色片思い』とかこの際関係ないから。

微妙に懐かしい曲知ってんなー。ってすっかり話がズレちまったな。あーまあなんだ、詰まるところ、自分を証明するもんなんていらねーって、お姉ちゃんはその思うわけよ。

自分を証明するものなんて、いらない……。

だってそうだろ？　免許証なんて自動車なんかを扱う時に必要するものだけだし、保険証だって病院で使う、ただそれだけの用途のものだろ。あくまでもそこに自分の名前と年齢性別、現住所が記載されている物だけに過ぎねえ。それらは生活に必要な物であって、

自分がこの世界に存在する為に必要な物じゃねーんだよ。

……………。

だいたい、それらが無い奴はどうなるんだよ。ジャングルの奥地に住んでるような、外界の文明を一切断絶した状態の、身分証明書もなければ市役所のような公的機関も無い部族の人間なんかは、この世界に存在しない事になるのか？　ちげーだろうが。全然ちげーだろうがよ。そんな物、身分を証明する為だけの物で、自分の存在を証明する為の物なんかじゃない。必要なのは、自分は自分であるという確固たる意思——自分は確かにこの世界にいるんだっていう意志が重要なんだよ。

自分は自分であるという意思。この世界にいるという確かな意志……………。

デカルトも言ってるだろ？　『我思う故に我あり』ってな。ようは、ただそれだけで十分だって事なんだよ。

なるほど……………そっか。うん、言われてもみれば、そうかもしれない。

どうだ？　今ので満足いったか？

うん。ありがとう姉さん。おかげで少し見識が広がったよ。

いやなに、これぐらいお安いご用ってな。別に大した事も大それた事も言ってるねーよ。まあでもなんつーか、アレだな。ひとまず何にせよ……………。

何にせよ？

戯言、なんだけれどね——……………

第34曲　からくりピエロ

「今のあなたは、本当にあなた自身が望んでそうだった姿なのかしら？」

そうさわ子先生に問われた時、一瞬時が止まったかのように思えた。

いや、少なくとも僕の思考は真っ白に停止させられた。不意打ちに近いまさかの言葉に、その場の誤魔化し——普段通りの戯言すら思いつかなかったのだ。

完全なる予想外。

まさに一生の不覚。

「何を」戯言でも虚言でも何でもいい。とりあえず、この芳しくない流れを変えなければ。でないと良くない事に繋がりそうな、そんな予感が僕に危険信号を送る。

「突然何を言い出してるんですか先生。言っている意味が全く分からないのですが？」

「本当に？」

さわ子先生が、僕を射抜くような鋭い視線で見つめる。まるで僕の考えている事などお見通しだと言わんばかりの双眼で。

「本当に私の言っている意味が分からなかった？」

「ええ。そりやもう全然まったく」

わざとらしく肩をすくめて、僕は今度こそ戯言を吐き出す。先ほどのように不自然な間を空けないまま言えた事に、独り胸中で安堵の溜め息を吐く。

「だいたい、いきなりどうしたっていうんです？ ああそうか。いつになくシリアスな話が続いたせいで、先生の中の芸人魂が我慢を越えて発狂してしまったんですね、分かります」

「ふーん。そうやってはぐらかすつもりなんだ？」

「……………」

ニヤニヤと含みのある笑みを浮かべながら、嫌悪感を湧き上がらせる双眸を僕に向けるさわ子先生。その神経を逆撫でせんとする表情に、僕の顔面の筋肉も一切固まって能面になる。もはや戯言を言う気分にもなれない。

何なんだ。

なんだっていうんだ。

一体何が知りたいって言うんだ。

人の心に土足で上がるような真似をしやがって。

そんなに僕の傷<sup>トラウマ</sup>を抉り出したいというのか。

ふざけやがって。ふざけやがって——……！！

「——………すう、はあー」

落ち着け。落ち着くんた僕。深呼吸だ深呼吸。クールになれ。こんな安い挑発に乗るな。平静を保て。激情に流されるな。己を見失うな。

さあ、自分に言い聞かせよう。

僕は平気だ僕は平気だ僕は平気だ僕は平気だ。

これぐらい、今までの人生に比べればどうって事ないハズだろー

ー？

「……無理しちゃって」

ようやく思考が正常に戻り始めた頃、さわ子先生がか細い声で何かを呟いた。見ると、先ほどまでのニヤニヤ顔が嘘のように消え失せ、代わりに真剣に満ちた眼で僕を直視していた。

ともすれば、人の身を心底案じたような、慈愛に満ちた眼で――。

はあ……、と無意識に溜め息が漏れた。

本当に、この先生は。

何を考えているのか、さっぱり分からない。

何を目的として発言しているのか、さっぱり分からない。

いや、そもそも目的なんて無いのかもしれない。むしろ意味すら無いのではないだろうか。山中さわ子という人間を完全に把握しているワケではないが、この人は大概適当に生きている側の人間だ。ならば、この人の言葉なんて、その時の気分次第で安易かつ安直に吐露しているのではないだろうか。そう考えると、何だか怒りに我を忘れそうになった自分が馬鹿みたいに思えてきた。

「別に、無理だなんてしてませんよ。至って平常運転です」

これ以上は付き合っていてられない。先生と会話して無駄に神経をすり減らすほどの度量なんぞ、一切持ち合わせていないのだ。これを皮切りに、さっさと退出させてもらおうでしょう。

「話はそれだけですか？ もう用が無いのなら、僕はこれで……」  
「世の中の人間は、大抵の場合三種類のタイプに分類出来るわ」と。  
カテゴリー

別れの言葉も早々に背を向きかけた僕に一切意を介さず、さわ子先生は唐突に口を開いた。

何の前置きも無しに。

……えーと、うん。

どうやら、まだ話は続くらしい。

しかも、こちらの事など全くお構いなしといった感じで。

「一人は成りたい自分に慣れて満足している人間。もう一人は、成りたい自分に一歩でも近づく為に日々努力している人間。まあこのタイプも、ある程度は今の自分に満足している方だとは思うわ」

前者ほどにないにせよね、と指を二本立てて見せるさわ子先生。

うーむ。やはりまだ続くらしい。ぶっちゃけこんな人放っておいて部屋に戻りたいのだが、しかし言葉途中に退出するのも……。

そんなワケで、視線をさわ子先生に向けて、ドアの前で静聴中の今の僕なのであった。

……ヘタレと笑わば笑え。

「そして最後は——」言っ、三本目の指……薬指を立ててさわ子先生は続ける。

「今の自分に満足出来ず、心底自分を嫌っているタイプの人——言わば自己嫌悪欲の塊ね。毎日を卑屈に窮屈に……それでも変わり映えない単調な日々を妥協して、あるいは諦観して過ごしている人間。まあ、あくまでも私の持論なんだけど。それでも今言った三種類に、世の人は分けられると私は思ってるわ。でもあなたの場合は

——そのどれにも当てはまらない、全くもってイレギュラーな存

在だわ。

立てた三本指の内、人差し指だけを残して、さわ子先生は僕を指して言った。

糾弾するように、言った。

「あなたは、そう……まるで今の自分をそうあるべきだと無理やり言い聞かせているみたい。自分を抑え込んで押し殺して消し去って——それで誰かを真似ているように見えるわ。いえ、それだとちょっと語弊があるわね。その誰かさんにあなたは、音無遙さんは成り代わろうとしている……違うかしら？」

「——」

ズブズブと。

ズタズタに。

僕の内面が侵されていく。壊されていく。

誰も立ち入ろうとはしなかった流域に。

誰も立ち入らせまいと頑なに拒絶していた死線の境界側に。

「そうだと考えると、今までのあなたを見て疑問に思っていた事がある程度氷解するのよね」

さわ子先生は言葉を紡いでいく。

眼鏡の奥の瞳を、鈍く光らせながら。

「いつもは軽佻浮薄にして破天荒な言動を繰り返して飄々としていくようにだけれど、一瞬何気ない時に生気の無い暗い表情を見せる時があるのよね。普段はそんなナイーブな一面だなんて、おくびにも出さないようにしているけれど、でも、それがあなた本来の姿なんじゃないのかしら？」

「……………」

何も言えない。何も言い返せない。

何も言葉が思い浮かばない。

「今のあなたは、私の目から見たらとても滑稽に映るわよ？ 人は誰かに成れ代われたりはしないのに。あなたの自身もその事を理解しておきながら、その事実を頭の片隅に置いて誰かになろうと

必死になっている。本当に滑稽だわ。むしろ哀れだわ。人は一人で完結しているもののな。誰かに代われるだけの余地なんてどこにも有りはしないのに。それなのに、完結したモノに別の完結したモノが代わろうとしているのだから。それでもあなたは、別の誰かになりたいというの？ 神か悪魔にでも命じられるまま忠実に日々を生きていくつもりなの？ それであなたは本当にいいの？ 言っちゃなんだけど、今のあなた、とても歪よ——とことん歪曲してしまっているわ。そう——まるで、道化師にすらなれなかった道化人形みたい。そうね、さながら……」

——ぜんまい仕掛けの道化師——  
からくりピエロ

「……そのものね」

「……………」

グラツと——

世界が一瞬だけ傾いたように見えた。

いや違う。僕の意識が途絶えかけたんだ。

これ以上さわ子先生の言葉を聞くまいと。

“僕”という存在が破壊される前に。

足がふらつく。地に足が付いているかどうかさえも分からない。

いや、まだ倒れるわけにはいかない。ここで倒れたりしたら、本当に“僕”という存在が終わりかねない。

まだ立つんだ。こらえる。倒れるな。自分を見失うな。自分を保て——。

「音無さん、もう一度だけ訊くわよ」

さわ子先生は言う。

ふらつきかけている僕に構う事なく、さわ子先生は言う。

「あなたは何になりたいの？」

僕は何になりたかったのだろうか？

「あなたは何になりたくないの？」

「——本当のあなたは、一体どこにいるのかしら？」

僕は僕は僕は僕は僕は僕は僕は僕は僕は僕は僕は僕は

完全に視界が黒く包まれる。重心が安定しない。貧血にも似た浮遊感。虚脱感。無力感。

「ごめんなさいね」と。

さわ子先生の、腕の中だった。

「本当にごめんなさい。あなたの本心をどうしても聞きたかったものだから……。でも、少し追い込み過ぎたみたいね……。」

さわ子先生は、それまでのシニカルやシリアスな雰囲気とは打って変わって、聖母のような優しい表情を浮かべて、僕の顔を覗き込んでいた。そのまま僕の肩を抱きかかえて、近くの椅子まで連れ込んでいく。

そう言つて、未だふらついた状態の僕をゆつくりと椅子に座らせた後、さわ子先生はそつと僕の頭に手を置いて撫で始めた。

あれ？——この感覚。

いつか、どこかで——……。

「大丈夫。必ずあなたを救ってみせるから」  
ぼんやりと視界が霞む中で。

さわ子先生は、いつかどこかで見た事があるような懐かしい笑顔で、僕にこう言った。

「それが“あの子”の……とても大切だった親友との約束だから——」

### 第35曲　ゆるりゆるり（前書き）

今回は待ちに待ちわびたあの方、澪しゃん視点による語りとなっています。イエーイ！

で、具体的に誰が待ちわびていたかと言うと、そりゃ僕とか作者とか俺とか水夏とか（後略）。

いつもより多いメタ表現に注意！

### 第35曲　ゆるり

「わあッ。露天風呂だあッ！」

「こら唯と律！ 湯船に入る前にまず先に体を洗え！ 常識だろこれ！ ていうかこのやり取り、ものすごくデジャヴを感じるぞ！？ 具体的に言くと第29曲冒頭あたりの！」

「……あの、澪先輩？ 第29曲とか一体何の話ですか？」

「おい澪に梓ッ。そんな所にいないで、お前らも早く来いよ。見晴らしが良くて絶景の露天風呂だぞッ！」

「でも本当だったら、原作じゃあ銭湯みたいな浴室だったハズなんだけどね。私としてはこっちの方が豪勢な感じで断然良いけど」

」

「唯イイ！ 軽々しく原作とかメタ発言するな！ 『けいおん！』の世界観が壊れかねないだろうが！」

「いや、澪先輩の第一声の時点から既にどうかと思うんですけど……」

……

「し、しまった！ つい癖で……。いやこれはだな梓、言葉の綾と言うか……」

「言葉のあーや？」

「言葉の“綾”だ！ いや本名も綾だけど、ひとまず涼宮ハルヒの中の人とは何も関係ねえよ！ ていうか前回のネタをここまで引っ張ってくるなよ律！」

「……澪ちゃん。 “前回のネタ”とか、また墓穴を掘るような事言っちゃってるよ？」

「気にしてやるな唯。どんなボケでもツッコまずにはいられない——言わば澪の生き様なんだよ、あれは。英語で言くとワイフワープ」  
「それを言うならライフワークだ！ 一体どこの奥さんを次元移動

させる気なんだお前は！　だーもう！　何でもいいからさっさと体を洗え——！！」

### 第35曲　ゆりゆり

「はあ。やれやれ……」

そんな嘆息混じりの呟きと共に、私はゆつくりと湯船に足を入れ、そのまま腰を下ろしてお湯の中へと体を預けた。

熱過ぎず、かと思つてぬる過ぎるワケでもない程よい按配の湯が、練習などで疲れ切った私の体に染み渡る。湯船に浸かっているだけで体中の筋肉がほぐれ、眠気を誘発するくらいとても気持ち良い。あ。極楽極楽。

改めて露天風呂をまじまじと観察すると、周りはいかにも高級そうな重石で囲われて、ちょっとした温泉気分な仕様となっている。そして重石の間に古風な竹筒から突出しており、そこからダバダバとお湯が流れては小刻みに波を作っていた。そしてすぐそばには様々な観葉植物が置かれており、目の保養もバツチリな完全にここだけ別世界な造りとなっている。ここはどここの高級旅館なんだと勘違いしそうなくらいだ。

それと、律が見晴らしが良い（海もちゃんと見える）と言う事だけあって、ここは三階のベランダに設置してある露天風呂なのであるワケなのだが、しかしそうなると、こんな竹筒からどうやって水を引いているのだろうか？　私みたいな一般人じゃ考えも及ばない、すごい科学の力でも使用しているのだろうか？

それはそれとして、だ。唯と律のせいでお風呂に入るのにえらく手間を取られてしまった。あれから——露天風呂へと到着した後、我先にと駆けだした唯と律に、ちゃんと先に体を洗うよう指示したまでは良かったのだが、いかんせん奴らがちゃんと言う事を聞かせ

るのに時間が掛かった為、結局私が最後に湯船へと入る羽目になつてしまったのだった。

まったく、本当に。

どうして私がこんな苦勞をしなければならぬのやら……。

何だかもう、こうして思い出しただけ怒りがまたぶり返してきた。あーいや、せつかくの露天風呂（しかも、今後二度と入られるかどうか分からないくらい豪奢な）なんだ——そんな野暮な事を考えるのはやめておこう。今は、この至福な時をたっぷり堪能したい。それに生来の几帳面な性格の為か、体の隅々を洗うのに時間が掛かったせいも原因として否めないワケだし。

うん、よし。そう決まったら存分に露天風呂を満喫しようそうしよう。

「あれ？ 唯の胸、何だか去年見た時より大きくなってないか？」

「うん。大きくなつたよー。去年より1センチくらいー」

「なぬい！？ 私なんて去年の時から全然変わってないのに！ むしろ一昨年から全く成長してないっつーのに……！」

「貧乳はステータスだよっちゃん！」

「うるへーッ！ そんな気休めにもならない言葉を掛けられたって、余計虚しくなるだけじゃわい！ ちきしょう！ こんな胸、こうしてやる！ こうしてやる……！」

「あはははッ！ やめてりっちゃん！ くすぐりたいッ！」

人がゆつくりとくつろいでいる最中、突如として私の目の前で始まった唯と律のじゃれ合い。というより、ほぼ律の腹いせによるセクハラに変わりのない行為になり果ててしまっている。やれやれ、胸ぐらいの事で何をそこまでムキになっているのやら……。大体、それだけスリム（遥ほどじゃないけど）なんだから貧乳くらい気にする事なんてないだろうに。私なんて、私だなんてなあ！ ああよそう。余計悲しくなる……。

「皆さん、すぐく元気ですよー。あれだけ騒いだ後なのに」

と、私がお腹回りのせいにゴホンゴホン！ もといお腹回りに詰

まった夢と希望（決してぜい肉などとは言わせない）の事で考えに耽っている、いつの間にか私の隣りまで来ていた梓が、呆れ半分感心半分の目線を唯達にやりながら呟いた。

私のように髪を湯に触れないよう頭に巻いたタオルを片手で整えながら、「海で遊んで時間いっぱい演奏して、あまつさえ肝試しまでした後なのに、よく体力が持ちますよねー」と呆れとも感心ともつかない微妙な表情を浮かべて私に言う梓。

うん。日頃から何となく思っていた事ではあるけど、梓って、あんまり唯と律を先輩として見ていないところがあるよな。今の奴らを見て敬えと言う方が無茶な話なのかもしれないけれども。つくづく残念な二人である。

「きつとアイツらの体力は底無しなんだよ。常にフルパワー放出で、かつエネルギー無限大っていうか」

「もはや人間とは言い難い表現の仕方ですね……」

と、苦笑する梓。

「だけど、それも遊んでいる時限定だけだな。勉強の時なんかはスイッチが切れたようにだらけているし」

「あー。そういうえば、たまに部室で勉強会を開く時も、あの二人だけテンションが灰になってますものね」

「ホント真っ白になってるもんね」

リングの上で燃え尽きたジョーみたく。

ちなみに、遙も勉強会に呼ぶ事があるのだが（どうせ試験直前で私に泣きついて来るのは目に見えているし、要は予防策だ）、何故だかそんな時に限って捕まらない、ほんと困った奴なのである。おそらくは奴の直感か何かが働いて、勉強会に呼ばれる前にとつとと逃げているのだろう。こういう時だけ無駄に勘の良い奴め。

そういったワケで、結局真面目に勉強しているのは、私とムギー―それと梓（下級生ではあるけれど、私達上級生なら教えられる事も多いし、もののついでだ）を含めて三人だけという結果に終始するのである。全くもってやれやれな話だ。

「……あれ？　そういえば――」呟きつつ、右、左と周囲を見渡す。「ムギはまだ来ていないのか？　さっきからずっと見当たらないような気がするんだけど……」

確か、お風呂までは私達と一緒に付いて来てたハズなのに。騒ぎ立てる唯と律にずっと意識が向いてしまっていたせいで、すっかりムギの存在を忘れてしまっていたけれど、いつからいなくなっていたんだろう？

「ムギ先輩なら、ちょっと実家に電話する用を思い出したとかで、ここまで来る途中に自分の部屋に帰っちゃいましたよ。時間が掛かりそうだから、先に入っていてほしいとも言っていました」

「そっか……」

道理でムギの姿が見えないワケだ。しかし、ムギと別れてからだいぶ経っているけど、そんなに時間が掛かる用事なんだろうか？　ひよっとしたら、私達がお風呂から上がった頃になっても来ないかもしれない。

まあ、ムギは生粋のお嬢様だし「むきゃーッ！　何で私の胸は唯達みたいに成長しないんだー！？　」ご両親も何かと「憎い！　私の目に映る全てのデカ乳が憎い！」心配して「ええい！　こんな胸！　こんな胸――（もみもみもみもみ）」

「――って、さっきからどこ触ってんだアア――！！」

「ぐへエ！？　」

どさくさに紛れて私の胸を揉みまくっていた律の頭に、渾身の力を込めて脳天チョップを喰らわせた。女の子としてどうかと思う奇声を上げた後、「いきなり何すんだよ濡っつ」と非難がましい涙目で私を見上げながら、痛そうに頭をさする律。

「それはこっちのセリフだ！」また揉まれないよう片腕で胸を守りながら、私は語気を荒げて先を紡ぐ。

「ひ、人のむむむ胸を散々いじくり回すだなんて、一体どんな神経してんだお前は――」

「別にいいじゃんかよー。同じおにゃの子なんだし――。遥にだって

いつも揉ませてやってんじゃん」

「揉ませてなんかねえよ！　アイツが勝手に強引に揉んでくるんだ！」

しかも、大衆の面前だろうが所構わずに平然とな！　こっちとしては不愉快極まりない話だ。

「いいじゃんちよつとぐらい」ワキワキとイヤらしい手付きで両手を上げながら、再度律は私に近寄る。「遥だけじゃなく私をも魅了——もとい嫉妬させるその理想的な胸を、私にも揉ませて少しでも巨乳パワーを分け与えてくれよ」

「そうか。じゃあそのまま理想を抱いて溺死しろ（グイグイ）」

「ちよ、漣さん？　そんな力いっぱい両手で頭を押さえられたら、頭が湯に浸かって息ができなくべべごぼぼ！」

バタバタと暴れ回る律に構わず、私はより一層力を増して律を底へと沈めた。よし。これでちよつとは静かになるだろう。

「り、律先輩！？　え、大丈夫なんですかこれッ！？　沈んだまま浮いてこないんですけど！？」

「大丈夫だよ梓。このぐらいで死ぬような奴じゃないから」

顔を真つ青に動揺を露わにする梓に、私は一仕事をやり終えた爽やかな笑顔を浮かべてそう諭した。どうせギャグ補正（あ。またメタ発言をしてしまった）が働いて、次回までにはピンピンしてるだろうし（遥なんかが良い例）、気にするだけ無駄無駄無駄なだけだ。

……何だか私、着々とこの世界観に毒されてしまっているような気がする。いいのだろうか、今のままで。

「りっちゃん、こんな所で寝たら風邪ひいちゃうよ？」

と、沈めてからしばらくした後、ようやくプカプカと溺死体みたく浮かび上がった律の体を指で小突いて、唯は言う。

「それにお尻もまる見えでみつともないよ？　通常放送だと視聴者の皆さんからは湯気で見えにくくなってるけど、DVD版だと大抵湯気が取れる仕様になるから、そのままだとすごく恥ずかしい思いをしちゃうよ？」

「何の話だ、何の」

この世界はアニメか何かなのか？

いや、実際アニメ化して二期まで製作されて、今年（2011年）の冬には劇場版が公開される予定だけでも！

京アニの皆様、本当にありがとうございます！！

「おお！ さすがは澪ちゃん！ 地の文でツツコミを入れるだけでなく、ちゃんとアニメや劇場版の宣伝も絡めるだなんて！ そこに憧れる縛れるよ！」

「縛られるなよ！ どんなプレイだよ！ そこはせめて痺れてほしかった！」

「唯先輩と澪先輩が、さっきから何を言っているのかさっぱり分からないんですが……」

と、一人私達の話に付いていけず、途方にくれる梓なのであった。それはそれとして、そろそろメタ発言もいい加減にしておかないとな。色々と収集のつかない事になりかねないし（今後の展開も含めて）。

そんなワケで、露骨に閑話休題。

「さてと」頭に巻いたタオルをほどき、私はザパアと波を立てて腰を上げる。「そろそろ上がるのかな。疲れたから部屋に戻ってゆっくり休みたいし」

「あ。じゃあ私も澪ちゃんと一緒に上がろーっと。もうすぐ『ざわざわ森のがんこちゃん』が始まる頃だしね」

「なぜに朝の子供向け番組がこんな夜中に……」

一体誰得なのだというのだろう。小さなお子さんなら、もう寝ている時間帯だろうに。

ああ、いた。少なくとも一人だけ。爛々と瞳を輝かせていかにもウキウキとしている、私と同じ現役ジョシコーサーが目の前に。

……唯さんにおかれましては、その少年のような穢れの知らない心をいつまでも大事にして頂きたいと切に願う。

「それで、あずにゃんはどうするの？ ついでに私達と一緒に上が

る？」

「いえ。私はもう少しだけ入ってます。長湯、好きなんで」

それに律先輩の様子も気になりますし、とすぐそばで浮いたままの律に視線を向ける梓。私としては、別に放っておいても問題ないと思うんだけど。と言うと私が冷血な人間だと思われかねないので、あえて黙っておく事にする。具体的に誰とは詮索しない方向でご了承ください。

「それじゃあ梓、私達はお先に上がらせてもらうよ。あまり長湯し過ぎちゃダメだぞ？」

「じゃあね、あずにゃん」

そう笑顔で梓に手を振った後、私と唯は一緒に脱衣場へと向かって歩き出した。

「ところで澪ちゃん。サブタイトルに『ゆりゆり』って書いてあった割には、読者サービスのな百合っぽい事はあまりしなかったけれど、これで良かったのかな？」

「それを言っただけ」

### 第36曲 名もなき小さな恋のうた (前書き)

今回はこの小説の中において、どうにか原作キャラを保っているあずにゃんこと梓視点のお話です。何でだか澪しゃんの時よりも筆が乗ったという不思議。

そしてそのせいなのか何なのか、今まで一番文字数が多くなったという摩訶不思議。

### 第36曲 名もなき小さな恋のうた

「あー苦しかった。まったく、溇のせいでとんでもない目にあっちまったぜ」

「あ。溇先輩の言ってた通り、本当にあっさり復活しちゃった……」

「おお梓。おはよう、もとのおそようさん。ってありや？ 他のみんなはどうしたんだ？」

「溇先輩と唯先輩なら、既に上がって自分達の部屋に戻っちゃいましたよ」

「なにゅー！？ 私が今までの人生を脳内でスクリーン上映している間にかッ！？」

「走馬灯を見ていた分には、一応危険な状態だったんですね……」

「あんちくしょう共め！ 人が死にかけてたつーのに、自分達だけ風呂から上がるなんてどーいうこった！ それでも友達か！？

少しは私を心配して残ってくれた梓の事を見習えってんだッ！」

「あ、いや。それも間違いじゃないですけど、理由としては二の次です。ただ単に、もう少しお風呂に入っていたかっただけなので」

「ブルータス、お前もか！ いや、え？ ていうかマジで？ さすがに冗談だろそれは？」

「え？」

「え？」

「……………ニコリ（苦笑）」

「……………ニゴリッ（舌を噛む音）」

「り、律先輩イイッ！？」

### 第36曲 名もなき小さな恋のうた

「何だ冗談だったのかよー。危うくショックのあまり、この世からさよならB y e B y eするところだったぜー」

「あはは……」

と、私の言葉を聞いて安心したのか、笑みを零しながら喋る律先輩に対し、苦笑を返して場を流した。実のところ、舌を噛んで自害しかけた律先輩を止めんと「嘘です嘘です！ 実は冗談でしたエヘっ」と、とっさに吐いた嘘だったのだけど、どうやら鵜呑みにしてくれたみたいだ。今更ながらあれは至って本音全開でした——だなんて、口が裂けても言えやしない……。

ひとまず、機嫌を直してくれた律先輩にホッと胸を撫で下ろしつつ、私は湯船の中で軽く手の体操を始める。ギターを弾いているとどうしても指が疲れてしまうので、こういった体操が欠かせないのだ。

ある程度指の関節をほぐし終えたところで、ふと気付く。そういえば、こうして律先輩と二人っきりだなんてシチュエーション、思い返してみれば初めての事かもしれない。いつも騒々しい律先輩の事だから、私に対してもマシングントークでくるのかとつい身構えていたけれど、予想に反してそんな事もなく、正直ちょっと拍子抜けな心境だった。

肩だけ外気に触れているせいか、少し肌寒く感じたので、軽く掬ったお湯をそのまま肩にかける。ふと見ると、律先輩も私と同じように首へとお湯をかけていた。そんな律先輩とたまたま目が合い、互いにぎこちなく笑みを浮かべる。そしてまた視線を湯船へと移して固定。そのまま何となく沈黙も含めて維持の方向に。

……う。心なしか、ちよつと気まずい。別に沈黙が苦手というわけじゃないけれど、やたら静かな律先輩と二人つきり——という今までにない現状が、私を不安にさせているのだと思う。律先輩の方から何か話題を出してくれたら、話を広げられるのだろうけど、当

人は心地良さそうに瞼を閉じて、いかにもお風呂を堪能中といった感じで、話し掛けてくれるような雰囲気でもないし。かと言って、私の方から取り留めの無い内容で話し掛けるのも、せっかくお風呂を満喫している律先輩を邪魔する形になってしまいそうで、どうにも憚れる気持ちになってしまふのだ。

こんな時、誰でもいいから来てくれると助かるんだけど。ムギ先輩は確か当分は来れないと言っていたから期待できないし。先生……は、まだ食事中かも。そうになると、残るは遥先輩だけになっちゃうのか。うーん。でもあの人があると別の意味で大変な事（主にセクハラとか）になりそうだし、早く来てほしいようなそうでもないような……。

あれ？ よくよく考えてもみると当の遥先輩、いつになったらお風呂に来るんだろう？ 先生にご飯を準備するだけなら、もうとっくに済んでるハズだろうし、いい加減こっちに来てもいい頃だと思うんだけど……。

「きつと、さわちゃんと積もる話でもあるんじゃないか？」

「ふえー！？」

どうして私の考えている事が分かったの！？

「梓、今どうして考えている事が分かったんだろうって思っただろ？」 訊ねる前に、律先輩がまたしても私の心中を見抜いて言葉を紡ぐ。

「タネを明かせばだな、さっきから心の声がだだ漏れだったぞ梓」

「ふえー！？」

二度目の驚愕。という事はひょっとして、二人つきりで気まずいという下りの部分から既に心の声を漏らしていたって事なの！？

「別に私の事なんて気にせずに、ゆっくりお風呂を堪能すればいいのに」

せっかくこんだけ豪華なお風呂なんだしき、と律先輩は周囲に視線を巡らせつつ「ま、梓の独り言が面白くて、わざと黙っていた私にも問題があっただろうけどさ」

「そ、そうならそうと何で早く言ってくれなかったんですかーッ！」  
今まで気まずい思いをしてまで律先輩に気を付かっていた私って何だったの！？ ああ恥ずかしい！　すごく恥ずかしい！　何よりも、さっきまでの私を律先輩に観察されていたという羞恥の事実が……っ！！

うっ。不覚。一生の不覚だ。律先輩も律先輩で人が悪過ぎるよ。何も言わず黙って独り言を呟く私を見て面白ってたなんてー！

「あっはっはっ。あー。すげー楽しいー」

「むう。そんなに笑わないでくださいよ。それだけ、私を見ていて面白かったって事なんでしょうけど……」

「いや、そういう意味じゃなくてさ」未だクツクツと含み笑いをしつつ、律先輩は言葉を紡ぐ。

「梓とこうして話したり、みんなで海で遊んだり肝試ししたりとか、さ」

「そういった意味ででしたか……」

私単体という意味じゃなく、今日一日の事を指して言ってたワケか。律先輩は。

「でもそれなら、去年も似たような事してたハズですよ？　よく唯先輩達に去年の合宿の話を聞いたりしますけど」

「そりゃ去年は去年で楽しかったけど、あの時には四人しかいなかったからな。さわちゃんも誘ったんだけど、何か外せない用事があるとかで結局来れなかったし。それに――」

と、話しの途中で、唐突に律先輩は私の頭に手を置いて撫で始めた。「今年は待望の新人部員が入ってくれた事だしな」

「ちょ、乱暴に撫でないでください。せっかく巻いたタオルがズレちゃいます」

「あは、悪い悪い」

一笑した後、ようやく私の頭から手を離す律先輩。

「もう……」

「後は何と言っても、遥の存在が大きいな」

乱されたタオルを巻き直しつつ「遥先輩が、ですか？」と私は訊き返す。

「おお。梓は知らないだろうけどアイツ、最初は見学とか体験入部とかじゃなくて、単にケーキを食う目的だけで来やがったんだよ。そんでいつの間にやら部員でもないのにすっかり居着いちまってさー。まあいいかって私も見過ごしちゃったせいもあるけどもな」

「はあ。何と言うか、遥先輩らしいですね……」

他人の都合なんて一切お構いなしと言った風な感じだしね、あの人。

「けれど、おかげでずいぶんと賑やかになったけどもなー。元から騒がしい所だったけど、遥がいるだけで三割増しっていうか。梓も、遥がいるのといないのとじゃ全然違うと思うだろ？」

「んー。言われてもいればそうかも、という感じでしょうか？」

と言うより、もう遥先輩が部室にいるなんて当たり前のように日常と化していたから、そんな風に考える事すら無かったワケだけだ。

「今だから言える事だけど、最初の頃に比べて遥もだいぶ変わったもんだよ」

「え？」

ふと何気なく漏らされた律先輩の言葉に、私を一瞬耳を疑った。

遥先輩が“変わった”？　どういう意味？　それって、私が知っている遥先輩とは全然違った姿を、律先輩は知っているっていう事？　それも、今の遥先輩とは想像も付かないような何か――。

「あれ？　その反応からして梓、遥が転校したばかりの頃とか知らなかったのか？」

「え？　あ、はい」

「そつか。てつきり誰かから聞いてるもんかと思ってた」

さすがに遥本人がわざわざ話したりはしないだろうけど、と律先輩。

「あの、律先輩。遥先輩って、そんなに転校した頃と違ってるんで

すか？ その、すごく暗かったとか……」

「いやいや。誤解が無いように言っておくけど、殊更暗い奴だったワケじゃないぞ？ 話しかければ笑顔で応対してくれるし、頼み事をしてもし嫌な顔一つせずに引き受けてくれる奴だったし」

ただ、な——と言って少しだけ間を開けた後、

「あいつ、自分からは絶対話しかけない奴だったんだよ」

と、その時の光景を思い出しているのか、寂寥感の入り混じった声でそう続けた。

「遥先輩が、ですか？」

「うん。話しかければ普通に話すし冗談も少なからず言っけれど、決して自分の方からは話しかけてこなかったんだ。んで、話しかけられない時は黙々と小説読んで、露骨に近寄んなオーラを放ってたワケじゃないけど、でも少し話しかけづらい雰囲気はあったな。何だか、物静かでちよつと気難しそうな文学少女といった感じでさ」

「遥先輩が……？」

「全然信じられないだろ？」

……はい、と私は重々しくも素直に頷く。

だってあの遥先輩が——いつだって賑やかで周りの空気なんて一切お構いなしに好き勝手している傍若無人のあの遥先輩が。

律先輩曰わく、物憂げな文学少女みたいだっただなんて……。

「あはは。そりゃまあ、今の遥しか知らない奴にしてみれば、その反応は無理もないよな」

と、驚愕のあまりしばらく言葉を失っていた私に、律先輩がふいに笑い声を上げて言う。

「私も自分で話してて嘘くせーって思うぐらいだもん。それだけギヤップがあるって事なんだろうけど」

「あの、まだにわかには信じ難い話なんですけど、それが本当だったとして、何がキツカケで遥先輩は今のようになっちゃったんですか？」

「キツカケ、か」

私の問いに「うーん」と腕を組んで長考して見せた後、「キツカ

ケがあるとするば」とおもむろに口を開く。

「やっぱ唯のおかげなのかな。一番最初にアイツと仲良くなったの、唯だったし」

「唯先輩が？」

「おう。ほら唯って、周りの雰囲気とか全く気にしない生粋の天然お気楽娘だろ？ だからいつしか遥を周りが敬遠するようになってきて、そのせいでますます近寄り難い感じになってた時、そんな重い雰囲気まるで無視して、唯が人懐っこい笑顔を浮かべて話しかけたんだよ。しかも今日テレビやってた占いとか、コンビ二で新発売されたデザートとか。ホントどうでもいいような話をな」

ちよー笑えるだろ、可笑しそうに口角を吊り上げる律先輩。

うん。唯先輩なら、絶対そんな微妙な雰囲気感じ取れなさそう。

何て言うか、自分に意思にすぐく忠実といった感じで。

律先輩の話を聞いただけでも、その時の光景が目には浮かぶようだ。「最初は遥も適当に相手してあしらってた風だったんだけど、だんだんとすげー楽しそうに笑うようになってさ。そしたらいつの間にやらアイツら、すっかり仲良しになってて……きつと唯のあのゆるい雰囲気、いつしか気を許すようになってしまったんだろうな」

「あー。なんとなく分かるような気がします、それ」

どうしてだかあの屈託のない無防備な笑顔を見ると、何でも許せちゃう気分になっちゃうのよね、不思議と。

腹を立てている自分が馬鹿らしく思えてくるというか。

思うに遥先輩も、そんな何の打算も感じさせない、どこかのほほんとした雰囲気纏っている唯先輩に、自分でも気づかない内に心を許すようになったんじゃないだろうか。

軽音部の先輩方に対して、意図的に溝を作っていた、かつての私のように。

その大部分は、遥先輩が私の相談に乗ってくれた事によって解消されたのが何よりも大きいのだけれど。

それでも、唯先輩のあの笑顔を見て、少しだけでも心を解きほぐ

せるようになったのは、まぎれもない事実なのだから……。

「よくよく思い出してみても、あんな状態の遥によく話しかけたもんだと思うよ、唯は。それも遥が転校してから二・三日経って風邪が治ってからで、その時が初めての対面だったにも関わらずにさ」私ですら、遥から距離取ってたぐらいなのに。

そう最後にか細く——ともすれば聞き漏らしそうなくらい囁いた律先輩の言葉に、私は「え？」と思わず目を丸くして疑問符を上げる。

「……ちよつと意外かも、です。律先輩って、誰にでも気兼ねなく話せちゃう……苦手なタイプとかいない人なんだろうなあって、私ずっとそんな風に思ってた」

「いや、私にだって苦手な人間の一人や二人いるさー。それこそ唯ぐらいじゃないか？ 苦手な奴がいらないなんて」

そうかもしれないね、と私は苦笑を浮かべて相槌を打つ。むしろ唯先輩なら『地球人類みんな友達』とか平気で思っていそう。「でも、遥先輩が苦手だったなんて、やっぱりちよつとビックリです。それも近寄れないぐらいだったなんて」

「いやいや、何も近寄れないって程までじゃなかったけど……まあ、うん。でも少なくとも、コイツとは仲良くなれそうにないない、とは思った……かも」

と頬を掻きながら、言いづらそうに言葉尻を濁す律先輩。

「なんつーか、その頃の遥って、周りの人の事なんてまるで視野に入ってない——いや、そうじゃないな。目に映る全てのモノがどうでもいいって感じに見えてさ。何だか、コミュニケーション能力が備えられただけのロボットみたいっつーか、人間らしくないっつーか。だから誰かに話しかけられて笑顔で応対してんのも、ぶっちゃけ他人とのトラブルを避けている為だけにやってるだけで、別に人と関わりたいたなんて一切思ってるんじゃないかな、とか思ってた。ひょっとしたら、他人を鬱陶しいとすら思ってたんじゃないかな？」

——というか絶対そう考えてたよ、あの頃のアイツは。

そう言つて、律先輩はこれ見よがしに呆れの混じつた溜め息を吐いた。

それは律先輩らしくない——仲間想いだと誰からも思われている律先輩だからこそ、とても似つかわしくない表情だった。

「でも、そんな遙が今のように変わったのを見て、ちよつとだけ自分の事が恥ずかしく思つちまったワケなんですよ、これが」

テヘヘ、と今度は自嘲じみた笑みを浮かべて見せる律先輩。

「恥ずかしく、ですか？」

「うん。いや、さっきまで遙に対して何だかんだ言つちまっただけど、よくよく考えてもみれば、ちゃんと正面切つて接した事も無い奴が、遙の事をどうこう言う資格なんてないじゃんって。唯とあんなに楽しそうに笑つて話している遙を見て、どうしてもロボットみたいとか人間らしくないだとか思つちまっただろうつてさ。勝手な先入観だけで人を決めつけていた自分が、何だかすごく愚か者に思えちまつて。それでちよつとだけ自己嫌悪に浸つちやつた時期があつたりしまして。あはは……」

そう努めて明るく振る舞う律先輩だったけれど、今でもその頃の自分に恥じているんだろうな——というのが、言葉にはしなくても言外に感じ取れた。

そっか。律先輩が今話しているのは遙先輩の事でもあつて、律先輩自身の事でもあるんだ。

後悔とか。

反省とか。

そういつた過去の自分に対する、断罪に思えた。

それは、本来ならば遙先輩に向けるハズだった懺悔の羅列。なのにそれを今、私が聞いている。

遙先輩の代わりに、私が聞いてしまっている。

どうしてそれを私に聞かせるのかは分からないけれど。

何か、意味があつてしている……そんな風に思えた。

「ちよつと前にも、つい遙にでしゃばつた事言つちまっだし、後で

謝らなきゃなー」

不意に漏らされた、独り言ともつかない独白を聞いて、私は小首を傾げる。私が知らない間に、遙先輩と律先輩とで何かあったのかな？

そんな疑問を抱いている内に「それはまあ、とりあえず置いといて」と、律先輩は再び口を開く。

「ひとまずそんなワケでさ、今度はちゃんと遙と向き合おうって、私決めたんだ。最初のキツカケは唯だったけど、次は私が遙と友達になって、アイツの色んな一面を引き出してやるんだって。ぜってーアイツに、私と友達になって良かったって、そう思ってもらえるように、さ」

そう語る律先輩の横顔は、眩しく見えるほど、とても凛々しかった。

決意と意志のこもった力強い瞳を、虚空へと這わせて。

「……………」

「ん？ 急に黙り込んでどうした？ 何か引つかかるところでもあったか？」

「あ、いえ。そうじゃなくて……」

慌ててかぶりを振り、私は先を続ける。

「何も考えていないように思えて、ちゃんと周りの人の事を見てるんだな〜って、思わず感心しちゃいまして。律先輩って、その場のノリだけで生きている人だと思ってました」

「あつはつはつ。伊達に部長はやってないぜ！」

えっへん！ と薄い胸を張って見せる律先輩。ちよっと調子付けせてしまったかも。

でも、何だろう。不思議とこっちの方が——いつもの律先輩の方が妙にホッとしている自分がいるのは。やっぱり、律先輩にシリアスはどうにも向いてない気がするなあ。遙先輩と似た感じで。

と言ったら腹の虫を悪くするかもしれないから、口には出さないけども。

閑話休題。

「ともかく真面目な話、すごく素敵だと思いましたよ。律先輩の事を見直しちゃいました」

「う。や、やめろよー。マジになって言われるとさすがの私も照れるぞ……」

言つて、顔を紅潮させる律先輩。本当に照れているみたいだった。うわー、シリアスな律先輩も珍しかったけれど、照れる律先輩もこれはこれですごくレアだ。幼なじみの澪先輩ですら、あまり見た事の無い表情かも。

「さ、さーて。そろそろ上がるのかな」

と聞こえよがしに言つて、律先輩は大粒の水滴を散らしながら、その場で立ち上がった。まだ顔が赤いから、私といるのにいたたまれなくなつたんだろなあ、きつと。

「そっいや、梓はまだ入っているのか？」

「はい。まだもう少しだけで入つてようかと」

「そっか。んじゃお先に」

と軽く手を振つてみせた後、湯船から上がつてパチャパチャと水音を鳴らしながら、脱衣場へと歩を進める律先輩。そんな律先輩の後ろ姿を少しの間見送った後、私は外の景色へと視線を戻す。

ふう。何だか肩が凝つちやつた。律先輩のいつにない真面目な話に、無意識下に体を緊張させていたのかも。お風呂上がりに、軽くストレッチしておこうかな。

「あ、そうだ。おーい梓」

「？ はい？」

不意に呼び掛けられ、私は再び律先輩の方へと視線を戻す。そこには、脱衣場の戸口へと手を掛けかけた律先輩が首だけ私の方へと向けて、

「いくら遥の事が好きだからって、あまりジロジロ見るのもどうかと思うぞ〜？」

と、思いもがけない事を言った。

「——っ！？ は、え！？ い、いきなり何を……！」

「さーて。何の事やらね？」

と、ニヤニヤと見ているだけで苛々してくる卑しい笑みを浮かべながら、律先輩は戸口を閉めて今度こそ姿を消した。

そして戸口の向こうから聞こえてくる、「伊達に部長はやってないっ！」という意味深な鼻唄。きっと私にも聞こえるように、わざと声量を大きくして言っているに違いない。その無駄極まりないな配慮が、余計に腹正しい。

しばらく怒声を上げなくなる気持ちを抑え込んで堪えしのんでみると、ようやくと鼻歌が聞こえないようになった。きつと着替え終えて、自分の部屋にでも戻ったのだろう。一体何だったのだろう、あの妙に腹立たしかったテンションは！

やれやれと一息吐き。律先輩がいなくなったのをしっかりと確認してから、自分知らない内に立ち上がっていたのに気付いた。律先輩の言葉に驚愕して、反射的に立ち上がってしまったみたいだ。

体が冷えないよう湯船へと体を沈み直して、律先輩の言葉を頭の中で反芻する。

私が遥先輩の事が好き——？ そんなハズない！ だって同じ性別の女の人なのよ？ 好きだなんてなるハズが——。

だからと言って、遥先輩の事が嫌いというワケじゃあ、決してない。私が部活を続けるかどうかで悩んでいた時も、子猫を拾ってその処遇に困っていた時も、遥先輩は親身になって相談に乗ってくれた。そんな良い人を、嫌いになんてなれるワケがない。

故に、私が遥先輩の事を慕っているという気持ちは、紛れもなく本物だ。その事実には嘘偽りはない。

だから、敢えて言うなら、私は遥先輩が好きという事になるのだろう。恋愛感情ではなく、あくまでライク的な意味で。

そう——そうなんだ。私は遥先輩が好き。でもそれは、先輩とし

て慕っているだけで、恋愛感情ではないのだ。うん、それで間違いない。

あれ？ でも律先輩の言い草だと、私がずっと遥先輩に視線を向けているみたいな感じだった。まるで自覚は無いけれど。知らず知らずの内に、いつも遥先輩を見つめていたって事？ それもずっと前から。

あれ？ あれれ？ やっぱりそれって、恋愛感情になるんじゃない？

「いやいやいやいやそれはないないないない！」「首が折れそうなほどブンブン振って、自分の考えを必死に否定する。」

そんなハズ無い。そんなハズ無いよ！ 違う。これは何かの間違い。きつと勘違いとかに決まってる。そうだ。そうに違いない。

それなのに。それなのに――

「どうして、こんなにも顔が熱いの……？」

自分の頬に両手を当てる。熱い。茹で上がっているみたいに、両手のひらに熱が伝わる。それだけじゃなく、全身がいつの間にかカーッと火照っていた。

やだ。これじゃあまるで、まるで――

まるで本当に、遥先輩の事が好きみたいじゃない……。

それも、あろうことが恋愛感情で。

「違うよね？ ちょっとのぼせただけだよね……？」

そう何度も自問を繰り返す。けれど、その問いに答えは出ない。答えてくれる人も、またここにはいなかった。

しばし心呼吸。二酸化炭素を吐いて酸素を注入し、なるべく頭を

クリアにする。うん、気安め程度だけど、いくらか落ち着いた。

さつきからずっと自問自答を繰り返していたせいか、かなり時間が過ぎていくような気がした。実際はそんな事ないだろうけど、体が熱くなり過ぎて気怠い。いつもだったらまだもう少しぐらいいは入っていられるのに、もうのぼせてしまったのだろうか。私らしくもない。

疲れているせいもあるのかも。そう気持ちを誤魔化す形で自分に言い聞かせ、私は頭に巻いたタオルをほどいて立ち上がった。

早く自分の部屋に戻ろう。それでゆっくり休もう。

そしたら、気持ちに整理が付くかもしれない。

恋なのか。はたまた、単なる憧れに過ぎないのか。

この気持ちは果たして、どっちのモノなのか――。

「私、本当にどうしちゃったんだろ……」

答えの見えない自問ばかり繰り返して。今までになかった心の動きに動揺して。

煮え切らない自分に嘆息しつつ、いつの間にやらたどり着いていた脱衣場の戸口へとゆっくり手を掛けようとしたところで――

ガラッ

と、自分の意志とは関係なく、唐突に戸口が開かれた。

「え……？」

驚いて、下の方へと向けていた視線を目元付近まで移す。

そこには――

一糸纏わぬ――素っ裸な状態の遙先輩が、驚愕に眼を見開いて立ちずくしていた。



### 第36曲 名もなき小さな恋のうた (後書き)

いつもシリアスな回には実際にある曲名を使っていたりしますが、今回はモンゴル800というグループの曲名を少しアレンジして使ってみました。その方が今回のお話に合ってる気がしたので。

ちなみに使わせていただいたのは「小さな恋のうた」という曲です。良い曲ですよー。

第37曲 されど変態は漫と踊る (前書き)

帰ってきた主人公の巻。

### 第37曲くされど変態は濁と踊るく

目が覚めたら、テーブルの網目（木目状の）が視界に入り込んできた。

何故テーブルが？ と疑問に思いつつ、朦朧する意識の中、何やらズキズキと痛む頭に顔をしかめながら体をゆっくりと起こす。そうして改めて自分の姿勢に着目する。ふむ。どうやら椅子に座ったままテーブルに突っ伏して、ぐっすりと寝てしまっていたようだ。それはそれとして、今何時なのだろうと壁に備え付けられた時計に目をやる。見ると短針が9の所で止まっていた。つまりは夜の九時過ぎ。はてさて、僕はいつからこんな所で寝てしまっていたのだろう？

と、またしても襲ってきた頭痛に顔を歪める。一体何なんだこれ？ 内側から金槌でガンガン小突かれているかの如く鈍痛が響く。よく二日酔いになると頭痛が襲うと聞くが、生憎と僕は酒が飲めない性質（それ以前に未成年だし）なので、それはありえない。そして頭をどこぞにぶつけた覚えも無い。

覚えが無い。

覚えが無い、のだ。

「というか、さっきまで何をしていたのかさえ分からんのだが……」  
呟きつつ、未だ痛む頭に鞭打って記憶を掘り下げてみる。

確かさっきまで——とは言っても、もう数十分前になるのだが——夕食をさわ子先生に用意したその後、僕は進路関係の事で先生と話し込んでいたハズ。してその内容はと問われれば、正直あまり覚え出せない。何か哲学的だか人生感じみた事を先生に説かれていたような気がするのだが。この年で健忘症なのだろうか？ もやもやと記憶に霧が掛かって把握仕切れなかった。

「ま、嘘だけど」

どこぞの戯言遣いじゃあるまいし、僕の記憶力はそこまで壊滅的ではないつもりだ。

要は、はつきりと覚えてしまっているのだ。さわ子先生に、それこそ一切の躊躇も遠慮も配慮も無く、完全にして完璧に完敗と言っているほど精神的にKOされてしまった事を。話を意図的にはぐらかす事も出来ず、今や十八番となった姉さん直伝の戯言すら封じられてしまったのだ。戯言遣いの真似じみた事をしておきながらこの様だ。傑作この上ない話である。

とは言え、全てが全て嘘だったというワケでもなく、気を失う直前——さわ子先生に寄り掛かるところまでで、僕の記憶はすっかり途絶えてしまっている。その先の事は、本当に何も覚えていないのだ。

何か最後、とても大切な事を——何故か懐古心をくすぐられる何かを、呟いていた気もするのだが……。

「はて、何だったわけ？ U・N・オーエンの正体についてとかだったかな？」

いや勿論そんなハズないのだが。彼の正体<sup>か</sup>が知りたければ、クリスティー作品である『そして誰もいなくなった』<sup>ああいちそう</sup>も読んで確認すれば良いだけの話だ。それが亜愛一郎や西之園<sup>にしのその</sup>萌絵<sup>もえ</sup>に頼んでみるとか「それ以前に、現実に存在しない探偵役に頼むだなんて正気の沙汰じゃないって話だけど」

あるいは、こんな事を考えてしまっている僕が既に正気じゃないのか。

閑話休題。いい加減思考を切り変えよう。

んで、先ほどから話に上がっている当のさわ子先生であるが、現在——今僕のいるダイニングにはいない。僕にしてみれば、忽然と姿を消してしまったという心境である。きっと僕が失神していた間に、どこぞへ行ってしまったのだろう。僕という病人と放って置いて。全くもって酷い話ではないか。

「まあ、自業自得みたいなもんなんだけどさ……」

あゝ、とさわ子先生とのやり取りにショック冷めやまず、自堕落気味に天井へと視線を逸らす。電球が煌々と光っていて、やけに眩しい。

「知らない天井……もとい数時間前までは知らなかった天井だ」

某サードチルドレンの台詞を多少アレンジを加えて独白しつつ、そつと瞼を閉じる。そして深く嘆息。

ツツコミ役もないのに一人虚しくボケをかましてしまうほど、僕の精神的ダメージは深いようだ。思っていたより、僕という人間はナイーブでデリケートな人間だったらしい。まさに驚天動地。新しい自分にヘローこんにちは。

「……新しいも何も、生まれた時から知ってた事だけでもさ」

それも、嫌っていうほど。

それこそ、自己嫌悪に陥ってしまうほど。

自分の事なんて、未だかつて一度も好きになった事なんて無いくらいに。

「戯言だよなあ」

と。

いつものように厨二臭い独り言を吐いた、そんな後に――

「あれ？ 遙、まだそこにいたのか？」

お風呂上がりなのか、ポカポカと体から白い湯気を出している遙が、そんな疑問と共に一人リビングへと入って来たのだった。

### 第37曲　されど変態は澪と踊る

前述で記した通り、僕のコンディションはあまり芳しくない。精根尽き果てかけていると言っても過言ではない状態なのだ。

その為、いつものように澪と遊ぶだなんて気分には到底なれない。

いくら湯上がりで上気している顔が可愛いからと言って、いくら寝間着姿がタンクトップにホットパンツという肌色成分が多めだからといって、そのタンクトップから見える胸の谷間が扇状的でいくら素晴らしい眺めだからといって、全然断然、全然断然全然断然襲いかかる気分になんてなれないのである。

だからこうして椅子から立ち上がり、手首と足首を回して筋肉をほぐし、僕と漣までの距離を寸分違わずようしっかり目測しているのも、別に何らかの意図あつてというワケではない。こんなもの寝起きの準備体操に過ぎないのだ。そう、準備体操。運動前にする大切な体操。でないと、上手く体を動かせないしね。

さーで、と。体もほぐれた事だし。

今から漣さんの体を思う存分弄り倒すとしますか！

——以上、長い前振りでありました。えへ

それでは皆さんお待ちかね！

漣さんフィステイバルの開幕だわよっ！！（キリッ）

「漣すうわあああああんツ！！」

そんな奇声と共に、漣さん目掛けてルパンダイブ！（注・服は脱いでません）

狙うは漣さんのおっぱい。そこに僕たち私たちの理想郷が待っている！

「ひいひい！？ 何かこつち来たアアア！？」

漣さんは逃げだした！

しかし まわりこまれて しまった！

「ぎゃあああ！？ 唯一の出入り口がああああ！？」

「ひゅほほほ！ 逃がしませんよ漣しゃん！」

天井付近まで飛翔した勢いを生かして、とつさに廊下へと退避しようとした漣さんの前に降り立って、見事退路を防いでやった。

さすがは僕！ 惚れ惚れとする動きだぜ！

「ひいいい！？ 何なんだよ！ 何をする気なんだよお前は！」

と、瞳に涙を滲ませて、震える体を抑えるように自身の肩を抱く  
澪しゃん。その仕草が余計に僕の嗜虐心をこれ以上なく刺激する。  
ぞくぞくするねえ。

「いやー、澪しゃんにそこまで期待されるだなんて思わなかったよ。  
この卑しいメス豚が！」

「期待なんか一切しとらんわ！ そして誰がメス豚だ！ 誰が！」

「無論、僕だよ？」

「まさかのお前！？」

私じゃなかったんかい！ と即座にツッコむ澪しゃん。ここまで  
の動作に、全く予備動作も間が無かった。

さすがは僕の澪しゃん！ ツツコミの人間国宝や！」

「さて澪しゃん。一緒に生存戦略（子作り）、しましょうか？」

「しねえよ！ したくもねえよ！」

と、我が身を守らんと、より一層肩を抱く澪しゃん。そして胸の  
谷間を強調するように、グイッと寄せられるオパーイ。寄せられる  
オパーイ。寄せられるオパーイ！ 大事な事なので三回言いました。  
も一つついでに、寄せられるオパーイ！

ていうか、改めてこうして見ると、大き過ぎたる澪しゃんの胸。  
美し過ぎるたる澪しゃんの胸。巨乳で美乳過ぎたる澪しゃんの胸！

ああもう辛抱たまらん！

「澪しゃん！ 揉ませてッ！」

「ぎゃ——ッ！？」

耳がつんざめくほどの大音量な悲鳴を上げる澪しゃんに、再びル  
パンダイーブ！（注・だから服は脱いでないってば）

目前に澪しゃんのおっぱいが迫る。そして僕の手も伸びる。鼻の  
下も伸びる！ ふははは！ 澪しゃんのおっぱいゲットだぜーッ！  
と。

あともうちよつとで澪しゃんの胸に触れるという所で。

筋肉隆々としたボディ―ビルダーのおっさん（しかもやたら油っぽくテカテカした）の裸体が、突然視界に飛び込んできた。

「ぐぎゃああアア!? 目がア!? 目がアアア!? 目が痛いよママ――!!」

「はあ。何とかこれのおかげで助かった……」

あまりのショッキング映像と激痛に床をのた打ち回る最中、澪しやんが安堵の溜め息を吐きながら、胸元へと持ってきていた写真をポケットの中へとしまった。な、なんて恐ろしいモノを見せるんだこのヤロー!! おかげで生死の境を垣間見るところだったじゃねえかッ!!

やっとこさ痛みが柔らかいできた目頭を指で押さえつつ、僕は三口ヨロと立ち上がり、キツと澪しやんを睨む。

「おのれ澪しやん! どこでそんな兵器を入手したのだ!？」

「和に借りたんだ。遥にセクハラされそうになったら、この写真を使えって」

くそい! 諸悪の根源は和たんだったのか! なんて余計な物を! どうやら奴とは、いずれちゃんと決着を付けねばならないようだな……!

「つーかさ、よくそんな気持ち悪い物持ち歩けたもんだよね」

「うん。正直言つと私も、すごく恥ずかしかった……」

と、言葉通りに頬を紅潮させる澪しやん。だよー。澪しやん、いかにも男苦手そうだしねー。それも裸の写真だもんねー。随分とまあ、澪しやんらしくらぬ無茶な真似をしたもんだ。

「話は変わるけど、澪しやん一人でどうしたの? 他のみんなは?」「何だろう。ようやくまともな流れになったのに、妙に落ち着かない気分になるのは……」

それはきつと僕の相手をし過ぎて、ボケが無いと逆に不安な心持ちになっているだけなのでは? という仮説が頭をよぎったけど、

黙っておく事にする。

指摘すると『私はギャグ体質じゃない！』とか何とか、澪しゃんがシヨック受けそうだし。

「私はちよつとジューズを飲みにな。唯はもうお風呂に上がって一味お先に自分の部屋に戻って行つたぞ。律と梓がまだ入つてると思うけど、そろそろ上がつてゐる頃なんじゃないか？」

「そっかー」

とどのつまり、澪しゃんは水分補給をしにここまで来ただけなのか。別に僕に逢いに来たとかではなくて。そう思うと、ちよつぱり寂しい気持ちになつたりならなかったり。

「それはそうと澪しゃん」

「何だよ」

「合体しようぜ！」

「めげねえなお前も！」

結局またこのパターンかよ！と頭を抱えながらツッコミを入れる澪しゃん。うん。我ながらただ澪しゃんの事が好きなんだつて思う。ホント澪しゃん一筋だよなー、僕つて。

「じゃあ代わりにオパ―イを揉ませてよ、日笠陽子さん」

「中の人の方で呼ぶな！色んな意味で生々しいわ！」

「分かつたよー。そんじゃあ澪しゃんからのキスで我慢するからさ

ー」

「だからキスもしないつてのに！」

「んもーッ。だったら、澪しゃんは誰とキスをするの！？僕？

それとも僕！？」

「どっちみちお前オンリーじゃねえか！他の選択肢はねえのかよ！」

「他の選択肢つていうか、他の攻略キャラを選ぼうとしても、強制的に僕ルートへと戻されるだけだよ？」

「どんなクソゲーだよー！」

む。クソゲーとは失礼な。僕だけが攻略キャラとか素敵過ぎだろ

常考。相手が澪しゃんに限りの話だがね！

「やれやれ。あれもダメこれもダメ。ホント澪しゃんはワガママなんだから」

「お前が言っな！」

「ちよつとは聖人君子たる僕を見習うがいいよ。手始めにワガママばかりでごめんなちゃいつて謝ってごらん？」

「お前が言っか！」

「ワガママばかりでごめんなちゃい！」

「お前が言っの！？」

と、よほど予想外だったのか、大袈裟なほど仰け反って澪しゃんは驚愕する。あれ？ 何故だか口が勝手に謝罪を述べてしまった。知らず内に、澪しゃんに対して罪悪感でも抱いていたのだろうか。あはは、そんなマツカーサー。もとい、バーサーカー。

「いや、言い直して訂正しきれてねえじゃねえかよ。正しくは“まさか”だろ？」

「澪しゃんも平然と地の文を読むようになってきちゃったねー」

それも如才なくツツコミまで入れてくださって。澪しゃんが完全にメタキヤラへと仲間入りした瞬間でもあった。

改めまして、NHK（日本変人協会）にようこそ！

「私をさりげなく妙な協会に入れるな！ 私はマトモだ！」

「と、犯人はこのように供述しており……」

「変人の次は犯人かよ！ お前の方がよっぽど変人で犯人っぽいじゃねえかよ！」

「なんだとう！？ 僕のどこが変人で犯人だって言うんだい！（パシャパシャ）」

「そうやってケータイのカメラ機能で私の胸を撮ったりするところだ！」

ハッ！ またしても手が勝手に！？ これも澪しゃんの色香による影響だと言っのか！ 恐るべし、澪しゃんのエロス……！

「まったく、せっかくお風呂に入って疲れを取ってきたって言っの

に、またドツと疲れが溜まってしまったじゃねえか……」

「性的な意味で？」

「普通の意味でだ！ 性的な意味って何だよ！ だーもう！ 何でもいいから、さっさとお前も風呂に行けよ！」

あ。そういや僕、まだお風呂に入ってなかったんだっけ？ みんながいると僕の裸を見られてしまう事になるので後で入ろうとは考えていたのだが、今の今までうつかりすっかり忘れてた。濡しやんの事とか濡しやんの事とか濡しやんの事とかで頭がいっぱいだったからなあ。全部濡しやんの事ばっかじゃねえか。

ま、嘘なんだけどさ。

実を明かせば、さわ子先生とのやり取りが頭から離れなかったせいでからだ。

今後、さわ子先生とはどう付き合っていく、とか。

さわ子先生は、一体どれだけ僕の正体について勘付いているのだろう、とか。

そんな思考ばかりで、心に余裕が全然無かったのだ。

それもこうして濡しやんと話している内に、だいぶ軽減してくれただけども。

月並みな言葉ではあるけれど、友達っていいもんだなと思う。

昔の僕からしてみれば、考えられない事だ。

さて、ここいらで流れを戻すが、濡しやんの話だとみんなもうお風呂から上がってるって言うし（律と梓がまだいるとか何とか言っていたような気もするけど）まださわ子先生の動向が気になるところではあるが、みんながない内に僕もお風呂に入って汗を洗い流すでしょうか。寝汗のせいか、服が体にひっついて気持ち悪いし。「そんじゃ濡しやん、お言葉通り、ちよっくらお風呂場に逝ってくるよ」

「はいはい。逝ってらっしゃい」

「そこはちゃんとツッコもうよ！」

そうおざなりに手を振って、いっそ清々しいほどボケをスルーし

やがった薄しやんに、珍しく逆にツツコミを入れる僕なのであった。

### 第37曲〜されど変態は濁と踊る〜（後書き）

前回、あれだけ乙女回路フル回転の少女漫画チック雰囲気だったのにも関わらず、この急激な落差。うん。自分でも書いててビックリさ。やはり遥の青春のラブコメはまちがっている！ なんだって！  
？ それは大変じゃないカ！ でもやめられない止まらない。

そんなこんなのあれやこれやで、まだもう少しばかり遥と梓が遭遇する前の話が続きます。

第38曲　真剣で僕に恋しなさい！！

「結局あの後――挨拶もおざなりに素っ気ない態度で薄しゅんにあしらわれた僕は、深い悲しみと憤りの涙を呑み込んで、独り寂しくお風呂へと向かうのであった……」

「全力全開全身全霊で嘔吐け！　今まさに私の部屋まで上がり込んでおいて、なおかつ寝転びながらポテチを食べて悠々としているお前が言うな！　大体、何だったんだよ前回のオチは！　これじゃあ完全にヤラセじゃねえかつ……」

「ヤラセはせん！　ヤラセはせんよっ！」

「やかましいわ！　でもちよつとだけ上手いなと思っってしまった自分が腹立たしい……」

「そんな事よりも薄しゅん。いい加減そろそろ僕と契約して性奴隷になつてよ……」

「ならねえよ！　なるワケねえだろうが！」

「まったく、ワケが分からないよ。好きという言葉では軽すぎる。愛しているという言葉では曖昧すぎる。だから世界をありがとと言いたいくらい、こんなにも薄しゅんの事を想っているというのに……」

「どつかで聞いた事のあるような台詞を我が物顔で言ってんじゅねえよ！　前にも言った事あるけど、もっと普通の告白はできんのかお前はっ！」

「好き好き大好き超愛してる……」

「舞城王太郎か！」

「月が、綺麗ですね」

「夏目漱石か！」

「愛していると言ってくれ！」

「豊川悦司と常盤貴子か！　って私が告白する立場になってどうする！？」

「んもう！　どうしてそんなにも僕の告白をことごとく断るの！？　ドラえもんだって何回も断れ続けたら、泣きながら独りで離れ離れになった仲間を探しちゃうんだからね！」

「例えが古いわ！　古い上にマニアック過ぎて、今頃若い世代の読者の大半が首を傾げてるぞ！！」

「やれやれ、仕方ないな。そんなどっち付かずの優柔不断な澪しやんに、僕が選択権を与えてやるうじやまいか。僕の性奴隷になるかならないか、『はい／＼YES』どちらか好きな方を選びたまえ」

「選択の余地がねえよ！」

「ここで澪しやんが僕を性奴隷にするという第三の選択肢を選んでもいいんだぜ！」

「No Thank youだ！！」

「第二期後期ED曲っ！？」

「茶番はいいからさっさと出てってくれよ！　私は疲れてんだ！

や・す・み・た・い・ん・だ！」

「ふふ、よかるう。しかしながら、この僕の無限の強欲なる魔の手アンリミテッドセクシャルハラスから逃れられたらの話だがね！（キリッ）」

「よし分かった。だが、別にお前を倒してしまっても構わんのだろう？（　　　　　）」

「……………ゑ？」

その後、悪鬼羅刹なんて言葉も生ぬるいほど、澪しやんによる暴力と暴虐の限りを尽くされ、床に倒れ伏せる哀れな男の娘の姿がそこにあった。

ていうか、僕だった。

第38曲 真剣で僕に恋しなさい！！

「いてて。澪しゃんめ、いつの間にあんな戦闘力を身に付けていたんだ……」

澪しゃんによつて痛み付けられた全身をいたわりながら、僕は当初の目的通り、お風呂場へと歩みを進める。なんだかラスボスにあつさりとやられて敗走する勇者みたいな気分だ。どちらかと言うと、勇者ではなく愚者の方が正しい気はするが。

うう。それにしても、まだあちこちズキズキと痛みやがるぜ。こうして着替えとバスタオルを持つているだけでも傷に障るつてなくらいである。最悪、箇所によつては骨の一本も持つていかれているかもしれない。まあ僕の過負荷である『大嘘吐きマインスオールフィクション』さえあれば、こんな怪我あつさりと無かつた事に出来るけどもね！ 当然のように嘘だけでもね！

ともあれ、澪しゃんのおかげもあつて精神的にもだいぶ余裕が生まれただけでも御の字としておこつ。その対価としてHPが赤字に点滅してしまつたワケではあるが、それも甘んじて受け入れようではないか。何なら、澪しゃんの攻撃ならばありとあらゆる全てをプレイとして受け入れる所存である。三割くらいは嘘なのよさ。

などと変態的な事を夢想（ある意味無双でも可）しつつ、僕以外誰一人として見当たらない廊下をしずしずと歩き続ける。ふと横を見ると、夜の帷が降りて真つ暗闇な外をスクリーンに僕の姿がぼんやりと映し出された窓に目が入った。近くは木々はひしめき合っており、耳をすませばフクロウの鳴き声すら拝聴できそうなほどのムード感がある。フクロウとまではいかずとも、夏期限定の様々な虫達が奏でる風流な音色が、室内にいる僕の耳元まで届けていた。誰も賛美を送る事の無いそのオーケストラは、きっと朝日の光が地に満ち足りるまで続けられる事だろう。などと詩人じみた感傷に浸る事によつて時間を浪費させてみる。

それにしてもしかし、ホント広いな此処は。露天風呂まで行くのにここまで時間の掛かる（かれこれ五分以上は経っている）別荘なんて初めてだ。別荘って言うか、これじゃあ旅館だな。次に合宿する時は、ホテルか何かと見紛うほどの物件に当たりそうである。提供者がムギお嬢様だけに可能性は否めない点が怖いところだ。げに恐るるは琴吹財閥の底力よ……。

そうこうしている内に、ようやく暖簾の掛けられた戸が見えて来た。きつとあそこが露天風呂なのだろう。

ようやっと着いたか——と徒労の溜め息を吐くと同時に、

ガラッ

と唐突に戸が開かれた。

「あ、遙……」

キャミソールに膝元でカットされたジーンズ。ヘアバンドは付けられていないが、肩にタオルをかけて脱いだ衣服が入っているのだろうと思われる手提げバックを片手に携えた律が、目を丸くしてそこに立っていた。

「よ、よお」

「やあ、りったん」

何故だか妙にぎこちなく硬い笑みを浮かべて片手を上げて見せた律に、こっちはフランクに挨拶を返す。

「今お風呂から上がったところかい？」

「まあ、な」

言いつつ、律がこっちに歩み寄る。でも、どこかやっぱり遠慮がちと言うか、歩幅が狭い。僕との内面的な距離を掴みかねている、そんな雰囲気漂っていた。

色々と変なりアクションにはてなと小首を傾げつつも、「りったんが最後の一人？」と僕は至って平静に訊ねてみる。

「あーいや、いるっちゃいるが今はそっとしておいた方が、」と

言いかけて「あ、ちょっと待てよ。あまり変な事は言わない方がいいかも……。うん、もしかしたら逆転ホームランで本人がその気になって直接口に出すかもしれないし。ここは知らぬ存ぜぬを通した方がサプライズ的にも……」と何やら思案顔でぶつぶつ呟く律。

ん？ 逆転ホームラン？ サプライズ？？？

「あ、ああ。私が最後の一人だよ。あゝ、マジで良いお湯だったゝ」  
「……？ ふーん」

散々思わせ振りの事を呟いておきながら、わざとらしくあっさり  
と無かった事にした律に疑念を抱きつつも、とりあえず相槌を打つ  
ておくに留めておいた。色々気になる部分はあったが、変に藪を  
突ついて蛇を出す危険は避けたいし。その蛇が猛毒持ちだった日には  
目も当てられない。

「それで、遥も今からお風呂に行くところだったのか？」

「うん。お風呂でイクところ」

「そう……ん？ お風呂“で”？ “で”？」

日本語おかしくないか？ と不思議に眉を寄せて、律はツッコ  
ミを入れてくる。でもどこか柔和というか、錆びた包丁みたく切れ  
味が悪かった。ちなみにいつもだったら逆刃刀並みの切れ味だ。ど  
っちにしても切れねえじゃねえか。

「りったん、どうかしたの？」

この僕のボケを生かしきれずに殺すとは何事ぞ、とちよつとだけ  
辟易した感情を顔で訴えつつ、先を続ける。「らしくないじゃん。  
調子でも悪いの？」

「あー。いや、なんつーかさ……」伏せた目線を時折チラチラと  
向けながら、律はそのまま口を噤んだ。そして何かを決断したかの  
ようにぐつと両の手で握り拳を作った後、

「その……悪かった、な」

と言った。

「悪かったって、何がさ？」

「肝試しの時だよ。私、お前に変な事言っちゃったろ？」

——本当はこういうの、好きじゃないんだろ？——

思い出されるのは、あの時の律の言葉。

どう唯達を驚かそうかと笑いながら談議していた最中に、不意に律が僕の心を言葉のナイフで抉ってみせたあの時の記憶。それが脳裏に眩しくフラッシュバックし、意識がチカチカと瞬き始めた。

「その、ごめんな。ひよつとしたら私、すごく無神経な事言っただけじゃないかって、さっきまで反省してたんだ。やっぱ、気にしてたりする？」

頭をボリボリと掻きながら上目遣いで窺ってくる律に、僕は明滅とした意識を首を軽く振る事で叱咤し、視界をクリアにさせる。危ない。またさわ子先生の時みたく意識を落とすところだった。

ともあれ、そうか。妙によそよそしくしているとは思っていたが、あの時の会話を気に掛けていたせいだったのか。みんなという時はいつも通りに振る舞っていたから、律がそんな思い悩んでいるようには見えなかった。あるいは、せつかくの楽しい雰囲気壊すまいとする、ムードメーカーの律らしい気遣いだったのかもしれない。

「別に気にして」います。現在進行系で。でも今それを言うところ後の関係に悪影響を及ぼしかねないので、僕の専売特許でもある戯言を弄して場を流すでしょう「いないよ。僕の心は象が踏んでも壊れない仕様になっているからね」

「そ、そっか。なら良かった」

と、安堵の溜め息を漏らす律。心なしか、表情も若干柔らいだ気もしなくもない。

「あんなの、いつまでも気にしてたの？ りったんって以外にデリケートなんだね」

「……うつせえよ。お前と違って私のハートは豆腐製なんだ」

味噌汁に入れたら美味しそうなハートだった（冷や奴でも可）。

ひとまず軽口を叩ける分には、調子を取り戻してくれたようで何よりだ。でないと、僕の方が何だか調子が狂う。

「はあ」。まあ変にこじれずに済んで良かったよ」再度深く息を

吐いて、「あはっ」と律は小さく笑みを零した。

「ずっと不安だったんだ。もしもこのまま変に遥との仲が悪くなつて、唯達とも疎遠になってしまったらって」

「……………」

黙る僕。未だ律は笑みを浮かべたままだが、その言葉にはあり得たかもしれない最悪の未来を想起してしまつて、改めて平和な現実を認識して胸をなで下ろした、そんな何とも言えない微妙たる表情だった。

「……そんな風に思ってくれてたなんて、正直以外だったよ」

間を空いたのを見計らつて、今度は戯言を使わずに本心を敢えてさらけ出した。

「初めて律と会つた時、てっきり嫌われているもんかと思つてたからさ」

ある程度言葉を選びつつ、相手を傷つけないよう配慮して、自分の気持ちを吐露する。そんな僕に律はギョツと視線を上げて眼を見開いた後、

「気が付いてたのか……」

とバツが悪そうに口を開いた。

「何となくだけだね。たまに僕を見てくる視線とかでそうなんじゃないのかなって」

ああいった奇異な視線は何度もその身に受けてきた。幼少な頃からずっと。

だからこそ、ああいった異端者を見る視線にはすぐ気が付くようになっていた。

群集から外れた異なる個性は、いつだって多勢に迫害を受けるもの。遺伝子異常で生まれ白いカラスが、黒いカラスの大群に狙われたりするのもそのせいだ。そしてそれは、僕とて例外ではなかった。だからこそ、僕は人の視線に敏感になってしまったのだ。いや、ここは人の悪意と言うべきか。

ゆえに、僕に向けられる視線は、それが黒々とした感情から来て

いるものならば、誰であろうと判別出来てしまうのだ。反面、その習慣のせいもあってか、かなり人間嫌いになってしまった時期があったりもしたが。早過ぎた反抗期が家族にではなく同じ人類に向けられてしまったのだから、その後の僕が如何に歪んだ人格を形成する事となったかは、想像に難くないであろうと思う。今となつては、その時の周囲に対する憎悪よりも懐古心の方が勝つてしまつているのだから不思議な話である。ぶつちやけ、あまり記憶に残つていない部分も多々あるけど。どうやら時の流れは傷を塞ぐだけでなく、思い出も霧の中へと霞ませる効能があるようだ。

「あーいや、言い訳になるかもしれないけどもさ」とくだらない過去に浸つていたその時、律が目を右へ左へと泳がせながら口を開く。「別に心底嫌つてたつてワケじゃないんだぜ？　ただ、ちょっと苦手なタイプくらいには思つてたけれど……」

「うん。それも途中で気づいてた」

律のは悪意のそれとは違う、どこか一定以上の距離を保とうとしたがつている——そんな危険物から身を引こうとしている視線のやり方だった。まあ昔の僕を知っていたならばいざ知らず、まだ転校したての頃だったし、大半のクラスメートがそんな感じだったから、大して気にはしていなかったけれど。

「そ、そうか……。あ、でも今はそんな事全然ないんだぞ？　もうお前の事苦手だなんて思つてないし、それに——」

一拍置いて、ハツと魅入られるくらい穏やかな笑顔を浮かべた後、律は言った。

「今は遥と友達になれて良かったつて、本当にそう思っているから」

何となく、世界が静止したかのように見えた。いや、静止しているのは僕の思考の方か。律のまさかの友達で良かった発言に静止というか、突然非常停止ボタンを押されて僕の中の小人さんがパニックに陥っている状態というか。

えー、まあ単刀直入に申し上げますと。

今、ものすつげー恥ずかしい気分です。これ。

始終いきなり閉口した僕を訝しげに見ていた律だったが、きつと赤くなっていく僕の顔に気付いたせいなのだろう、「あつ」と律は小さく声を上げた後、「いやいや、今のは言葉の綾というか、ついその場のノリでと言うか……！」と誤魔化しにもならない釈明を始めた。同時に、砂漠に置かれた温度計並みに顔がみるみるうちに赤色が上昇していく。

うわあ。こう目に見えて焦っている人を見ると逆に冷静になれるとか話に聞くけれど、こういった場合は余計羞恥がダイレクトに流れ込んでくるもんなんだな。もう顔すら通り越して全身が熱いつたらない。郷ひろみ風に言うところ『あーちち、あーち』な状態である。

今まで告白された事なんて無いが、いざ異性から告白されるとこんな気持ちになるのだろうか。どうせ告白されるならもつとムードのある方が良いなあと乙女的な思考に耽る事によって、心に積もった羞恥の山を除去する事に徹した。別に恋人になって下さいと言われたワケでも無いのに、何でも胸の動悸が止まらないのか。とりあえず、クールになれクールになれ。圭一君もよく言っていたじゃないか。

「うう。ううッ。だ、黙ってないで何か言ってくれよ遙！ でないと恥ずかしさのあまり死ぬぞ私が！」

平常心を自身に注入している最中に、律がブンブンと両腕を振り回して、逆ギレとも取れる無茶振りを寄越してきた。そのままそのコメントを力の限りブン投げ返してやりてえ。

とは言え、確かにこのままだと別の意味で今後の関係がこじれかねないな（思春期カップルがいつまでも経っても手を握らないみたいなノリで）。

むう。こっちも律ほどでもないとは言え、まだ心情的にテンパっている状態なのだが。だが致し方あるまい。ここは何でももいいから喋った方が気も紛れるかもしれない。というか、この現状に僕が

堪えられない。

「あーまあなんだ。どうでもいいような言葉しか思い浮かばないんだけど、とりあえず――」

そう前置いた後、気分を落ち着かせる為にも一旦深く肺呼吸した後、僕は多少上擦ったままの声で言葉を吐き出した。

「水城奈々さん、三年連続紅白歌合戦出場おめでとう！」

「ほんとにどうでもいいような事だった！」

ツツコミと共に大仰に仰け反って見せる律。おお、まるで一昔前のイナバウアーみたいだ。

「って、どうでもいいとは何事か！ 声優が三年連続で紅白に出れるなんてとんでもない偉業なのだぞ！？ そんなけしからん事を言う奴は、氷山の一角に頭をぶつけて流血した後、全裸で南極の極寒の海に全てのリア充と共に沈め！」

「先に言ったのはお前だよお前！ あとさりげなくリア充を滅ぼそうとすんなよっ！？」

「別にいいじゃんリア充なんて。アイツら、僕ら非リア充にしてみれば目に毒過ぎるし。どうせならリア充どもガンガン逝かそうぜッ  
！！」

「いのちをだいじに！ てか、それ本気で言ってるんじゃないよな！？ 眼が狂人じみた感じでイツちゃってて怖過ぎるんだが！？」

「本気も本気！ 本気と書いてボツキよ！」

「マジと読めマジと！ 卑猥な表現すんな！ まあある意味下半身が本気な状態ではあるけれども！」

「あらヤダりったんたら。やけに男の子の体に詳しいじゃない。なに？ 身近に見せてくれる相手でもいたのかね？」

「いねーよ、そんな相手。まあ小さい頃に弟とか父親とかと一緒に入っていたから、一応見慣れてはいたけど。そっぴや昔、『お父さんがよく見てるエッチな本に出てくる男の人より、お父さんの方が

ちっちゃいね』って言ったら、すげー落ち込んでたなあ」

「なにその核爆弾発言」

それは死刑宣告にも似た、あまりに無垢で残酷な言葉だった。

それ、男にとつてのザキだから。命中率100%の即死呪文だからッ！  
むしろ律の奴、分かってて言っただんじやなかるうか。もしそうだとすると、恐怖に怯え震える事実だった。それ以前に、エロ本なんて読むなよ。読まれた側としては、かなりダメージでかいぞ。

「あははっ」

と、律が唐突に腹を抱えて笑い始めた。今までのどこか張り詰めた空気が取り払われ、いつもの僕と律のやり取りらしい砕けた雰囲気が出来上がっていた。

そのせいもあってか、いつの間にか律と交えて——律のそれとは若干控えめではあったが——口角を上げて笑う僕がいた。

そうしてひとしきり笑った後、

「はは。やっぱこっちの方が私らしいな」

「そうだな」

肯定して頷く僕。少なくとも、こっちの方が落ち着くのは確かだ。

「さて、と」んゝと腕を上げて伸びをした後、律は言う。「言いたい事も言っだし、あまり長話もするのも悪いから、私もう行くな」

「ああ、ヴん」

軽く手を振って背を向けた律に、僕も慌てて手を振り返す。突然の事だから少しびっくりして、変に語尾が裏返ってしまった。まあまだ律の顔も火照っていたし、まだ恥ずかしさが抜けなくて早くこの場から離れたかったのかもしれない。

テコテコと小走り気味に去っていく律を見送る途中で、不意に喉から言葉が逆流してくる感覚がした。何か律に言わなければならぬ言葉があるような、そんな強迫観念に襲われる。

「律！」

気が付けば、自然と律を呼び止めていた。僕の張り上げた声に律は「ん？」とくるっと振り返り、「どした？」と笑みを浮かべて訊

ねてきた。

「あの、さ」

「うん」

律が僕をジツと見つめて、次の言葉を待ってくれている。急かされてはいるワケでもないのに「あー、なんつーか。その、」と言葉に詰まり、声が濁る。何か言わないといけない気がしたのに、いざとなると何も出てこない。僕は、本当に何を言おうとして――

律を見る。不思議そうにしながらも、それでも笑顔で待ち続けてくれている律がいる。そんな律を見ている内に、「ああ……」と僕は小さく声を零した。

分かった。

僕が律に言いたかった事が。

僕が律に言いたかったのは――

「……僕も、良かったと思ってるよ」

「？ 何がだ？」

「律と友達になれて、本当に良かったって思ってる」

「ぶほっ！」

律が盛大に吹きだした。ついで、ゲホゲホと噎せ始めた。なんだ。なんなんだ。その微妙に失礼な反応は。こちらキャラじゃない発言をして胸中をもう一人の僕がのた打ち回っているというのに。

「ああ悪い悪い。ちよつと予想外の出来事にビックリしちゃってさ」

僕の抗議じみた表情を見てのものだろう、律はひーひーふーと呼吸を整えた後（何故にラマーズ法？）、軽く片手を上げて詫びを入れた。

「にしても、いきなりどうしたんだよ。お前らしくない事を言い始めちゃってさ」

「りったんを見習っただけさ。このままりっただけ恥ずかしい思いをさせるワケにはいかないと、脳内会議で決定されてね。あまりに素晴らしい気遣い振りに、惚れかけちゃったりした？」

「しねえよ。それよりも、また蒸し返すなよ。私の恥ずかしい言葉

をさ」

半眼で睨む律。律としても、さっさと早く忘れてしまいたい記憶なのだろう。同じ立場になってしまった人間として共感を禁じ得ない。なら言つなよ、という話でもあるが。

「まあでも、ありがとうな」

「え？」

「友達で良かったって言ってくれて。遥にそう言ってもらうのを、ずっと待ってたからさ。正直、すごく嬉しい」

「律……」

見ると、律は若干照れを含みつつも、朗らかに笑んでいた。

待ちわびていた人が、ようやくと柵しがらみから抜け出せてこちら側にこれた事を心から喜ぶように、律は慈愛に満ちた笑顔を浮かべていた。「そんじゃあ、今度こそ私行くな。ゆつくり休めよ」

言つや否や、律は足早に廊下を駆けて、そのまま角を曲がって去ってしまった。

律の思わぬ言葉に茫然としていたせい、ろくに別れの挨拶も出来なかった。あのバカみたいにうるさい活発娘から、あんな殊勝な言葉が聞ける日が来ようとは。すわ夢かと頬をつねって現実かどうか確認を入れる。ちゃんと痛かった。

「つまり、現実って事が……」

よくよく、赤裸々トークばかり続く日だな、今日は。一体どんなけ羞恥に身を焦がせば気が済むんだ。まあ去り際、律の方が今までのやり取りの中で一番恥ずかしそうにしていたし、今頃自分の発言を思い出して悶えていそうだけでも。ご愁傷様です。

それはそれとして。

「ずっと待っていた、か……」

僕としては、ずっと前から律の事を友達だと思っていたのだが、律はそうでなかったという事なのだろうか。

いや、違うな。

そうじゃなくて、友達だと思っていた相手が、実はこちらの事を

友達だと思っていけないんじゃないか——そんな不安に、きっと律は捕らわれていたのだろう。もしもそうだとするならば、やはりどこか律は、僕という不自然で不十分で——何よりも不格好で不自由な存在である僕に、それとなく気付いていたのかもしれない。

そういえば、律と初めて相對した時も、僕を正体不明の未確認生物でも見るように、怪訝な眼差しで見ていた事があつたつけ。

僕ではない他の誰かを見ようとしていた、そんな研ぎ澄まされた鋭利な眼で。

だからこそ過剰に道化を演じてみたりはしたのだが……。

「色々と上手くいかないもんだね、姉さん……」

僕以外誰もいない空虚とした廊下で、独り呟く。もしも姉さんがこの場にいたら、

『ごちゃごちゃと小難しく考え過ぎなんだよ、お前は。おら、ブン殴って頭をカラッポにしてやるから、その阿呆な思考に迷い込んだ頭を差し出せや』

と、げんこつの一つでも頂戴して叱声を受けていたんだろうなあ。そう考えると、フツと自然に苦笑が漏れてしまった。げんこつ一つどころか、何だかんだ言つてプロレス技もかけてくる困った姉でもあるが。

「……………」

人生は難しい。それが罪滅ぼしの為なら尚更。自分ではない誰かの為だけに徹するなら、それ以上に。

「……でもね、姉さん。友達つて良かったっていうのは、本当なんだ」

今感じているもの全てが、本来姉さんにあるべきものだとしても、そうあるべきものと、自覚はしていても。

「澪や律達と一緒にいられて、すごく楽しいんだ——」

この気持ちだけは、嘘にはできない。  
嘘にだけは、したくない。

もしも。

もしもこの幸せを僕のモノにしたいと言ったら。

この幸せをこのまま僕が受け取りたいと、あまりに罪深い事を願ったら。

貴方は、僕を殺してくれますか――？

「……甘えた事を言っただけじゃねえよ」

幸せになる権利なんか無いくせに。

死ぬ権利すら無いくせに。

姉殺しの、死すら生ぬるい罪人のくせに。

「最高に傑作で、最低に戯言だ」

そう言い締める事で自己嫌悪に陥った思考を押し止め、僕は頭を切り替えるように露呈風呂の戸を開けた。

そこに、中野梓がいるとも知らずに。

第38曲 真剣で僕に恋しなさい!! (後書き)

久しぶりの更新だったせいか、文字数が多くなった上にマニアックな路線に走ってしまったぜ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8704p/>

---

女装男子が送るけいおんライフ！

2011年12月18日07時46分発行